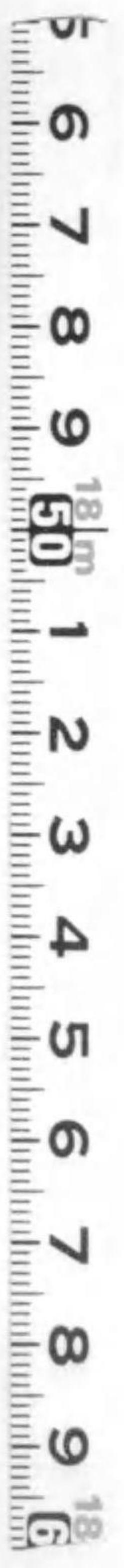


324

506

×  
複写



始







現代相似禪評論

大正  
5. 8. 8  
內交



## 序

說禪學徒に示す

扶桑國裡佛法なし、諸人こゝに於てきつく眼を着くべし、佛法なしとは言はじ、唯是れ佛道の導師なし、名を比丘に假り形を沙門を比し相似の語言を擧して渡世の具とするの悪知識のみありて、生死の牢關を透脱し不傳の妙道を了明したる人天の師なき也。相似の宗匠淨身一時の安逸の爲に道眼未明にして已悟の境を説き、古人機縁を禪賣して勢利を網す、恰好を説き得、相似を述べ得るも、争奈せん命根斷せず、情妄空せず、心地茫茫として迷倒窮りなきを。經教説くが如くんば、末世には魔波旬の徒、佛袈裟を披し相似の法を説いて佛法を破滅すと、佛豈に人を賺さんや。海東の佛法波旬潛入してより年久しく今や全く正法此の國に滅びて魔類充滿せり、純白貞實真正求道の士、初未だ參學の眼を具せざるが爲に、誤つて此の野狐の窠窟に投じ般若種性を滅却せらるゝ者尠からず、法王暫く野狐の家風を檢して惡毒の恐るべきを了知せり。是故に眼諸人の溺没を見るに堪へず、特に出頭し來つて諸人の爲に此の方藥を投ず。速に頭を回して、信受し雜毒を吐却せば庶幾は臭爛敗壞を免るゝを得ん、時劫過ぎ易し、永劫餘殃を受けしむる莫れ。



切に慕道の眞士に白す、鵝林の説禪是れ道に非ず、最初隻手音聲より末後水月道場に至る迄從頭に注解して備が與に片餉の間に通會せしむる亦難からず、而も法王多劫を経て今生に出頭し來り、佛法二字の間に展轉して未だ少分の相應だになし、見よく佛法高うして高く難うして難し、鵝林の説禪を以て此に擬す、跛龍神龍も以て喩となすに足らず、此を思へ此を思へ。

鵝林の庶孫に示す

備等鵝林の庶孫、野狐身を以て三衣下に撞入し、佛語祖語を露いで學人の眼を瞎却す、無佛國土の住民邪正を知らざるの故に備等を喚んで老師となし師家となし善知識となし宗匠となす。法王備等諸人を一括して總に鵝林の庶孫となす、庶の一字諸人違つて會すや、貪愛情妄を以ての故に縦に嗣を作り、鵝林以降展轉して今に到る庶の一字備等瞎禿子漸惶滿面なるなきを得んや。大海死屍を留めず、諸人野狐身を脱して佛法海中の人たらんと要せば、直に須く大衆面前に向つて從上妄談般若欺罔賢聖の罪を謝し、半間茅屋に去つて冷生すると三二十年せよ。

法王恁麼の説話、諸人信不及恐らくは急に信すること能はざらん、多くは見て以て或は忿懣し、或は嗤笑し、又或は此を以て謗佛謗法となし輕毀三寶となさん。那時急に頭を回して此の一念の絡索何處よりか來ると見るべし、這裏に向つて見得して分明ならば妨げず法王の爲に師となることを。然かりと

雖、法を求むる所、備が相似の語言を擧し、或は揚眉瞬目又手拂袖するに非ざるを記せよ。

佛法備が會する處なく、生死備が脱する處なし、諸人無始已來展轉流浪して今生此の野狐身に墮す、野狐は即ち是れ畜生道、苦患何ぞ限らん、好し法王今日一轉語を下して備をして野狐身を脱せしめん。

不據大床牀 不膺人師位

諸人臨羅尼の會をなすこと莫れ、是れ唱し了つて便ち休せざれ、咄低能兒。

破有法王



凡例

- 一 著者破有法王は無佛世界の現代に於る本色道人なるを以て、現代相似の宗匠を師とせず、慕直に三世の諸佛歴代の祖師に師事せり、所以に古代明眼の宗師を喚んで悉く先師となす、書中臨濟中峯拔隊澤水等の古徳を以て先師と稱せるもの、理に於て然るのみ。
- 二 本書の要とする所は、現代臨濟禪の真相を剖析して、其の謗法の罪を糺し、室内を曝露して、邪師をして師位を下るの已むなきに至らしめ、學人向道の進路を直指して、其の迷妄を覺破するに在り。書中說禪或は相似禪と云へるは、直に白隠以降傳承し來れる現代の臨濟禪を指せるもの也。
- 三 本書中に表はれたる人名は故人のみ其名を記し、現今生存せる者の名は凡て之を祕し、千字文の順序に隨ひて、天氏・地氏・玄氏等の符號を用ひたり、是れ諸人の情妄を引起するを減せん爲の慈旨に出づ。

現代相似禪評論

目次

第一篇 正法……………(一)

第一章 生死事大……………(一)

第二章 悟證の大事……………(七)

第二篇 現代相似禪概観……………(一六)

第一章 學人論……………(一六)

第一節 雲水……………(一七)

第二節 居士……………(二〇)

第二章 師家論……………(二四)

第一節 總說……………(二四)

第二節 師家の相似語言……………(二七)

第三節 師家平常の言行……………(三〇)



第四節 師家の心頭……………(三五)

第五節 結論(真正の導師とは何ぞや)……………(四〇)

第三章 室内論……………(四四)

第一節 公案の真義……………(四四)

第二節 相似禪内容の一般……………(四九)

第三節 見性論……………(五五)

第四節 室内穿鑿の概評……………(六一)

第五節 嗣法論……………(六六)

第六節 相似禪家風の異同……………(六九)

**第三篇 相似禪内容詳論……………(七六)**

第一章 隻手音聲及趙州無字……………(七六)

第二章 雜則部……………(七七)

第三章 本則部……………(七八)

第四章 五位……………(三四)

第五章 十重禁……………(三五)

第六章 虛堂代別……………(三六)

第七章 最後の牢關……………(三七)

**第四篇 結論……………(三〇九)**

第一章 相似禪の無意義を示す……………(三〇九)

第二章 白隠論……………(三四)

第一節 行狀に關する疑義……………(三四)

第二節 悟機に就ての疑義……………(三〇)

附 東嶺の相似悟……………(三〇)

第三節 修行事に關する識見の謬妄……………(三九)

一 見性に對する謬見……………(三九)

二 關鎖法財の誤解……………(三三)



目次

三 悟後の修行……………(三五)

四 餘言……………(三八)

第四節 室内の杜撰……………(三八)

第五節 隻手音聲の批評……………(三四)

附録 澤水法語……………(五)

拔隊法語……………(六一)

目次了

現代相似禪評論

破有法王著

第一篇 正法

第一章 生死事大

茲に述べんとするは佛法の本體なり、この故に即今三世の諸佛、歴代の祖師一時に出興し來つて法輪を轉じ玉ふとも、毫末の相違あるべからず。

破有法王、道に於て未だ少分の相應なく、日夜慚を抱くといへども、夙に般若の正因を植ゑ熏煉成熟多劫を経て今生に出頭し來れり、是の故に求道の正志佛祖と別ならず、向道の所信誰人か敢て是非せん、たゞ道眼未だ明ならざるが故に頻に退休を念とし、草衣垢面を望む、學道常に頭燃を拂ふが如く、考妣に喪するが如く、做工夫少間なしと雖も、而も魔類形を沙門に比して相似の法を擧揚し、惡毒を流布して後學を誑惑せるを視るに忍びず、十方兄弟を憐むが爲に強ひて剪爪の工を割いて、一篇の葛



藤を打し、向道の進路を示して野狐の窠窟に陥るならしめんとす、諸人それ襟を正して諦信諦聽せよ。

世尊、生を王宮に示して頓に萬乘の尊榮を捨て、雪山に六年端坐の勝行を行じて終に正覺を成じ玉ふ。且つ世尊何が故ぞ世榮を棄て、備に凍餒の苦を嘗め玉ふ、惟是れ自己を把つて一件の大事となし、自心を洞明して生死根塵を透脱し玉はんとなり。世尊成道の後、衆生の迷妄に隨つて名字を建立し、末後大覺圓滿の心を將つて直に摩訶迦葉に付囑し玉ふ。爾りしより歴代の諸祖、萬々出世して此の心を傳持し、佛に代つて化を揚げ、普く群生を度し、燈々相聯、震旦を経て海東に及び、永く佛種性をして斷絶せざらしむ。諸祖の心、佛心と別ならざるが故に、法燈の相續によつて佛法の衰滅なし。此等の々々相承の祖師、悉く生死大事の爲にして自心を洞明し、佛知見に承當し玉ふ、其の報縁異なるによりて、垂化の跡萬般なりと雖も、等しく心印を傳へて人天に師たり。

生死無常是れ佛法の要旨、生死了脱是れ佛法の本義なり、苟くも生死大事の爲にするにあらずんば、是れ佛法にあらず。經に謂く三世の如來咸一大事因縁の爲に世に出現し、衆生をして佛知見に開示悟入せしめんと欲すと。佛知見とは生死根塵を破るの利具なり。佛祖化權の法門施設萬種なりと雖も、皆此の大事因縁によつて建立する所、名常に異にして體常に同じ、必ず衆生の本際を悟り、生死情妄

を越えんことを欲す。古に云く、參禪秘訣なし、唯生死の切を要すと。若し此の大事の爲にせずんば百千の佛法も何の殊勝かあらん。

近時、魔波旬佛袈裟を披して相似の法を説く、また生死事大無常迅速を以て辭とせざるなし、惟夫れ佛語を裨賣して勢利を網せんとするが故に、相似の音聲のみあつて曾て正法と相應せず、情妄を引起し衆生を誑惑して、終に魔道に牽引せずんば已まず。所以に古佛、法王をして直截に説かしめ、邪正を辯じ佛魔を別つて、正法の歸趣を示したまふ。先師中峯曰く

凡そ學者門を跨ぐ、生死事大無常迅速の爲にするを以て辭とせざる者あるなし。其の所以を扣くに逮んで、或者は茫然として對を加ふる所なく、或者は謂く、母胎を出でてより、命光遷謝するに至る迄、其の生、來を知らず死、去を知らず是れ生死なりと。又或は終日竟夜念慮遷流し、後念倏ち生じ前念忽ち滅し取捨去來紛然として緒なく、寢興變化未だ嘗て暫くも歇まざるを指して皆生死なりと。是の説、分段、變易二種の生死を越えず、理を極めて之を原ぬるに皆枝葉のみ、根本にあらざる也。根本を謂は、性眞圓明本、生滅去來の相なし。良に覺えず警に妄心を起すに由つて、迷うて本心を失し、虚に輪轉を受く。故を以て教中に謂く、迷へば則ち生死始まり、悟れば則ち輪廻息むと。蓋し迷に根し妄に本づけば也。楞嚴會上に富樓那問ふ、清淨本然云何ぞ忽ち山河大地を生ずと。此れ蓋し眞に迷ひ妄



を起し生死を成立するの因を問ふ、佛答ふるに大地山河皆如來藏を以てす。乃ち妄を返して真に旋し、生死を破除するの要旨なり。迷を以ての故に妄を引いて心に入れ、積集して倒見す。圓覺に之を四方に處を易ふる如きに喩ふ。迷妄眼に在らば、惟所見の色のみ是れ生死なるにあらず、種々の色象を離れて、純ら空を見るに至るも空も亦是れ生死なり。迷妄耳に在らば、惟所聞の聲のみ是れ生死なるにあらず、乃至聲を離れ寂に即くも、當に知るべし、其の湛寂聞くことなき亦是れ生死なるを。以至、意、善惡を緣するも、惟惡のみ生死なるにあらず、善も亦未だ嘗て生死ならずんばあらず。積んで念慮を爲すも、惟動念のみ是れ生死なるにあらず、息念に至るも亦是れ生死なり。緣を以て之に配せば、惟染緣のみ是れ生死なるにあらず、其の淨緣も亦是れ生死なり。覺を以て之を論せば、惟不覺のみ是れ生死なるにあらず、其の念起即覺も亦是れ生死なり。仰いで之を觀る之を天と謂ひ、俯して之を視る之を地と謂ひ、廣くして之を窺ふ之を法界と謂ひ、大にして之を量る之を虚空と謂ふも、總に見分を出でず、皆生死なり。當に知るべし、此の心未だ即ち了悟せずんば其をして立地に成佛せしむるも、要且つ亦生死網中にあるを。原ぬるに夫れ、生死の大、凡を欺き聖を壓し、古を籠め今を罩めて、未だ一法の其の淪溺に遭はざる者あらず、故を以て之を目して大事因縁と曰ふ。有等の闡提漢、箇の生死を説くを聞いて乃ち頭を掉つて顧みず、遽に經書文字中の相似の語言を引いて謂く、法性清淨猶虛

空の如し、世界壞する時此の性壞せず、圓滿湛寂動搖を過絶し、聲色全眞見聞味さす、所謂佛身無爲諸數に墮せず、何の處にか更に生死去來の跡を求めんと。生何處より來ると問ふあらば便ち道く、水流れて元海に在りと。死何處に向つて去る、遽に謂く、月落ちて天を離れすと。此等の見解、喚んで鐵棒を喫し鐵圍に陥るの張本となす。儒若し曾て眞實法中に向つて脱然超悟し、更に悟外に於て別に生涯を立し、窠臼を存せざるにあらずんば、豈に生死の岸畔に於て脚を立得する牢きに堪へんや。苟も或は纖毫盡さずんば、未だ免れず、復勝妙境緣の爲に惑はされ、那邊に在つて諸の異想を起すを。曉了すと曰ふと雖、其の實未だ然らず。古に所謂、努力して今生に須く了却すべし、永劫餘殃を受けしむる莫れと、又云く八十公々入三場屋眞誠不ニ是小兒嬉トと。惟痛く生死大事を以て己が重任と爲す者あり、一切時中卓々地にして此の事を單提し、之を方寸に蘊み、三根椽下に向つて淹沒すること三十年二十年、宛も一日に同じ、大方の外に於て、濶く三千里五千里に跨がるも絲髮を問はまず、寢食を廢し、寒暑を忘れ、寂寞に耐へ、熬煉を禁じ、愛憎を泯し、順を逆離れ、能所を空し、是非を融し、偷心を死盡して方に湊泊するに堪へたり。今人、才に門を跨り來つて、脚を立つる未だ穩ならざるに、聰明の資を以て、打頭に、箇の自性生滅を離れ、眞身去來を絶す底の現成説話を違得し、以て本柄となす。自己脚跟下、未だ曾て卒地に折け、爆地に斷せざる底の一條の生死命根、之を無事甲中に置い



て性を取り、佛祖頂額上に向つて高揮大抹し、自ら謂へらく、禪學の理應に是の如くなるべしと、奈何せん實地上の工夫未だ曾て親しく到らざるを。知らず、高牀に據り大話を説き圓相を打し烏藤を卓するも、一々皆生死根塵と光を交へ、影を接するを。況んや心塵壅ぎ易く、識馬調し難し、愛見の習、潜興し、貪妄の情、默運す、輪廻未だ断せずして益々熾に、生死未だ空せずして愈々滋し、叢林の衰替、法社の荒涼、未だ此に本づかざる者あらず、所謂是れ説き了つて便ち休するにあらずと、斯言豈に人を欺かんや。蓋し實に是の如き事あればなり。爾思はずや、生死根塵の爲に籠絡せられ、塗炭中に在つて、一日一夜、萬死萬生し、形飄劍戟、業墜火湯、頭を改め面を換へて備に梵毒を嘗む、這箇都て是れ生死惡道に墮する底の家常の茶飯にして無量劫來是れ曾て經歷せずんばあらず、今日此の根深く蒂固き底の生死の牢關を將つて一回翻轉せんと要す、豈に易事ならんや、更に若し利害を顧み得失を較べ甘辛を擇び取捨を存せば則ち生死根塵又將に接續せんとす。或者謂く展轉流浪は且く之を措いて問はず、輪廻生死超悟に由らずして還つて休息するの時節ありやまたなしやと、對て曰く、譬へば猛風の海を吹くが如し、其の波浪自ら息むを欲するも豈に得べけんや、其れ生死苟くも自息の時あらば則ち佛祖慈を興し悲を運らし曲に方便を施す一に此に至るを須ひす、この故に塵沙數ふべきも生死其の數量を知るなく、滄溟飲むべきも生死その邊涯を知るなし。當に知るべし無量劫來生死の爲に流轉して、今

身に至つて若に樂に以て昇り以て沈み、竟に其の幾なるを知るなし。迷妄を以て蔽はれて自ら覺知せず、只現量に據つて之を較するも却つて今日方に從頭に起るに似たり。當に知るべし未來の汨沒浩として邊涯なきを。其の所因を推すに天の降すにあらず、人の與ふるにあらず、一に迷妄の致す所に由る。好し、今日身強力健を趨うて箇の無義味の語頭を提起し、精神を猛奮して一踏到底せんに、慧時生死ありと説くもまた得たり、生死なしと説くもまた得たり、古風を剎那に回し玄機を當念に播く、壯士臂を屈し、獅子遊行するが如し、豈に小根劣機の者の能く擬する所ならんや。(中峯廣錄師子正宗禪寺示衆)

## 第二章 悟證の大事

禪は梵語般若の異名にして般若は智慧の義なり、即ち是れ大覺圓滿の心、禪と心と名異なるも體常に同じ、未だ心を了ぜざるに於ては禪強ひて得可らず、若し得といはゞ是れ禪にあらずして業識なり、妄想なり、輪廻の根本なり。

此の心人々本來具足し箇々圓成す、只今人々具足の一心佛性は亘古亘今無始無終にして十方大千世界に堂々たり。此の一心佛性は佛祖聖賢にも凡夫衆生にも眞正の道人にも説禪の邪師にも同じく具はれり、古の佛性は直に今の佛性なり、即今吾人の一心は直に釋尊諸佛の一心なり、所以に曰く法に二



法なく佛に二佛なしと。此の一心本來名字なし。衆生の迷妄に順ひ強ひて名字を建立して大事因縁といひ、心法といひ佛といひ禪といふ。或は華嚴、法華、或は楞嚴、圓覺或は妙法或は眞如等一心の異名擧ぐるに違あらず。此の心を悟了したるを成佛といふ、歷代諸祖三世の諸佛只是れ悟了の人の謂なり。見ずや臨濟禪師曰く「三世十方の佛祖出で來るも祇法を求めんが爲なり、如今參學の道流もまた祇法を求めんが爲なり、法を得て始めて了す、未だ得ざれば依然として五道に輪廻す。云何なるか是れ法、法といつば是れ心法なり。心法形なくして十方に通貫し、目前に現用す。人信不及にして、乃ち名を認め、句を認め文字の中に向つて佛法を意度せんことを求む、天地懸かに殊なり。道流、山僧が說法什麼の法をか説く、心地の法を説く」と。知るべし、如今人々己窮下の心法を悟了せば直に是れ佛祖と異ならざるを、故に曰く「道流山僧が見處に約せば釋迦と別ならず」と。豈に惟に臨濟一人の言のみならんや、一代藏經諸祖語錄悉く此の理を説いて人の返照を促す。法華に曰く、吾汝に此の事を保任すと。既に是れ悟證の大事嚴として疑ふ可らず。且つ如何してか此の大事を了すべき。先に中峰苦口の説話、一踏到底の端的を示して盡せりと雖も、特に慈を垂れて先師拔隊の垂示を示す。曰く

自心を悟らんと思はば先づ念の起る源を見るべし。たゞ寢ても寤めても立居につけても自心これ何物ぞと深く疑ひて悟りたき望の深きを修行とも工夫とも志とも道心とも名けたり。又かやうに自心を

疑ひて居たるを坐禪とは云へり。(中略)抑唯今日に色を見、耳に聲を聞き、手をあげ足を働かす主は是れ何物ぞと見るに、是れは皆自心のわざとは心得たれども、正しくは何の道理とも知らず。これをなしといはんとすれば用ふるに隨つて自在なること明なり。有りといはんとすれば其の形更に見えず、たゞ不思議なるばかりにて兎も角も心得やらるゝかたのなきまゝに了簡更にたえはてゝ如何ともせられざる是れよき工夫なり。かやうの時退屈の心なくして、愈々志深くなりきはまる時、深き疑の念、底にとほりて破るゝ時、自心の佛なること疑なくして、生死の脈ふべきもなく、法の求むべきもなし。虚空世界たゞわが一心なり。たとへば夢の中に外に迷ひ出て、わが故郷へ歸るべき道を失ひて、或は人に問ひ、或は神に祈り佛に祈れども未だ歸り得ざるものゝ、其の夢うち覺めぬればたゞわがもとのねやの中にあり。此の時自ら夢の中の旅より歸ることは、さむるより外に別の道はなかりけりと知るが如し、これを本に還るとも云ひ安樂世界に生るゝとも云へり。是れは少し修行の力を得たる會かたなり、坐禪をたしなみ、工夫をなす人は在家も出家も皆これ程のしるしは有ることなり。是れもはや工夫をなさざる人の知るべきにあらず。是ははや眞の悟なりわが法に於て疑なしと思はば大なる誤なり。たゞ銅を見つけて金の望を止めんが如し。若しかやうの趣のあらん時は勇みをなして愈々深く工夫をなすべき様は、我が身を見るに幻の如く、水の泡、影の如し。自ら心を見るに虚空の如し、形



もなし。此の中に耳に聲を聞き響を知る主は、さて是れ何物ぞと少しもゆるさずして深く疑ふばかりにして、更に知らるゝ理、一もなくなりはてゝ、我が身のあることを忘れはつる時、先の見解は断えはてゝ疑十分になりぬれば悟の十分なると、桶の底の出づる時入りたる水の残らざるが如し。朽ちはたたる木に忽に花の開けるが如し。若しかくの如くならば法に於て自在を得て大解脱の人なるべし。たとひかやうの悟あるともたゞ幾度も悟らるゝ悟をばうちすてゝ、悟る主に還り根本に歸りて、かたく守らば情識のつきるに随ひて、自性の明かになること玉の磨くに随ひて光をますが如くにして、終には必ず十方世界を照すべし、是れを疑ふべからず。若し志深からずんば今生にかやうに悟ることなくとも、工夫の中にて臨終したらん人は來生には必ず安く悟らんこと、昨日企てたることの今日はたやすく道行くが如し。工夫坐禪の時念の起るをば厭ふべからず、愛すべからず、唯その念の源の自心を見窮むべきなり。心に浮び目に見ゆることをば皆是れ幻にして眞にあらすと知りて恐るべからず、貴ぶべからず、愛すべからず、厭ふべからず、心物に染むことなくして、虚空の如くならば臨終の時も天魔に侵さるゝことあるべからず。又工夫の時はかやうのこと、かやうの道理をば一も心中に置くことなくして、たゞ自心是れ何ぞとばかりなるべし。又唯今一切の聲を聞く主は何物ぞと、是れを悟らばこの心諸佛衆生の本源なり。観音は聲に付て悟り玉ふが故に觀世音と號せり。唯此の音を聞く底

のもの何物ぞと、立居につけて是れを見、坐しても是れを見る時、聞く物も知られず、工夫も更に断えはてゝ、茫々となる時、此の中にも音の聞かるとは断えざる間、愈々深く是れを見る時、茫々としたる相も盡きはてゝ、晴れたる空に一片の雲なきが如し。此の中には我といふべきものなし。聞く底の主も見えず、此の心十方の虚空と等しくして、而も虚空と名くべき處もなし。是れ底のときは是れを悟と思ふなり。此の時又大に疑ふべし。此の中には誰か此の音をば聞くぞと、一念不生にして究めもてゆけば、虚空の如くにして一物もなしと知らるゝ處も断えはて更に味なくして暗の夜になる處について、退屈の心なくして、さて此の音を聞く底のものは何物ぞと、力を盡して疑十分になりぬれば疑大に破れて死はてたる者の蘇生するが如くなる時、則ち是れ悟なり。此の時初めて十方の諸佛、歴代の祖師に一時に相見すべし。若しかくの如くならんとき、是を舉げて見るべし。僧問趙州如何是祖師西來意、答曰庭前柏樹子。是れ底の公案に少しも疑あらば打還て本の如く、音を聞く底のもの何物ぞと見るべし。今生に明らめずんばいつの時ぞや、一度人身を失ひては三惡道の苦永く免れんことあるべからず、誰がかくしたる悟ぞや。只自ら無道心なる故と思ひ知りて、猛く精彩をつくべし。(拔隊法直路)

先師澤水和尙此の法語によりて工夫に入り、終に大事を了す。天目中峰和尙十三世の法孫、龜庵和



尙、一見して印可付法す。此の間の消息等閑ならず、求道の士切に須く仔細にすべし。澤水いはく、老僧幼年より禪定三昧にして悉く修し盡し、その後諸方に遊歴してあらゆる諸大徳に見え、酸苦を識盡して今日かくの如し。況や此の老衰他日の相見も期し難く、設ひ虚に出頭し來るも實に出頭し來るも老僧たゞ眞實を以て垂語す、諸方參學の諸大徳、昔も今も小見を以て足れりとし、古則公案を管見して我大悟すと思へり、或は空寂をとめて悟と思ひ、皆小見解に腰をかけ、足ぬの思をなして工夫をやむ、是によりて大器量の入天下に稀なり。古人曰く、大唐國裡還つて禪師なきことを知るや、禪なしとはいはじ、たゞ是れ師なしと。或は云ふ、千里の名馬は世に多しと雖も名馬に仕なす程の伯樂なきを慨く。老僧むかし十二歳の時、手習の友とせし童、同年にして驚風の病を以て一夜の中に死す、我是れを見てより生死の無常なることを感じて寢食やすからず、一室に閉居すること六七日、その時自ら思ふ、佛道に成佛のことあり、まさに此の事を學すべしと。その頃羽州高寺に格外和尙あり、ここにゆきて剃髮す。その後他の一僧より拔隊の法語を得て、法語の如く毫釐もたがはず工夫をなす。拔隊法語に曰く、たゞ幾度も悟らるゝ悟を打すて、根にかへり本にかへりて工夫をなすべしと云々、その時自ら思ふ、幾度なりとも悟の及ぶ所を打すて、深く工夫をなさば後には必ず大悟大徹の處に到るべしと。此意を篤く信じて此より愈々工夫に入る。その後幾度といふ限もなく悟所あれども終に

工夫をゆるさず、或は山居或は店居、歲月春秋を忘却して坐す。その後越後の國蒲原郡に龜庵和尙に逢ふ、龜庵一見して悉く印可付法す。此の如く印可付法にあづかると雖も猶又長養精修して奔馬に鞭うつが如し、氷の水より生じてまさることを覺ゆ。世尊一大事因縁と説き無上の大道と説き玉ふ、毛頭も容易の思をなすこと勿れ。若し此の一心佛性に是れ迄が悟の分、是より外に悟なしといはい、無上の大道と名づけじ、無上とは上なしといふ義なり。世間諸道諸藝の中、是れにならぶ物なく、これに越ゆる物なく、達所も亦窮りなきを以つて無上の大道と名づけたり。公案は何れなりとも唯一公案をとり定めて深く疑ふべし。實に一公案を悟明せば、一千七百則一時に見究すべし。一句了然として百億を超ゆといへり。公案の事、此の公案を工夫して又外に移り、聞く主をやめて趙州の無に移りなとする時は、心頭二途にわたりにて大疑團起らざるものなり、たゞ初より末々まで一公案を深く疑ふべし。愚人は笑ふべし智者はよく是を知る。佛道の導師となること等閑のことにあらず、毫釐も差あれば天地の隔あり、愚暗の凡夫を導きて成佛の實地に到らしむること、毫髮の差ある時は、一盲の衆盲を引いて火坑に入るが如し。師は針の如しといへり、針に毫髮のまがりあればあとにつく絲のまがるが如し。抑々佛道の師といふは、我が生れざる以前我が本體何れの所に如何やうにしてありし、死して後我が此の本體何れの所に、如何やうにしてありしや、釋尊出世の時は我が本體いづくにありし、



釋尊今はいづくにありし、その外過去七佛を始め、達磨大師及び臨濟禪師、自餘の祖師菩薩、或は孔子或は天照大神、或は文武無數の諸賢人、その外自餘の父母兄弟、自他の親族朋友まで、生前死後、いづれの所にいか様になりて落在すと、手の中の物を見る如く分明に見徹せざれば、まことの佛道の師にあらず、若しかくの如くならずんば生死自在を得る大解脱の人とはいはじ。此の如く老僧幼年初心の事までを談するも、只人をして眞實の修行をなさしめんが爲なり。大徳綿々密々に工夫をなすべし。(淨水法語十三)

如上古佛、眞實の垂語、經教語録無量法門を把つて一串に穿却し諸人面前に放向して決定志を發起せしむ、正法學道の要旨此に盡きたり。苟くも如上の所説に一點の違背するあらば縦ひ佛語祖語を記持し、古人悟機を計較するも總に是れ正法にあらず、禪にあらず。現時説禪の徒、正に須く三寶前に向つて従前の罪過を懺し、眞實の工夫に入つて惡道を免るべき也。諸人低能、人我の見熾烈にして法王の説話を解すること徹骨徹髓なる能はざるべし、重ねて先師中峰の語を示して、爾等諸人の爲に此の道種を植ゑん、謹んで耳根に歷在して不失人身の萬一を僥倖せよ。所謂禪は玄學に非ず、奇解に非ず、密授に非ず、祕傳に非ず、是れ衆生本有の性、元是れ諸佛所證の三昧、若し契悟せんと欲せば切に須く實的に生死無常の四字を以てすべし、是れ萬劫未了底の最大

因縁なり。若し此の一生に就いて盤に和して翻轉せずんば盡未來際應に了期なかるべし、是の如く發心して更に異見なく、久々に心念絶し、伎倆忘し慕忽に一翻せば方に知らん、生死無常即是れ禪の骨髓、禪は即是れ生死無常の眼目なるを。然る後禪と生死と骨髓眼目亦皆剷除して便ち見ん、咳唾掉臂總に是れ祖師西來意なるを。自然に頭々上明、物々上顯、方に知らん、果然として是れ玄妙祕密に非ざるを。爾若し實に生死無常の爲にせずして禪を務めんと欲せば則ち西天九十六種の人と略少異あらず。(東語西話續集下)



## 第二篇 現代相似禪概観

## 第一章 學人論

今や正法斷絶して日本國裡佛道の師なし、顯密諸宗餘門既に生命を喪失すること久しく街童販夫も亦顧みざる所、惟教外別傳の佛心宗のみあつて大に現代士人の歸嚮を集むるに似たり。禪三宗中藥門夙く衰滅し、洞上家風漸く頽敗して一箇處世術の説話と化し去る。獨り臨濟宗あり、若干の老秃奴蹠然として大牀床に據り塵尾を振り、佛に代つて化を揚げ直指單傳の旨を擧するに似たり。後學初機の輩往々志操未だ定まらず、邪正を辨得するの眼を具せざるが爲に、端なく此の門に趨つて野狐の窠窟に陥り終に一生出期なきを致す、如今の參學者悉く此の流なり、世法に於ては賢明聰利人に過ぐるの漢も此の一件の大事に至つては小兒の如く、甘じて他の相似宗匠の誑惑を蒙つて覺らず、師資相伴うて互に謗法の罪に墮す。蓋し其の因を原ぬるに宗師、學人共に低能或は詭曲にして然るを致すなり。以下微細々に其の病根を指摘し、其の惡毒を剔抉して諸人低能の迷夢を覺破し、詭曲の邪心を破斥し去らん。

如今參學の道流、之を外形より分類すれば二種あり、雲水、居士是れなり。夫れ學人は祖門の種草にして慧命相續の根本なれば、學人の真相を検すること最緊要なるべく、特に雲水は形を前輩撥草瞻風の體に擬し、加之、室内卒業の後は機を得て師位による者なるを以て、彼等の眞價を明にするはやがて現時邪師の雲水時代に於る面目を彷彿し得べきなり。

## 第一節 雲水

雲水は禪宗の徒弟にして將來、和尚たり住職たるべき者の準備時代なり。現時臨濟宗の規定によれば三ヶ年間専門道場に掛錫して其の證明書を得れば住職たるべき資格を贏ち得るを以て、同宗の徒弟は概ね叢林に投せられ、規定の歲月滿つるを待つ。此の間に坐禪を習ひ、若干の古則公案を記し、法式儀禮等に通じ、葬式法要等の職務に堪へ得るに至り、更に多少の禪語を語り、奇警の動作を示して民衆を購するの術を習得す。其の初叢林に入る時は概ね二十歳前後早きは十六七歳にして本より法の何たるを知らず、出家の意義をも辨せず、たゞ慣習に隨つて衣食するのみなれば、今の所談には關せざるなり。殊勝らしき衲衣姿多くは此の類なり。その低能愚昧或は悖德非倫なる怪しむを要せざるなり。今此種の者を稱して「普通雲水」となす。

雲水中「道心」なる者あり。夫れ道心は僧の體にして發菩提心の謂なり、道心なくんば僧にあらず、



理を以て謂は、眞正參玄の士は總に喚んで道心となすべきなり。然れども僧業社會に於ては中年剃度の者を總稱して特に「道心」なる術語を用ひ、此を小僧上りの僧侶と峻別すること末代の弊風見るべき也。眞正の道心は則ち法の爲に一身を捧げ、世榮を棄て攀縁を絶して只管に己窮下の大事を究むる者は是れなり、此れ眞の佛子にして理を極めて曰は、世尊此の道心の張本なり、相似佛法の僧團中稀に此底の漢の混するなきに非ざるも元來佛法中の人なるを以て永く邪宗門庭に留まることなく、去つて半間茅屋に折脚の煨子を煮、鈍工夫を下して直に先蹤の芳躅を攀ちんとす。或は報縁によつて伴狂として衆中に混するあるも唯兀座工夫住庵の風規を守り、古則公案の解釋を記持するを欲せず、邪師には鈍漢と罵られ儕輩には風顛と嘲らるも一生操守を變せず、正念工夫の中に生を終ふる者あり。此は是れ大丈夫の漢、古佛の應現にして千人中一人を求むべからず、吾れ幸にして唯一人此底の漢を聞けり。大丈夫兒、明治四十三年七月二十四日夕瑞龍寺僧堂に遷化す、享年三十一、法臘僅に四歳「法道梵器首座」の靈塔群邪の間に儼臨す、慕道の眞士は仰ぎつべし、相似の宗匠豈に慚愧なからんや。(無道心の中年剃度者は單に職業を轉換したるのみにして、概ね次の師家候補者に屬する者とす。)

昔百丈叢林を建立して、禪の一派を格別にたて直指單傳の旨漸く經律に墮せんとするの弊を拯ふ。是に由つて永く眞風を後代に傳ふるを得たるも末代に至つて却つて弊竇を生じ、師位を視ること世榮

と擇ぶなきに至り、師位に據る者亦令法久住を思はず、嗣を求むるに急にして閭巷庸俗の態を學び、學人亦名利の爲に師位を望み、印證を得るを以て畢生の大事となす。現今の雲水中此類亦尠からず最初より一毫の正念なく本より佛法中の者に非ず、惟聰利稍人に過ぎ文才あり辯口あり兼ねて機智に長ずるを以て古則公案の謎語を解くに敏にして邪師の偏愛を受くること篤く、潛に將來の嗣を以て任じ類に説禪の學習に力む。更に一等の漢あり、普通雲水の部類に屬するも宿業拙く痴福薄くして尋常の僧業を營むの縁なく、已むことを得ずして、或は十年或は二十年叢林に起臥し信施を消し光陰を空過するうち知らず識らず幾多の古則公案を記持し、卒業して終に印證を受け師位を贏ち得るに至る。現時の叢林往々久參の上士と號して高單に瞌睡を打するの漢、多くは此の類なり、其の低能愚直なるの故に歲月を経て頭白く齒黄なるに及び、却つて古人の偉ありとして世人の恭敬を受くることあり。又一等の漢あり、確く相似禪を把つて正法なりと信じ、謂へらく古則を卒業し印證を受くれば即ち是れ佛の慧命を相續して直に佛位に登り人天の師となる所以なりと、乃ち孜孜として朝參暮參し一回の入室出席を缺かさず、卒業の期の日も早からんを望み、潛に眞正辨道の士を以て任す。此は是れ闡提種性嘗て正法と相應せず、惟性極めて質直簡素寧ろ愛すべき漢なるも、其の簡單なる頭腦を以て相似の法を固執して正法となすが故に、後學を牽引するの罪過尠からず、特に將來師位に膺るに至るや邪宗を激



揚して得々として非を知らず、流毒の甚大なる恐るべき者あり。明治維新前後迄は此の類甚だ多かりしが如く、今も尙佳衲子の名を博せる者多く此の類なり。更に一類あり、相似禪の價值なきを知り大事件縁の忽緒にす可らざるを知るも、業障深重にして心地邪曲なる爲に、只一身の苟安を計るに急にして、辛艱を憚り真正の辨道を肯てせず、退いて公然名利に馳走し世路を營むの勇氣もなく、故らに殊勝を装ひて、相似禪に參し、唯速に卒業して師位を得高僧の名を博して人を瞞せんことを計る。此の漢最も惡むべし、時としては現代の禪弊を痛論し、古人勤苦の跡を慕ふの模様をなし、巧に相似の語言を引證して大悟大徹を説く。僧侶社會に所謂道心、即ち中年の職業轉換僧に此の類あり。

如上四種の師家候補者と第一類の普通雲水と混雜同居して頭を集む、是れ諸方叢林の現状なり。

## 第二節 居士

僧業を營まず僧籍に入らざる者の説禪を學ぶ男子を稱して居士といひ、女人を稱して大姉となす。此の一類は稍先の雲水と趣を異にす、即ち雲水中の第一類たる所謂普通雲水に該當する者なし、是れ衣食を僧業に求むるの要なきを以て自ら然るなり、此の故に居士の中には他の強制によりて餘儀なく門に入る者なし、種々差別あるも其の自ら求めて學習を望むの點は同一なり。近來説禪の學、波蕩風靡して都鄙の別なく老少男女を問はず、頻に相似宗匠の門庭に集まる。都下の禪會十數箇を算し、各

各日を期し伴を結んで祖録の提唱を聞き、或は入室出席し、或は默坐分別す。地方亦此の種の會合少からざるべく、更に好事の漢が専門道場に至つて雲水に伍し學習する者を合する時は説禪の徒弟夥しきものあるべし。此等居士の一群は邪師にとりて重要な顧客にして、邪師の爲に經濟的保障をなし社會的名聲を附與し、説禪業成立の基礎を作れる者なり。今此等無數の禪者を分類して其の真相を叙すべし。

一、低級の效驗を求むる者、説禪の閑技流行して都鄙を風靡し、苟も多少の識見あり教養ある者、時流に晚れんことを恐れ、談柄に資せんとして聊か門閥を窺ひ置かんとする者少からず。或は一種の健康術として坐禪の體裁を學び、消化器呼吸器等の健全を計り、神經衰弱の療養に資せんとする者亦少からず。更に或は膽力養成、精神修養を以て辭となし、清素枯淡の生活を學んで放縱逸樂の習癖を矯正すといひ、或は處世術に應用して無礙自在を得んといひ、或は哲學研究の補助となすといひ、佛敎々理研究の參考に資すといふ。此等總に物を逐ふの漢にして低級の效驗を求むる者、その相似の宗匠に參する、低能を以て低能に従ふ者、たゞ一場の戯劇のみ。

二、趣味の爲にする者、東土の祖師誤つて機用を弄してより、惡聲流布し展轉して禪家者流一種の門風を生じ、特異の色彩を帯び來る、所謂禪味是れなり、世の好事の漢天性所謂禪味に興味あり、嗜



好ありて枯恬淡泊を喜び、幽寂沈靜を愛する者、其の性癖に引かれて説禪に入る。或は數寄風流の道として説禪家風を好樂し、僧家の器具を遊び、或は偈頌を弄し、或は枯淡の食味を貪り、好んで説禪僧と往來して其の趣味性の満足をはかる。明慧上人、嘗て數寄の者佛道に入り易きを説きたるも、現代説禪宗匠、此の底の漢を回轉して道に入らしむることなく、却つて他を牽引して其の習癖を助長し業輪を増益するを以て、此の域を脱して正法に歸する者殆どあるなし。

三、安心立命を求むる者、或は煩悶を脱せんが爲にすといひ、或は人生問題の解決を得んが爲にすといひ、更に或は自餘の宗教に於て未だ安心を得ざるを以て禪門によつて決擇せんと要すといふ。此の類の者は畢竟自家の現境に満足する能はずして何物かを求めて來れるなり、聊か向上の趣あるに似たり、比較的眞摯なる禪者は多く此の部類に屬す。明眼の宗師あつて善巧方便を施さば或は道に入るなきを保せざるも、無佛法の現代には絶えて此の事なし。其の參して若干の古則を傳授せらるゝや稍低能なる者は此を己見に同じて満足の想をなし、漸々に古則管見の興味を湧起して、馳求の中に歲月を消するに至る。或は一則を了する毎に未だ満足を得る能はずして望を將來に綱ぎ、孜孜として參する者あり、歳久しうして病膏肓に入り、終に一個相似の禪者と化し去る。或は中途參禪實なしといつて邪師の門を去り、禪理只是の如し、わが道自ら他にあらんとして別に方便を求め、其の多くは淨門

に入る、然らざれば冊子上に些子の慰安を求め馳走して已ます、此等皆邪正を辨するの眼なく生死の爲にするの正念真切ならざるの效す所なり。然りと雖その明師に遭はざるの禍最も憐むべしとなす。

四、渡世の具を得る爲にする者、一等の漢あり、世路に於て蹉跎困厄身を措くの處なく、技窮つて其の奸猾の智囊を傾倒し、説禪によつて衣食の資を得んとす。此の漢自ら大居士を以て任じ、外綿々密々を装ひて頻に邪師に昵近し、切々として古則の習得に力むる傍ら徧く經教語録を涉獵して見聞を該博にし、談柄を豊富にす、其の期する處は説禪卒業の後、在家の菩薩として人の恭敬を受け勞少くして功多き渡世術として説禪の業を營み、浮身一時の安を偷まんとするにあり。又縱令卒業して印證を得るに至らざるも、相似の語言を把つて業を文筆辯口に立つる者少からず、此等總に是れ渡世の具を得んとして禪門を窺ふ者なり。

五、眞正の道人、即ち是れ佛子なり。自己を把つて一件の大事となし、誓つて生死を了脱せんことを期す、先の雲水中の道心に同じ。共に是れ佛袈裟を披して直に佛祖面前に到つて兒孫と號するを妨げず。是の如き眞正道人は麻の如く粟の如き禪者中嘗て見ざる所、是れ本來佛子なるを以て相似説禪の中に久住せざるが故なり。

如今所謂居士大姉なる者は第五の道人を除きたる四種部類より成る、道と去ること遠くして遠し。



此等雲水居士の群、邪師の許に趨つて抑々何事をかなす、思うて茲に至れば愛道の士誰か末法無佛の嘆なからん。

## 第二章 師家論

### 第一節 總説

現時諸方に衆を領し、徒を匡し、曲柔床上横説堅説せる死老漢、皆是れ鶴林の一派白隱の兒孫なり。彼等の自稱する處に従へば關山慧玄の法燈を相續せる者にして、至道無難禪師の嗣、正受老人より白隱慧鶴に至り、後世家風の小異より隱山卓州の兩家に分れて今に迫ふと雖も共に白隱門下の峨山慈悼より出でたるものなり。而して往昔二十一流を傳へさしも盛んに宗風を激揚したりし臨濟禪の一宗は、白隱一家を除く他悉く嗣法斷絶して尋ぬるに由なし、鶴林の餘流何ぞ獨り盛なる、現代の宗師家悉く白隱より嫡々相承して今日に及べる者、直指單傳の旨を傳へて人天の師たるべき活祖師なり。諸人且つ此等活祖師いかにして出家しいか様に學道ありしぞ、契悟の機縁はいかなりしぞ、嗣法傳衣の勝軌はいかむ、又々水邊林下にいか様の長養ありしぞ、今まのあたり此等活佛活祖の心身行履を體して鞭策の資となさば、故らに會元傳灯に契悟の機様を検し、做工夫の端的を窺ふにも及ぶまじきなり。

先に學人章の雲水中師家候補者として四種の雲水を擧げしが、現時の宗師家皆此等四種の後身なり、其の多くは小僧上りにして幼歳より叢林に投せられ、無意味に説禪を習得したる者なり。中には中年剃髮して叢林に投じ印證を受け師位を得たる者ありて一見出家學道して大事を了じたるの觀あるも、元來佛法にあらざる相似禪を卒業する程の者なれば、正法の上よりいふ時はその中年出家といふも畢竟職業を轉換したるのみにして出家學道といふ可らず。

天氏は越溪の徒なり、鎌倉の洪川に従ふ、洪川天氏の聰利を愛し撫育怠るなし、且つ天氏幼歳より聰明敏活人に過ぎ兼て猾智ありしといふ、其の室内卒業極めて短期にして且つ世に出づること早かりし所以なり。彼の嗣に地氏・玄氏・黄氏・宇氏等あり、何れも伶俐明敏にして天氏の意に協ひ皆短期に卒業し、前二者は早く一方の宗匠となりすまし、後二者は持久して世に出づること稍遅きも、大寺名利に住して善知識を以て任ず、此の中、地氏は中年僧にして最初の計畫の如く説禪業に成功せし漢なり。又天性愚鈍にして世務にすら堪へざる者の久しく叢林にありて終に師位に登りたる者、其の數少からざるべし、宙氏の如き、人、往々古佛の觀をなすも實は説禪師に隨侍する年久しく終に卒業したる者なり、眞淨此の事を一日徒弟洪氏に語りて誠めたることありき。

相似禪を以て正法と信じ、天晴れ大事了畢して人天の師となりたるつもりにて、四衆に號令する者



亦少しとせず。荒氏の如きは門風孤峻の聞え高く、一代の英傑の如く思はるゝも、實際は此の低能部類の漢にして其の相似法を尊重すること甚だしく、一語一句の傳授にも穩密を極めたりといふ、而も法の心法たる所以を知らざるを以て、傳へ得たる所は惟相似の語言と跳躍の模様とに過ぎず、其の嗣子を見て明なる所なり。彼の嗣、日氏の如き、其の簡單なる頭腦を以て固く相似禪を執して佛法的々の大意となし、意氣相投じて荒氏の偏寵を蒙り五六年の學習にて卒業し、印證を得るや直に人を接し今や門庭漸く繁盛なりと聞く。月氏の如きに至つては孤奇峻峻の道風、一時洛陽を風靡したるの概ありしもたゞ是れ一場の戯劇、終に心法と關せず、その相似の語言を弄して大衆を激勵する處頗る祖宗門下の風を摸し來るも、たゞこれ閑言語にして說禪傳授の内容に至つては自餘の宗匠と選ぶ所なきなり。

眞淨は相似禪の價值なきを知りたるが如し、この故に最初若干の古則を管見して說禪に親みたるも棄て、顧みず、鎌倉の東海大和尚に參して正法に志したることあり。然れ共天性放縱檢束なく、漸く一年にして請假(放逐の意)を命せらる、此の間少分の相應もなかりしは本より也。乃ち去つて再び說禪の宗師儀山に投じ終に越溪に嗣ぐ、彼後年常に衆を誡めて曰く、古則を數多く透過するも益なし、自信なき參禪は爲さるるに如かすと。居常東海大和尚を欽し其の遺愛の笏を得て坐右を離さざりきと

いふ、蓋し彼の心中、正法を信する傾向聊か無きに非ざるも機根劣少にして決定志を發するに至らず終に一身の安危を慮つて相似禪に走り、師位を得て一生を瞞過したる也。見よ彼が風多悲痛を帯び、坐作頻に活達洒脱をつとめて悶々の情を消遣したりしを。

如上二三の實例をあげて宗師家の一般を示したるが一人の生死大事の爲にして悟了分明を得たる者あらず、たゞ是れ說禪の師といふべきのみにして佛道の師にあらず、諸人こゝに於て高く眼を著くべし、苟も眞實道を求めんとせば急に邪師の圈續を躑躅して活祖意に參せよ。

## 第二節 師家の相似語言

邪師は衣食の爲に相似の法を擧し、名利の爲に佛事を鬻ぐの漢なれば、其の言說の佛祖に類似せんことを要して徧く經教語錄古人機縁を涉獵し、巧に羅列布陳して人目を眩するにつとむ。故にその説く所往々佛祖の言說と異ならず、參學の士此を仔細にせずんば端なく他の鉤に上りて一生を漫過するに至らん。然れども後學初機の士が相似の言說を透して邪師の眞相を看破するは容易の業にあらず。法王少時より久しく此の教壞に遭逢せり、惟々正念を堅持し、決定して生死大事を了せんとするの志眉宇の間にある時は老狐いかに變態を極め技倆を盡すも、久しからずして一朝に看破せられん。惟それ最初學人の志正しきも道眼未だ明ならず志操未だ堅からざるを以て、且く邪師の相似語言に誑かされ



他に向つて正法を求めんと擬するのみ。

相似の言説何として道と交渉なき、惟夫れ語言相似たり、邪師暫く齒牙を動かして佛祖の所説を音聲を以て反復するのみ、その心頭をさぐる時は却つて紛々擾々として寧ろ鸚哥の無心なるに如かず。先師中峰曰く「如今未だ悟得せざる人徧く古人の現成言句を閲し、また十方世界これ箇の大解脱門と道ふことを知るも、唯相似を知り得、恰好を説き得たり。偶々一毛頭に於て順逆の境其の前に現せば即ち心を擧し念を動かして之と較量す、安ぞ解脱の少分あらん」と。曲柔床上、見臺を叩きて大衆に儼臨し、天地一枚になり切りて宗通説通、大辯才を振ひ玉ふ大善知識の心頭悉くこれなり。先師中峰又曰く「未悟の人の道理を説くは月夜に物を看るが如く、已悟の人の道理を説くは白日に物を見るが如し。月夜に看る底もまた唯是れ這箇の物、但依稀彷彿として餘惑未だ盡きず、白日に見る底もまた唯是れ這箇の物、惟是れ根源を見徹し、惑情頓に洗す。又未悟底の人は曾て杭州に至らずして終日杭州の話を説く、彼説き得て相似たりと雖其の未だ到らざるをいかむせん、既悟底の人は已に杭州に到り、其の四方八面の境界洞然として心目の間に在るが如し。終日説かざるも曾中未だ曾て杭州に迷はず、故に佛印禪師云く、未悟の人は與に已悟の境を言ふ可らず、譬へば生盲の人の如し、之と天日の清明を言ふも彼聴くと雖辨す可らざる也。已悟の人の未悟の境を踏まざるは睡覺の人の所夢の境を

追従するも得て復入るべからざるが如し、と。又、教中に謂く、末世の衆生、成道を希望するも悟を求めしむるなかれ、惟多聞を益し我見を増長すと、證あり悟あるが若きに至るも其の證悟の理尙心に存す、教中に之を斥けて我人となす、然り既に證し既に悟るも苟も其の證悟の理を忘る能はざる是を法塵といひ是を見刺といふ、已悟の者尙爾り、況や未悟の者をや」と。此は是れ未悟の者と已悟の者と相異なるの端的なり。如今諸方の老宿、證悟の理を忘せざるは且く措いて問はず、未悟底か已悟底か試に言へ看ん。

中峰の如きは末代出興の正師にして、眼、佛法下衰を視るに忍びず、醜を忘れて具に諸方相似の宗匠の病弊を指摘し、學人向道の進路を啓く。現時の邪師また此等明眼の師が委曲の説話を採つて談柄に資し頻に紅朱の紫を亂すを致す、而も直に是れ惡水幕頭に注ぎ懶が淡泊の處なきを知らずして、却つて人に向つて得々として説興す。其の迷妄深くして己窮を省みるを知らざる、恰も頑夫の踵皮厚くして針を刺すも感なきが如し、最も憐憫すべき也。

例へば説禪師地氏、禪の要領と題して第一、大信根を具すること、第二、大疑情を起すこと、第三、大憤志を立つることの三要をあげ、横説豎説滔々數萬言を費せり。此の三要は天目高峯、中峰等の前輩が極めて簡明痛切に垂示したる所なるが、此を採つて所々に傳燈祖録等より古人機縁を抜き來つて



挿入し、時々新しき術語などを交へて長編に延したるのみなり、初心の者かゝる相似の説を見て直に鉤頭に上り、彼が會下に投することなしとせず。而も彼曾て眞實の工夫をなさず、姪性熾烈にして雲水時代常に婦女を追ひ「尻つねり」の渾名を贏ち得たるの漢也。流毒の傳播誠に恐るべき也。

其餘相似の宗匠が大牀床に據つて説く所を見よ、彼等悉く云ふ、懸甍に手を撒し絶後に再び蘇り、山僧の手裡に來つて棒を喫せよと、大に古人做工夫の説に似たり、或は云く重々の關鎖一々透過し終つて既往を顧みるに一法の所得なし、堪<sub>レ</sub>對<sub>ニ</sub>暮雲歸未<sub>レ</sub>合、遠山無限碧層々、這裡に至つて乃ち長伸<sub>ニ</sub>兩脚<sub>一</sub>臥無<sub>レ</sub>喜亦無<sub>レ</sub>憂と、大に古人大了當の境涯に似たり。獨りいかむ、邪師開口動舌の處直に生死根塵と光を交へ影を接して輪廻海裡に浮沈するを、言ふこと勿れ法王怒罵に長すと、誠に事是の如き者あれば也。

### 第三節 平常の言行

前節述ぶる所は邪師が渡世の爲に佛祖の言説を假り來つて補綴安排するの真相なり。今、邪師の心中より流出する所即ち邪師の眞面目を露せる、平常不用意の際に出づる言行の一般を述べ、兼ねて、邪師自らの所見を吐く時當面に蹉過せる所以を示して、其の假面を剥ぎ去らんとす。抑々邪師は本來超悟の人にあらざるを以て、其の言行の凡人と撰ぶなき本より其の所なり。人各々生活境遇により或は教育により天稟によりて言行の蹤を異にするが如く、邪師相互の言行も亦一樣ならず。即ち比較的寡慾なる者、綿密勤直なる者、五慾熾盛なる者、放縱疎懶なる者、或は天資活達にして常に動縁を逐ひ、或は孤獨靜寂を愛して隱棲を好む者等差別萬般なり、然れ共其の生死情妄を空せず迥然獨脱せざるを以て、輪廻海裡に浮沈せるは相同じ。今かくいふとも邪師に心醉せる説禪學徒は急に信する能はざるべきも、沈思靜慮して法王の説話を傾聴せば自ら覺る所あるべき也。

邪師社會には特有の言行あり、何となれば説禪の職業が及ぼす影響によりて各々性格に多少の變化を來し、所謂師家氣質なる一種の氣質を醸成せるを以て、其言行に特殊の色彩を帯び來れるなり。祖師機用の跡奇言異行頗る人の意表に出づるもの多し、説禪の業その跡を集め來つて材料とせるを以て茲に特有の型を生じ、虎を描いて猫に類するの言行をなす。抑々最初明眼の師、喝を用ひ、棒を行じ或は拳を擡げ指を豎て、奇言妙句を吐くが如き皆是れ一期の藥病相治にして、もと祖師の大寂滅心中より流出したるもの、其の蹤跡を覓めんと擬するも了に得べからざるなり。後世此等機縁の模様を集めて一種の遊戯的宗義學を組織する者出で、終に説禪學の體系を組織するに至る、白隱の如きは其の大成者の鏘々たる者なり。今の宗師家が悉く白隱の末輩なるは先に言へるが如く、即ち此の説禪の遊戯を卒業したる者なり。彼等抑々如何なる氣質を有し、いかなる舉措云爲に出づるか。



一、邪師は凡て自ら宗師家たるの妄信を固執せり。夫れ水乳の合して分ち難きが如く、相似禪は正法の言説を資り正悟の機縁を假り來つて組織せる者なるを以て、徹頭徹尾佛法の體裁に摸倣せんと擬せり。例へば最初の課程終了を以て見性と稱し、謎語を以て公案といひ、その解釋の爲に分別思慮するを做工夫といふが如し。其の卒業生を稱して師家、知識、老師などと稱し、人天の大導師の尊號を奉るなど悉く佛法邊に擬せり。而して卒業生たる邪師の一輩は自ら宗師を以て任じ、天人師を以て任ず是れ他の社會には見る能はざる獨特の氣風なり。此の宗師たるの妄信は直に頑迷、固陋、踞傲、老達の性癖を陶鑄し來る、累々たる禿奴、其の天性によりて各々行履を異にせるの觀あるも、此の氣風に至つては一同に具有せり。

二、邪師は古人の言行の摸し易きものを選びて已悟を装ふに力む。前輩大達之士旨を得るの後、或は孤峰獨宿、或は入塵垂手、或は化權を擅にし、或は正令を單提し、或は泯絶して聞ゆるなく、或は聲宇宙に喧しく、或は親しく世難にかゝり、或は身沉痾に染む、此等皆報縁に隨つて度生爲人の跡を異にし、榮枯禍福の途を別にするも、皆強ひて之を爲すに非ず、然るを期せずして然り、その一身の浮沈の如きに至つては飛埃の目を過ぐるが如く毫末も愛憎取舍の情を動かすとなし。等しく單傳直指の心を了し佛に代つて化を揚ぐ、其の又を擡げ、毳を輾し、油を提げ、笏を舞はし、江に臨んで手を

招き、雪に立つて心を安じ、空拳を草廬に墜て、雙趺を巖穴に疊む等、道常情に出で、瓮を喚んで鐘となし意言外に居す、皆是れ大衆に儼臨し宗教を播揚する所以なり。相似の禪者此等の跡を摸して自ら已得底を装ひ人の恭敬を受けんことを計り、而も古人言行の常情に出づる所に擬して潛に三毒を恣縦し、人我を逞しうす。其の手段其の遁辭頗る巧妙を極め、尋常容易に識別する能はず、然れ共彼等の摸倣單に皮相に留まり、且つ危難の伴ふ如きは顧みざる所、例へば三十年、影、山を下らず、目に雲漢を躑すといふ如き、或は一日不作一日不食の如き、坐破七枚蒲團の如きは絶えて摸する者なし。

三、抑々沙門の日常生活は佛戒に正順して違背ある可からず、古來祖師にして特に持戒を唱導せざるあるも、其の行履自ら一佛の大行莊嚴の心に承當す、その大用現前して時に常情の表に出づるあるも、未だ嘗て佛戒と相應せずんばあらず。邪師心地昏明にして、此の機用を學ぶを以て其の動作云爲悉く罪過をなす、彼等が咳唾掉臂、着衣喫飯に至る迄犯戒毀律にあらざるなし。邪師の中特に相似禪を執して正法となせる漢は、坐臥飯食すべき古來宗門の風規に準じ、綿々密々大に清淨比丘の觀を呈する者あり、自ら謂へらく行解相應し、一心萬法戒を持つ所以なりと。又或は放逸無頼閭巷の匹夫と撰ぶなき者あり、自ら謂く大用現前軌則を存せず、我が這裡嫌ふ底の法なしと。二者共に是れ大妄語を成じ、賢聖を誣罔せるを知らず。



四、此の二種の漢、通じて自己の非力を蔽ふに祖語を假り來るを常とす。その日用兢々として過なからんを力むる者、人の之に向つて、何ぞ末節に拘々として自在を得ざるといふあれば、乃ち曰く、瑠璃の器に非ずんば獅子の乳を盛り難し、古徳言く戒體清淨威儀寂靜と、放逸無頼の漢、人の之を詰るあれば、乃ち曰く、物と拘らず透脱無礙、宇宙双日なく乾坤只一人と、又曰く、拖泥帶水入塵垂手、山僧爲人の處豈に人の窺ひ得る所ならんやと。此の類全く愧を知らず。

五、随つて一機一用毎に模様をなす。日常の施爲舉措、毎に相似の言行をなし、傍人をして特異の想を抱かしめんとす。是れ説禪の習、浸潤して不用意の間に出づるあり、又特に期する處あつて故意になす者あり。今二三の實例を示さんに、盈氏酒を嗜む、人之を詰る者あり、對へて曰く、山僧嘗て飲まず、惟滿を引いて天地一枚となりゴクリ／＼と飲むのみと。又或時曰く、關山數回東海道を往還して富士を見ざりきと傳ふ、山僧亦嘗て富士を見ず、何が故ぞ、見ずといふ見處よりせば終に一物を見ざれば也、と。荒氏、松蔭寺の白隠忌大會に會下の雲水數名を牽いて投じ、請に應じて禪録を講す。最終の日、講を約しつゝ、早朝會下と共に結束して潜に去る。是れ禪機を弄したるの模様なり。彼は巡錫の時屢々早朝人に隠れて去り、機録に擬するを常とす。其他邪師が已悟を裝ふ爲にする模様枚擧す可らず、皆是れ虎を描いて猫に類し、情妄窠臼裏に墮在せる者なり。

#### 第四節 師家の心頭

如上、邪師が生活の爲に説禪の業に従ふや、巧に自家の醜を蔽ふに相似の語言を弄し、相似の模様をなし、圓轉滑脱捕捉す可らず。随つて直下に彼等の心的生活如何を測り其の眞面目を看破する容易の業にあらず。法王少時より久しく邪師の門にあつて具に此の辛苦を歷、漸く彼等立地の處を看取せり。邪師多くは名聞の心熾盛にして、或は隱遁を名として古佛の名を網せんとする者あり、此の中二類あり。一は普通人としても低能にして、世に立つだけの能力なく、已むを得ずして隱遁幽棲の美名に匿れ、少數の徒を領して一身の苟安を計り、兼ねて萬一を僥倖して清僧の名を博せんとする者、二は隱遁を以て聖胎長養の美名をかち得、人の漸く傳聞して推出するに至らんことを俟つ者是れなり。後者は名利を兩重に網せんとする者にして、平生孜孜として讀書習字詩作等に耽り、又潜に従前の備忘録を復習して、説禪の技を鍊磨し、時節の到來を待つ、心頭擾々として婚嫁以前の處女の如し、時到つて乃ち多衆好樂の生活に入る也。多衆を好樂し説法提唱に力めて名聲これ舉らんことを計る者、現時世に名ある邪師皆此の類なり。彼等の多くは文筆に長じ辯口に巧にして處世術に達し人心を集むるに妙を得たり、現時盛に跳梁せる所、目前にして見るべし。

彼等が社會的名聲を得るに汲々たるは論をまたす。更に翻つて屑々たる個人的褒貶を意に介すると



婦子女の如き者あるに至つては其の人格の狭劣驚くべき也。辰氏平日肉食を嗜む、而も勉めて他人の知らんことを恐る、或者人の彼が肉食を議する者あるを以て彼に告ぐ、辰氏辯じて曰く、吾多病、醫師の勸告によつて色身を愛護し、一日も永く生存して一人にても多く社會に有用の材を供給せん考なりと。何ぞ辭の窮せるや。列氏其の會下の雲水が七八成と評せしを聞き鬱々として樂まず、一日辯じて曰く、余を七八成といふ者あるも、釋迦彌陀と雖も修行中なりと。情識波浪高く強ひて說禪相似の機用を以て悶々の情を除遣せんとする跡寧ろ憫殺すべき也。

利養の心重厚なるは特に指彈に値すべし、本來頭陀の境界に甘んずべき道人は利養を貪求する如き念慮一毫も存す可からず。殊方異域隨方の毘尼宜きに隨ふといふも貪慾の長養を許すが如きは根本に違背せり。米に代ふるに麥を以てするは尙可なるも、誰か糞土を採つて食に充てんや。道元越の山中に衆を領する時、雪夜特に藥石を許す隨方の毘尼宜に順ふといへり。其餘、金銀を貪求するを以て隨方毘尼と稱することなし。現代にあつては或は昔日朴野の風を以て直に律し得ざるものあるべきも、博約折中して佛祖の意を失はざる難きに非ざるべし。今の邪師私財を貪求すること人に過ぎ、甚しきは不淨財の爲めに法廷に立つ者すらあるなり。

邪師概ね愛憎の念深し、是れ說禪の性質として必然に起り來る結果なり。即ち其の說禪體系の内容

が元來大道と關係なき一種の遊戲法の祕傳なれば、多年師弟授受の間に多少づゝ變化を生じ來り、現今にあつては殆ど各自に其の鑄型を異にせるを以て、彼等は自家獨特の鑄型を以て優越なりとし、密に其の會下に傳授す。故に他家より轉じ來つて稍相違せる鑄型を呈する者あれば、傲然として之を斥け、久しく此の學人を放置して容易に障壁を撤せず、その漸く歸順し來るを待つて初めて自家の形式を傳ふるに至る。雲水間に轉錫三年の常套語あり、此は他家に轉する時は三年間の空費あるをいへる也。眞淨曰く臨濟宗の師家程愛憎の深き者なしと。日用事また情取舍を存すること甚し。或は洒々落落を装ひ、いかにも愛憎なき執着なき態をなす者あり、其の脱俗的言行を酷つて權門に出入し、幫間の所爲を効す、其の洒々落落底憎愛なく執着なきを装ふ底に和して、情妄を引起し取舍を滋長せるを知らず。

邪師は一般人間と同じく五欲を脱せず、或は體質の如何に依つて日常生活の枯淡なる者あり、一見古道人の風あるも惟是れ習慣の結果にして、幼歳より菜食粗食に育ちたれば也。其の食味を貪り、物に轉せらるゝは同一なり。體力强健にして獸性熾なる漢は酒を喫し、肉を啖ひ、女色に荒び、遊蕩淫逸閭巷の匹夫と異なるなき者あり。天氏說禪裨賣の遊歴終るや歸途直に自坊に赴かずして、侍者を遠げ潜かに魔界に入り、留連數日勞を感して歸山するを常とす、是れ彼が近侍の者の所談なり。



邪師が相似の語言を把つて宗風の闡揚に擬する時は恰も生死の牢關を透脱して纖毫立せざるの觀あるも、却つて自家脚跟下果して如何と見れば、茫々として決着なく、寧ろ一個の禪語を記せず、一炷の坐を打せざる通常人に如かず。此を多少教養あり訓練ある人士に比すれば、其の精神生活の空疎なる霄壤も管ならず。試に彼等自家の識見如何、所信如何を検して諸方參學の士の猛省を促さん。

邪師の中、全然無定見なる者あり。普通俗人と等しく日夜惟衣食の爲に奔走し目前の事にのみ營々として會て省察の間なし。即ち彼等は世人が職業に勤勞し、家庭の縁務を處する如く、其の職業として接心提唱說法等に從ひ、寺院の維持、信者との應酬、徒弟の養育等をつとめ、會て思想界の傾向をも窺はず、宗教の何たるかをも顧みず、況んや一件の大事に至つては毛頭關せず。而して謂らく昨日も慙麼今日も慙麼、日々是れ好日、風來つて樹點頭すと。此は是れ闡提種性鸚鵡類りに煎茶と叫ぶ。

或は己解を逞くし、諸法空相を曲解して斷見に陥れる者少からず。曰く本來無一物と、破戒無漸至らざるなく因果を撥無し迷情を恣縱して造業已ます、是れ說禪の鑄型より影響を蒙りて此見を抱くに至れる者にして、謂らく、天もなく地もなく山もなく川もなく我もなく人もなく草木叢林悉く無く、かく言ふ語も亦無しと、殊に知らず一箇の無明無始劫來結縛して輪廻息むことなきを。或は一等の漢あり、日用事一切中の一機一境に對し說禪形式を適合し其の毎に特殊の興趣を感じ精魂を弄して謂ら

く、咳唾掉臂も亦祖師西來意、頭々顯露物々全眞、平常是道、即心即佛、是れ現成公案日用三昧と、殊に知らず、人我の見を脱せず、一々境縁と情妄と待をなし對をなして當面に蹉過するを。

邪師口を開けば乃ち言ふ自心即佛、心外無法と、恰好を説くは且く問はず、彼等自ら自己とは何ぞや自心とは何ぞやなる間に對して如何なる見解を持せるか、彼等の多くは自己を以て一種の物と思へり、自心を離れて別に自己なる物ありと思へり、或は平常舉足下足眼見耳聞をとつて自己本來の面目と執し、更に山河大地有情非情直に自己の當體なりとし、我と天地と同根、我と萬物と一體といふ、却つて是の如く觀察し名字を安する者知らず、即今聽法底の主人公を返照せず。或は曰く「花を見れば花と一枚、月を見れば月と一枚、自他毫端を隔てざる是れ極致なり此處に至つて花紅ならず、柳綠ならず」と、又相似を説いて轉た道と背けるを知らず。更に低能の漢に至つては咒物崇拜偶像崇拜の域を脱せざる者すらある也。

生死に對する見解の淺薄なるは最も晒ふべし。或は相似の語を擧げて、曰く吾が這裡生死なしと、而して註脚して曰く生死を度外にす、生死の如きは宗門の問題にあらずと。頻に因果を撥無して、無生死を高唱す、妄談般若大妄語を成して慚づるなし。或は曰く生死是れ不可得、生來を知らず奚ぞ死を知らんと。或は、生死の現象を認めて其の他に何の意義もなきものとし、生は即ち降生、死は即ち臨終



七顛八倒の處、此の如く觀れば生死透脱の仔細ありとす、而して去處如何と問はゞ唯一片の石を留むといひ、或者は始は芳草に隨つて去り又落花を追うて歸るといふ。或は死後全く捕捉す可らず、一把の柳枝收不得、風に和して搭在す玉欄干といふ。果して是の如くならしめば誰か粉骨碎身の愚を學ぶ者あらんや。如上の妄見凡て說禪の形式より來れり、人生と何等交渉なきなり。大姉某基督教の信者なり來つて辰氏に參す、一日死後靈魂の滅否を將つて問を爲す、辰氏啓導するの力なく一書を與へて去らしむ、大姉書を得て讀むも解せず再び問を致す、辰氏頭緒を知らず、後、人に語つて曰く彼女理窟多くして煩累に堪へずと。其の頭腦の空疎未だ文字法師の域にも及ばざる也。

#### 第五節 結 論 眞正の導師とは何ぞや

如上數節に互りて現代邪師の眞相を曝露せり、此を將て最初述ぶる所の正法と比較すれば、累々たる邪師悉く佛法と交渉なき一奸商に過ぎざるを知るべし、向道の士邪師に法を求むるは、木に縁つて魚を求め火に就て濕を覺むるも以て喩と爲すに足らず。惟に其の求むる所に應せざるのみならず、却つて般若の正因を滅し菩提の種子長く芽を生せざるを致さん。古徳曰く、師は針の如し一毫の曲りあれば後につく絲悉く曲る、一盲の衆盲を引く如しと。誰か好んで敗殺焦牙たるを望む者ぞ、諸人須く急に頭を回して正法に歸すべき也。今特に邪師の恐るべきを示さん眞正の導師の面目を叙し、上節と對

比して邪正の別を明にすべし。

先師澤水參學の徒に示して曰く、「それ出家はおもき役人なり、その仔細は出家の二字の意味三毒無明の家を出離して佛祖の惠命をつぎ、一切衆生を導きて成佛の實地に到らしむる役人なり。さるによりて初より父母に事へず、俸祿を求めず、耕作を事とせず、賣買を心とせず、たゞ頭陀の境界にて心地修行一偏の出家なり、少年晩年をわかつたす頭髮を剃り落とすひとしく心中無量の貪求無量の憎愛無量の怨恨等俗の時の心をすべて剃り落して工夫一偏の心となり、諸方を行脚して諸善知識を訪尋して自己一心を佛祖の如く窮明し佛祖に代りて一切衆生を濟度すべき爲の大役人なり、……然るに身に佛衣を着け佛種と稱して十方の信施を受け、心地修行は夢にも事とせず、しかのみならず、心頭には大寺大院の住職を求め名聞利達を求めて空しく光陰を送ること、これ法賊にあらずや、問答商量の働、偈頌即席の働は臨濟徳山をも欺く程なれども却つてその心頭を探るときは色慾に溺れ金銀を求め食味を貪り病苦に惱まされ生を愛し死を厭ふ、これ出家といはんや、これを禪宗と名けんや、禪とは一心佛性の名なり、専ら心地明了なるを以て禪宗といへり。——老僧幼歳より禪定三昧にして實に一句一字をも學せず、然りと雖も今日いか程雄辯博學の人の出頭し來つて朝より暮に到る迄前後左右より難問難句を詰問し來るとも老僧毫末とも思はず、これ又何の力ぞや、老僧世間邊の事は幼年より學せざれども、



佛道の事はいか程高き所いか程深き處なりとも難問し來るべし、何ぞ一點もおしまひ、これ又老僧が手柄に非ず、元來出家は佛祖に代りて法柄をとり佛祖の教の如く後來を濟度すべき導師なり、いづれも出家はかくあるべきことなり」と。

眞正導師の面目是の如く分明なり、誰か説禪の宗師を以て此に擬する者ぞ、然りと雖も厚顏の邪師尙或は一片の卒業證書を把つて罷參と稱する者あるべし。好し僞をして知らしめん。古佛中峰門人を誠めて曰く、

佛法備が會する處なく生死備が脱する處なし、一報の身風燈石火の如く念々頭燃を救ふが如きも尙備が了辨の處なし甚の死急をか著けん平地上に許多の忙亂を討し眼を眩得し來れば早く已に四五十歳にし了れり、備甚麼を喚んでか佛法となす、任ひ備百千の聰明を以て一々他の三乘十二分教乃至一千七百則の陳爛葛藤及び百氏諸子を把つて從頭解註し水を盛つて漏さるを得るも、總に是れ門外に之を打して遠る、説時悟に似たるも境に對すれば還つて迷ふ、——如今有等の人橋皮を拾得して自ら認めて火となし、到處に高談濶論し一路を主張して道く、我れ佛法を會せり、人の恭敬せんことを要すと、甚の便宜を得る處かあらん。幻者三四十年此の事上に向つて著到し佛法の二字に展轉して尙相應せず、所以に日夜慚を懷く安ぞ敢て濫に師位に膺らん、尋常甘言厚幣に遇ふ、毒箭の心に入るも管ならず、

累に之を避けて可かず、此れ蓋し多生緣業の致す所乃ち虚妄の本、道力之をして然らしむるに非ざる也」と。中峰常に含景匿曜、未だ曾て師位に據るを欲せず、其の道風一代を風靡し名聲寰宇に喧きに至るも敢て世に出興せず、或者其の靖退小節を語り、一刹に住して化を闡かんことを勸む、中峰謝して曰く「余佛祖の道に於て悟證に缺く、尋常之を語言毫楮に形はす者特に信解のみ、思ふに古人旨を得るの後復危亡を懼れず三二十年身を爐鞴の側に置き尙其の悟跡を屏し其の證理を蕩せんと欲す、然る後眞に入り俗に入り一法の情に當るを見ず、則ち其の通身利劍の如く古鏡の如く、停機なく剩語なく千群萬衆の上に儼臨して尊たるを知らず、榮たるを知らず、是の如くの體裁を具して或は人天の推出に遭ふ、庶幾ば忝なからん。斯れ豈に情見未だ脱せざる者の能く假借する所ならんや。原ぬるに夫れ悟證の跡或は未だ盡洗せずんば則ち其の能所の見動もすれば輒ち紛然たり、能所といふは皆情見なり、且つ悟證の跡すら尙心に存するを容さず、何に況や信解をや、純ら是れ情見、其の至道の體に於て愈々親しくして愈々疎く益々近くして益々遠し。且つ自ら道を會する能はず、安ぞ能く人をして道を會せしむるの理あらんや。此の礙を自ら遣る能はざるを以ての故に敢て妄に大牀を尸り弘道の師と稱せざるなり」と。

中峰、澤水共に大悟大徹の正師なり。且つ澤水は龜庵の印證を受け宗門世系に於て中峰十四世の孫



なり、而も二者言ふ所一は即ち日夜慚を懐いて敢て師位に膺らすといひ、他は即ち佛道のこといか程高き處いか程深き處にても難問し來るべし何ぞ一點も惜まんといひ、大に趣向相反する者の如し。且つ澤水悟證に於て中峰に勝れるか、中峰光徳に於て澤水に優れるか、漫に先徳を謗する莫れ、己窮一件の大事直に須く究取すべし、法王今日冗語の閑なし。

### 第三章 室 内 論

#### 第一節 公案の眞義

上代未だ公案の名稱なし。後世宗師善巧方便を垂れて學人を啓迪せんとし、沒滋味の語頭を將つて彼が八識田中に放在し、其の根本無明を奮起して大疑情を發し一翻に翻轉し一到に到底せんことを待つ。黃檗希運禪師、既に丈夫の漢ならば箇の公案を看せよの語あり。理を盡して言はゞ公案とは自心の異名なり、尋常公案を管見する説禪を目して看話禪といふも、本來看は是れ參究の義、話頭は直に自心を指せる者にして、自己生死大事を把つて之を懐に蘊み究め來り究め去るを以て看話の眞義となす、世、説禪を看話といふに對し懶坐を以て黙照禪となす、然れども本來黙といふは即ち外障壁の如く内心喘ぐなきの謂にして照とは是れ惺々不昧昏散を屏除し情妄を空したるの謂なり。二者共に正念工夫

の端的なり。古來、黙照看話の二者相對立して互に争ひしが如くなるも、佛法史中此の事なし、但祖師後學低能の輩が自ら迷うて岐路に入らんとするを慮り、機用を弄して或は懶禪死坐を誡め或は隨文逐句を斥けたるのみ、皆是れ一期の療病にして眞意にあらざる也。見すや大慧口咄々として黙照の暗禪を痛罵し天童宏智の髻に倣ひて黑暗の深坑に墮する者を警省し、一見宏智に對して鋒を向けたるの觀あるも、反つて自ら一炬に碧巖を燒却したるを。又見すや宏智黙々として兀坐入定し大慧罵々の論難に一顧を與へざりしも却つて古人機縁を集成し從容録を編したりしを。又天童如淨の若きに至つては只管打坐身心脱落、日本永平道元の師、自稱看話の説禪者流が目して以て黙照禪の張本となす所なるも學人嘗て問うて、雜念紛飛いかんが手を下さんと云へるに對し曰く、只此の一箇の無字鐵掃帚の如く轉た多ければ轉た掃ふ、掃ひ得ずんば命を捨て、掃ふ忽然として太虛空を掃破し萬別千差一路通すと。前輩意のある所仔細にすべき也。

相似の禪者その説禪の資料を以て同じく公案と稱し管に同一文字を用ふるのみならず、又其の解釋の分別を以て做工夫となし相似の説をなす、門外の漢此を以て誤つて説禪に走る者少からず、今先づ祖師門下に所謂公案の眞義を説いて正法を闡明し、更に邪師所説の似て非なる所以を指摘して其の妄を辯すべし。中峰當時後學の爲醜を忘れて委曲に示す。山房夜話に言く



「或人問ふ、佛祖の機縁世に公案と稱する者は何ぞや。幻(中峰の)曰く、公案は乃ち公府の案牘に喩ふ、法の在る所にして王道の治亂實に焉に係る。公は乃ち聖賢其の轍を一にし天下其の途を同じうするの至理なり、案は乃ち聖賢理を爲すの正文を記するなり。凡そ天下あらば未だ嘗て公府無くんばならず、公府あらば未だ嘗て案牘なくんばならず、蓋し取つて以て法と爲し天下の不正を斷せんと欲する者なり。公案行はれて則ち理法用あり、理法用あれば則ち天下正し、天下正しければ則ち王道治まる。夫れ佛祖の機縁之を目して公案といふも亦爾り、蓋し一人の臆見にあらず、乃ち靈源を會し妙旨に契ひ生死を破り情量を越え三世十方百千の開士と同く稟くるの至理なり、且つ義を以て解すべからず、言を以て傳ふべからず、文を以て詮すべからず、識を以て度るべからず、塗毒鼓の如く聞く者皆喪し、大火聚の如く之に嬰れば則ち燎る。故に靈山之を別傳と謂ふ者此を傳ふるなり、少林之を直指と謂ふ者此を指すなり、南北宗を分ち五家派を列ねてより以來、諸善知識その所傳を操り其の所指を負ひ賓叩主應、牛を得て馬を還すの頃に於て、麤言細語口に任せて提出し、迅雷耳を掩ふを容れざるが如し、庭前の柏樹子、麻三斤、乾屎橛の類の如き、略々人の穿鑿に與かるなく、之に即けば銀山鐵壁の透るべからざるが如し、惟明眼の者能く語言文字の表に逆奪し、一唱一和、空中の鳥跡水底の月痕の如く、千途萬轍放肆縱横なりと雖も、皆得て擬議すべからず、遠く鷲嶺の拈華より今日に追ふ、又豈に一千

七百則に止まるのみならんや、他なし必ず悟心の士を待ち取つて以て證據となすのみ、實に人の記持を益して談柄に資するを欲せざるなり、世に長老と稱する者は即ち叢林公府の長吏なり。其の編燈集録の者は即ち其の激揚提唱の案牘を記するなり。古人或は徒を匡すの隙、或は關を掩ふの暇、時に取つて以て之を拈し之を判し之を頌し之を別す、豈に見聞を炫耀し古德に抗衡するが爲にして然らんや。蓋し痛く大法の將に弊れんとするを思ふが故に曲て方便を施し、後昆の智眼を開鑿し其をして共に之を證せしめんと欲するのみ。言く公は其の己解を防ぎ案は必ず佛祖と契同せんことを期す、然らば公案通すれば情識盡き、情識盡くれば則ち生死空す、生死空すれば則ち佛道治まる、云ふ所の契同とは乃ち佛祖大に衆生の自ら生死情妄の域に縛せられ積劫より今に這んで之が自釋なきを哀み、故に無言中に於て言を顯はし、無象中に象を垂れ、其の迷繩既釋を待つ、安ぞ言象の復議すべきあらんや。且つ世の人、事その平を得ざる者あらば必ず理を公府に求む、而して吏曹則ち案牘を擧げて以て之を平にす、猶學者悟解する所あるも自ら決する能はず乃ち之を師に質す、則ち公案を擧して以て之を決するが如し。夫れ公案は即ち情識の昏暗を燭すの慧炬なり、見聞の翳膜を掲ぐるの金篋なり、生死の命根を斷するの利斧なり、聖凡の面目を鑑するの神鏡なり。祖意之を以て廓明し佛心之を以て開顯す、其の全超迥脫大達同證の要此に越ゆるなし。所謂公案なる者惟法を知る者のみ懼る、苟も其の人に非ず



んば詎ぞ其の彷彿を窺ふべけんや。」

公案の眞義斯の如く近傍を容さず。説禪の徒、縦令公案と稱すと雖も曾て其の實なく益々情妄を引起し顛倒を増長するのみ。所以に更に進んで曰く「嗟世の迷妄の者其の源を考へず、毎に聰明の資を以て廣く尋ね博く記し顯に授け密に傳へて惟言通を務め心悟を求めず、棒喝交馳の勝軌をして情想の稠林に墮せしめ、龍象蹴踏の靈蹤をして是非の深窞に陥らしむるを致す、愛憎目に溢れ取捨懐に盈つ、古人醍醐毒藥の喻斯に驗し、叢林の替此に本づかざる者あるなし、嗚呼猶吏曹の法を竊んで以て天下の賄賂を貸し己私一勝するがごとし、公道治平の效あるを望まんと欲するも其れ得べけんや」と見るべし、等しく公案といふも眞偽是の如く異なるを。由來公案は自心を指し、一個既成の案文を執して、客觀的存在を認むる者にあらず、所以に曰く「眞正自己の爲にする底の人ならば公案を看するもまた得たり、公案を看せざるもまた得たり、豈に背て復清淨の耳根を以て、人の排遣して只看し、只疑ひ只參し、只守り、或は只半提し、或は只全提し、或は密々にし、或は攻々たらしむるを聽かんや。蓋し此等皆是れ尊宿垂示舉揚底の一時の方便にして、實に自己と交渉あらざるなり」と。看話の眞義此處に至つて分明なり。

説禪者流亦その職業の具に資せんとして此等古人の語を涉獵し、如上の説を引用して一時を糊塗し去るも其の偶々己見を主張するの處、直に馬脚を露はし來る。宿居士公案の説明をなし、祖語を排列し來つて大に公案の無義味透り難きを説き、分別理智を絶したるをいひ、公案の用を説いて曰く「公案の用は禪意を得るにあり、數多の公案を透過したりとて吾心に何等の光明を得ず、何等の力量を添ふるなくんば實地の上に於て何の效あらんや、此の如きを看話禪といふ云々」と。知らず公案と禪意とは是れ同か是れ別か、心に光明を認め力量を添へ得ば乃ち可なるか、經に曰く有作思惟從<sub>二</sub>有心<sub>一</sub>起、皆是六塵妄想緣氣非<sub>二</sub>實心體<sub>一</sub>已如<sub>二</sub>空華<sub>一</sub>、用<sub>レ</sub>此思惟辨<sub>二</sub>於佛境<sub>一</sub>猶如<sub>二</sub>空華復結<sub>一</sub>空果<sub>一</sub>展轉妄想無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>是處<sub>一</sub>と、是れ低能の世人に對する説話なるべきも、苟も宗門の事を談する者一語一句輕忽すべからず、妄談般若の罪恐るべく慎むべきなり。辰氏曰く、或者東海和尚に參し一則を守ること七年、終に徹せず乃ち機を轉せんとして儀山に投ず、漸く入證するを得、此より參禪大に力めしも先に東海下に在つて多くの星霜を費したれば老到つて終に大事を了する能はざりき、初機を接するに考慮すべき也と。彼れ公案を以て一個の物と信じ、大事了畢を以て公案終了となせるが如く、端なく此の不見識を曝露せり、其の餘邪師の所見悉く擧ぐるの勞に堪へず。

## 第二節 説禪内容の一般

説禪遊戲の學、其の弄する所の材料を公案と稱し、此に一種粗雜なる體系を與へて、一々學人に密



授す、其の秘傳密授を尊ぶが爲に世絶えて其の内容を詳にするなし。時として邪師自ら概括的に其の内容を暗示し、或は一千七百則の公案といひ、或は法身・機關・言詮・難透・難解・五位・十重禁・虛堂代別の法材あり、重々の關鎖以て學人を鉗鎖すと稱するも、惟是れ素人をして奇特尊重の念を抱かしめんとして深遠難解を装ふのみ。實際遊戯としても彼等が取扱へる材料は多きも四五百種、少きは二三百種の公案解説に止まり、此を法身機關等に分類し、幼稚なる體系に組織せる也。彼等概ね、是の如く公案の數を自白せず、人の問ふあれば乃ち曰く「公案一千七百則といふも何ぞ惟此のみに止まらん、一機一境悉く公案なり」と。巧に遁辭を弄し容易に實を吐くことなし。公案資料の出處は無門關、葛藤宗、碧巖集、臨濟録その主要なる者にして、更に邪師社會に於て、新作したる公案、即ち所謂雜則なる者あり。說禪内容の主要部は此にて盡きたるも、更に裝飾として洞山五位の解説、十重禁戒の特殊解釋を加へ、此に虛堂の代別一百則を添へて卒業となす。今師弟授受の狀態と、說禪内容の一般とを示さん爲、特に一說禪師と一門弟とを假設し、最初入門の時より、卒業に至る迄の經過を略叙すべし。相見、說禪の門に入らんとする者、贊を執つて初めて邪師を訪ひ引接面會するを稱して相見といふ。學人、侍者の案内により師家の居室に導かれ、先づ室に入るの前敷居外にて禮一拜し、更に室に入り師家面前にて一拜す（是れ、三禮の風に擬したる也今は三拜を略し一拜とする者多し）師家曰く、禪

は世間學藝と全く趣を異にせるを以て尋常の考にて事に當らば大に豫想に反すべし、昔白隱といふ和尚あり、隻手を差し出して曰く、兩手相拍つて聲あり、隻手に何の聲かあると、吾が門に入る者先づ此の隻手音聲を聞かざるべからず、汝且つ退いて工夫し來るべし、見處つかば再び來つて、所見を述べよ、吾汝が爲に檢せん云々と。學人又一拜唯々として退く。

入室參禪、學人此より脚頭を交へて坐禪の模様をなし隻手音聲の解釋に従ふ。謂らく、兩手相拍つて一聲あり隻手は是れ半聲と。乃ち師家の許に至り手を出して曰く是れ二分の一と、師家許さず學人即ち退く。此の一場の會見を稱して參禪又は入室といふ。入室とは毗耶室即ち維摩の方丈に入るの謂なり。而して師家の許可を得ざる場合を「滑る」といふ。

見性、學人此より所見ある毎に參禪入室し幾回か滑りたる後漸く師家の型に契當し、初めて許可を蒙る此を見性といふ。最初の入門より見性に至る迄の時日は師家により學人によりて大なる相違あり、其の早きは三四回の入室にて見性し、或は一月、或は三月、或是一年種々差別あるも三年を以て最大限となすを常とす、此の間の消息は見性論に於て詳論すべし。今二種の見性狀態を舉げて一般を示さん。

一、學人屢々滑るや師家教へて言く無用の分別思慮を要せず、恰も汽車に乗るが如し、求めたる切



符を呈示すれば乃ち可なり云々と。學人謂らく先に隻手を出して聞けといふ、今唯隻手を出さば可ならんかと。乃ち入室して黙然として手を出す、師家乃ち許す。

二、或師家は曰く、此の事は情識を容れず、分別を許さず、單々に隻手を提起し、隻手其物と一枚になり切るべしと。學人乃ち脊梁を竖起し心力を凝集して、隻手々と反復し、頭腦昏々として師家の前に至り、何となく左手を出して茫然たり。師家此を見て曰く、「奇特々々汝今正に見性成佛す、汝の九族此の功德によつて天に生せん」と。

此の二者多少氣分を異にするも大差あるに非ず、要するに隻手音聲といへば黙して手を突き出せば師家の意に契ふなり。

隻手の拶所、學人手を出すや、師家之を許し、次で曰く、吹毛劍なる名劍を以て其の隻手を截る時如何、汝が見性未だ充分ならず、茲に於て悟證を検する也、此を拶所といふ云々と。斯の如き隻手に關する拶所數個を了して他の公案に移る。此の拶所は單に、隻手音聲とは隻手を出すこと也てふ觀念を強固にするの用を爲すに過ぎず。此より演釋して、不合理なる公案の言句を合理的に還元すること、言句の反對を演ずること、成べく公案を卑近に解釋し、自己の心身に當はめ若くは身邊の事物、出來事に解すること等の方法を會得するなり。隻手の拶所二三を示さば

吹毛劍にて截る時奈何。答曰、截れず。拶して曰く何故切れぬ、答曰く宇宙に充滿せる故に。拶曰く宇宙に充滿したる物を將ち來れ。答默して隻手を出す。拶曰く死後の隻手は奈何、答手を出す。隻手を聞かば成佛すといふ、如何か成佛するや。答、手を出す。是の如く凡て同一概念の反復に過ぎざる者なり。此より愈々本則に入る。

(一)法身、隻手の解答法を適用し、公案の文句を其儘模寫し實境を描く者を法身といふ、例へば夢中有<sub>レ</sub>人間<sub>ニ</sub>祖師西來意<sub>一</sub>作麼生答、若答不<sub>レ</sub>得佛法無<sub>ニ</sub>靈驗<sub>一</sub>なる公案に隻手解釋法を適用せば、夢中傍人の間に答へ得ざるは恰も隻手に音聲なきと等し、而して先には音聲を無視して單に隻手を突出して透過したれば、此の公案も亦答不答を顧みず唯夢中の模様をなさば可なるを知るべし、即ち横臥して鼾聲を發し熟睡の態をなす也。

「鐘の音聲を止めよ」此亦同じく鐘聲の模様を描き、ゴーンと餘韻長く唸れば可なり。

(二)機關 「はたらき」の意なり、「はたらき」とは一面動作を意味し同時に頓智を意味す。前の法身は公案の示す所を忠實に描き出すものなるが機關は不合理なる言句を合理的に還元し、頓智よく日常の動作に適用して働く也、例へば左の如し。

「茶釜の中から五重の塔を出せ」是れ不合理の極なるが、茶釜より出す所は湯と定まれるを以て此を



還元して五重の塔に茶湯を代入し、此を働きに示す也、即ち茶釜より杓柄にて湯を汲み出す様をなし客に茶を進むる體にして「番茶を一杯召し上れ」といふ。

「虚空を粉にして持つて來い」、虚空に關せず、日用に働かしそば粉を召し上れ、七味唐辛を、等と氣轉よくやる也。

(三) 言詮 法身機關の解釋法を適用し口頭にて述ぶるを言詮といふ、此種類は稍、理性的傾向あり、學人の觀察によりて一種の教理、哲學の如く見ゆる者なり。

無邊刹境自他不隔於毫端。十世古今始終不離於當念。第一句は口にて柱、疊と莊重に唱へ、第二句は惜い、可愛いと入念に言ふ也。即ち、前者は客觀と主觀と一如の様子を示し、後者は古今と一刹那と一如なるをいひ、時間空間の認識的範疇を脱したる處を現はせる趣あり。

是法平等無有高下。富士山は高し愛鷹山は低しと、平等即差別の理を説く。

(四) 難透難解 一則の公案に摺所の數多く、或は着語多く、法身機關言詮の三者相錯綜して出づる者といふ、難透といふも銀山鐵壁透り難きが如くならず、難解といふは深遠難解の謂に非ずして、頓智を弄する甚しく不合理不得要領なるをいふ也。一例として白隱の所謂七難透中の隨一南泉遷化の解釋を示さん。

長沙岑禪師因三聖令秀首座問云、南泉遷化向甚麼處去、師云石頭爲沙彌時曾見六祖、此を何某は某處へ行きたりてふ意に解し、叢林の日常生活に適應して曰く「副隨の何某は門前の豆腐屋へ豆腐買ひに往けり」と、秀云不問爲沙彌時南泉遷化向甚麼處去、前述の理由を説明して曰く「今日は來客ある故響應す」と即ち機關の適用にして頓智を以て處分する也、師云教伊尋思去四邊を見廻はし、嗟今頃は何處へ行かれしやらと尋思の模様をなす、而して有ることは有るも捉ふる能はずといふ意味を古人の語にて表はす、曰く一把柳絲收不得、和風塔在玉欄干と是の如き古人の詩文偈頌を斷章取義的に假り來るを稱して着語といふ。師亦默然默然として靜寂なる模様を着語して曰く渭北春天樹江東日暮雲と、即ち春の夕暮樹林靜に並び暮雲寂しく浮べる様を以て默然の靜寂を表現せし也。

此を以て難透難解の一般を推し得べし、内容の法身機關と大差なきは元より愈々遊戯的分子の詳密を加へ來れるを見るべし。

(五) 五位 洞山五位の調べにして、如上の方法を適用し、此に多少の理論的觀察を加味し一個低級なる形而上學的説明を試む、後篇に詳論す。

(六) 十重禁 說禪形式にて十重禁戒を曲解し、無相大乘の教旨により悟者の實踐道德規範を示すに擬したる者にして此を終了すれば說禪の課程全く終り茲に坐水月道場修空華萬行なる相似語言の卒業證



書を授與せらる、此を印可證明といふ。

(七)虚堂代別 虚堂和尚語録の代語五十三、別語四十七を材料とせる者にして、通じて虚堂の代別一百則と號せり、主として卓州家の有する所、隱山家の師家には此を有せざる者少からず。

(八)向上の些子最後の牢關 最後に一關を設けて是れ最も透り難しと號し、如上終了者に與へて或は數月或は二三年の光陰を空費せしむ、其の内容は機關法身に類する者にして師家が各自潛に私造し置くものなれば、人によつて各々異なり、「臨濟録を一句に道ひ盡せ」「舍利天より降る、汝還つて見る麼」等是れなり。

### 第三節 見性論

達磨謂く直指人心見性成佛と、見性の意義炳として明なり、豈に許多の註脚を要せんや。夫れ正法に所謂見性とは説心説性にあらず。又特殊の心理的過程、一時の偶發的氣分をいふにもあらずして、一超直入如來地の端的を示せるなり。此故に見性即成佛なり、豈に容易の看をなす可けんや。兜率の悅和尚曰く撥草參玄は只見性を圖ると。又曰く自性を識得すれば方に生死を脱す、生死を脱得すれば便ち去處を知ると。見るべし、衲僧家複子を挾んで山に跨り海を超え千里を遠しとせず、參師問道する所以、只此の見性の一事に存するを。見性の大事了せば當下に生死を脱得し一生參學の事畢るべき

也。前輩大達の士、具に辛艱を嘗めて僅に此の相應あり、試に古人見性の端的を見よ。

臨濟初め黄檗の會下に在つて行業純一なり。首座に順つて黄檗に佛法の大意を問ふこと三度、首座に白して云く幸に慈悲を蒙り某甲をして和尚に問訊せしむ、三度問を發して三度打たる、自ら恨む障縁あつて深旨を領せざるを、今且く辭し去らんと、首座云く汝若し去らん時須く和尚を辭して去るべし、師禮拜して退く、首座先づ和尚の處に到つて云く、問話底の後生甚だ是れ如法なり、若し來つて辭せん時は方便して他を接せよ、向後穿鑿して一株の大樹となさば天下の人のために蔭涼と作り去ることあらん、師去つて辭す黄檗云く別處に往き去ることを得ざれ、汝高安灘頭大愚の處に向つて去れ必ず汝が爲に説かんと、師大愚に到る、大愚問ふ什麼の處より來る、師云く黄檗の處より來る、大愚云く黄檗何の言句かありし、師云く某甲三度佛法的々の大意を問うて三度打たる、知らず某甲過ありや過なしや、大愚云く黄檗與麼に老婆なり汝が爲に微困なることを得たり、更に這裏に來つて有過か無過かと問ふと。師言下に於て大悟す、云く元來黄檗の佛法多少なりと、大愚擲住して云く這の尿牀の鬼子適來は有過か無過かと道ふ、如今卻て道ふ黄檗の佛法多子なしと、備箇の什麼の道理をか見る速に道へ速に道へ、師大愚の脅下に築くこと三拳す、大愚托開して云く汝が師は黄檗なり、我が事に干るに非ず、師大愚を辭して黄檗に卻回す云々。(臨濟錄行錄)



後年師位に據るに至り衆に示して曰く「山僧往日未だ見處あらざりし時黒漫々地なり、光陰空しく過すべからず、腹熱し心忙しうして奔波して道を訪ふ、後還つて力を得て始めて今日に到つて道流と共に是の如く話度す」と。又曰く「道流、出家兒は且つ學道を要せよ、祇山僧が如きんば、往日曾て毘尼の中に向つて心を留め亦曾て經論に於て尋討す、後、方には是れ濟世の藥、表顯の説なるを知りて遂に乃ち一時に抛卻し即ち道を訪ひ禪に參す、後に大善知識に遇うて方に乃ち道眼分明にして始めて天下の老尙和を識得し其の邪正を知る、是れ娘生下にして便ち會するにあらず、還つて是れ體究練磨して一朝に自ら省す」と。

如今說禪の邪師自ら臨濟の餘流と號し、激揚提唱、臨濟録を講すると百千回なるも低能にして無道心なるが故に曾て返照して慚を懷くなし。這般の機縁只是れ文句の上の事のみと思ひ、然らずんば說禪の技を以て祖意に契ふとなす。好し憫等諸人が所謂見性の真相を剖析して無道心を鞭撻すべし。

邪師は其の門庭の殷振を期する爲、所謂見性を許すの時期人によつて同じからず、或者は學人をして速に解會せしめて說禪の興味を喚起し置き他門に趨るなからんことを計り、最初より頻に暗示を與へて學人解答の適中を待つ。早きは二三回或は數日にして許し見性底の人として遇す。又或者は特に古人峻峻の風を摸して容易に許さず、惡辣を装ひて入室毎に學人に痛棒を與へ、毀辱怒罵到らざるな

く、二年三年の歳月を空費せしめ、學人の神盡き精竭きたるを見て初めて許す。學人從上の無意味なる苦痛を脱して歡喜に堪へず、謂へらく是れ古に所謂百二十斤の擔子を放下するの端的なるなしやと。乃ち邪師の術中に陥りて滿腹の歸仰を捧げ、長く邪師に隨侍して股肱となる。此二者の外觀大に相異なるが如きも畢竟是れ營業の手段を異にするに過ぎず、其の初より見性の大事と交渉なきは勿論なり。何となれば邪師の暗示によりて短時日に透過したる者も、多年勞苦の結果漸く許されたる者も其の所得の内容に至つては共に一定の型を記持し得たるのみ、自己分上に於ては舊に依つて決着する所なき也。惟學人の性格識見等の差と、見性に至る迄の勞力如何とにより型式に對する見解を異にし、見性當時の氣分感興を異にするのみにして、此を以て或は甲は入度淺し得力微なり、乙は痛快に徹せり等と評し、恰も悟の深淺あるが如くにいひ、終に最初の入込みが肝要なり等の常套語を生ずるに至る。

今彼等社會に於て所謂痛快に徹したる者を取つて見性の心理を検すべし。今試に意識を一物に凝集し、注意力を一點に歸すること稍久しきに及べば、平常とは多少異りたる心理的狀態に達すべし。試に一物體を面前に頓在し久しく凝視すべし、暫くにして單に該物體自身のみ腦中に留まり他は意識圏内より除斥せられ、且つ其物體の性質、用途、名稱其他物體に附隨したる種々の觀念も消失し、單に物體の形象のみ浮ぶに至るべし。此等の經驗は日常何人も遭遇する處にして一時精神の統一せられたる状



態なり。此經驗は極めて瞬間時にして不注意の中に消失し去るを以て通常人の知らざる所なるも、少しく内省の傾向ある者は必ず領會し得べき也。藝術家には此の經驗を自覺せる者多く、此の心境を提持して或はあるが儘の現實に即して全的存在の意義を髣髴すといひ、觀照の世界等と稱せり、畫家が靜物畫と號して物體を描寫せるは此の心境を表現したるなり。シヨペンハーワー微細に此の心境の意義價值を叙述せり。說禪の見性心理亦此に類し、唯藝術家思想家等の如き具體的表現と組織的説明とを試みる能力なき爲已むなく沈黙し、不立文字教外別傳等の相似語言に逃避するなり。隻手音聲の公案を與ふるは恰も一物體を面前に置いて凝視せしむるに同じ、久しくして心中唯隻手のみ浮ぶに至り、音聲の有無等は元より、手の執捉の用をなすことも思はず、大か小か左手か右手か、指は如何爪は如何等の念慮全く消失し、單に隻手其者の形象のみ意識を占領するに至る。此の時何となく師家の前に至つて左手を突出す者なり、此を見性といふ。其の意識を占領するの程度により、或は意識全體が隻手に占領せられ居る時は手を出すことも烈しく、或は七八分占領せられ未だ二三分を缺く時は徐々に突出す者なり、前者の如きを痛快に徹せりといひ、後者を得力微弱なりといふも、共に一時的氣分の變調に外ならざる也。かくて一旦此の心理的過程を履ましめ置きて、此に相似の語言を交へ漸次許多の公案、解釋を教ふ。即ち此の心境をば絶對の境涯にあて、相似の語を假りて、此れを五位中の正位とし、法

身、本體、眞の面目、本地の風光、平等無差別の境涯なりとし、說禪體系の第一歩として本體論に擬するなり。而して變態心理の經驗を執して自悟自證とし、冷暖自知の端的と思へるを以て、哲學に所謂本體論とは異なり脚實地を踏んで得たる所、眞の知見なりと稱し、不傳の妙這裏に在りとす、而も實際其の眞價は上述の如く精神統一の状態を固執し、此を特殊の形式に表はしたるのみ、正悟の分齊に非ざるなり。試に此の型を記して師家に對すれば、師家奈何ともする能はずして許す者なり、說禪に所謂見性の價值知るべきのみ、其の罪過蔽ふべからず。

#### 第四節 室内穿鑿の概評

所謂見性によつて初めて說禪門内の漢となり、此より說禪本論の學習に入る。故に見性を以て嚴格に一線を畫し見性せざる者と呼ぶに無眼子、瞎漢或は「どめくら」の卑語を以てす。隻手、無字等に對して見性すれば直に此に附隨したる問題即ち拶所により說禪法の進路を教ふると第二節に述べたるが如し。其の本旨は見性の氣分即ち精神統一の一時的状態を明確に意識せしめ將來此を適用して公案解釋に従ふの方法を練磨せしむるにあり。此より後は學人の心理状態二重になる。即ち先づ未知の一公案に對して此を見性氣分にて如何に取扱は、可なるかを檢し、次に先の見性氣分を該公案に適用して、一時的氣分を作り、此を以て師家に呈する也。その最も簡易なる者を法身といふこと前述の如し。



法身に屬する公案は一事一物に對して先の見性氣分を應用するを以て、茲に吾と萬物と別ならずて思想を養成す、此を心境一如の處ともいふ。然れ共初の隻手の場合には學人が初めて此の氣分を味ひたるなれば直に本體論に充てたるが、法身に至つて諸種の事物に對して屢々同一氣分を反復するを以て自ら差別的思想を生じ、此を以て現象論に充つるに至る。而して元來同一氣分の適用に過ぎざれば二者元より相離るべからず。此の點をとつて平等即差別、現象即實在の相似教理を示し、更に一即一切、多即一の理窟を形成し一種幼稚なる形而上學的體裁を呈するに至る。而して元來變態心理の取扱ひなれば恰も自ら脚實地を踏み來りたる想をなし、此處をとつて平常是道とし、道は近きにありとし、類に相似語言を以て捏怪を逞しうす、機關に至つて益々甚だしく自己元來大道の眞只中にあり、一切時中受用不盡なりとし、百姓日々に用ひて知らず、瞎漢憐むべしと、漸く増上慢の窠臼に陥り般若の正因永く滅却す。言詮に至つて一種の相似教理を記し難透難解に至つて解釋法の適用益々熟練し來り久參の上士と稱せらる。

公案解釋に關して注意すべき點二三を擧ぐれば

一、模様をなすと 是れ最主要點なり。即ち見性氣分の適用にして、或は全身或は半身、或は手或は足等により實境を描く。

二、公案の句を反復す 即ち公案の言句通り大聲にて讀み上ぐる也。例へば六祖衣鉢の則の如き此衣表<sup>レ</sup>信なる六祖の語を其儘大聲にて反復し「信を表す」といへば可なり。

三、頓智を用ふ 公案解釋に當りては言句の反對に出づるを常とす、法身機關等此の注意ありて働かば概ね適中すべし。又平易に物と拘はらず答へ、或は意表に出で極めて奇抜なる答をなす場合あり、詳細は後篇を参照して、自得すべし。

四、公案の言句如何に拘らず、可成の手近き事物にとり、或は自己のことにひき當て、解すべし、例へば文殊普賢昨夜三更起佛見法見の如き文殊普賢を自己とし、佛見法見を妄想として見る時は直に解し得るが如し。

其他種々の條件あるべきも省略に従ひ、好事者の穿鑿に一任すべし。

說禪學習の結果として幾何の所益ありや、從上縷述する所により略々推察するに難からざるべきも今總收として、いかに佛法を玩弄し正法を誹謗するに至るかを指摘せん。

一、自性の解釋 彼等說禪の徒は精神統一の一时的氣分を以て自性の本體とせり、從つて彼等は時としては自性に入り時としては出づるものと思へり。或卒業者得々として曰く有無雙々として端睨す可らざる是れ禪の面目なりと。即ち平等と差別、無と有、本體と現象と常に待をなし此の兩途を往來



する者と思へり。更に兜率三關の如き公案の解釋の結果概念の錯綜を來して自性に一種の定義を付せり、此の公案は「即今上人性在甚麼處」なる句に就て「甚麼處」を解釋せしめ、四邊を見廻はして「いづれ」の模様を描く者なるが、此を以て自性なる者は四邊に充滿し居るも目には見えざる也とし、此の状態を着語にて表現し曰く、只在此山中、雲深不知處、或は曰く無風荷葉動決定有魚行」と。茲に至つて全然六十二見に墮せるを見るべし。

二、生死の解釋 無字隻手等の拶所に未生以前の無字又は隻手、死後の無字又は隻手等あり。此等は元來見性の氣分を確認せしむる爲に贅語を加へて試みたるものなるが、其の生死の文字を使用せる爲又概念の錯綜を來し、生死唯一如或は生もなく死もなし、唯是れ無字隻手のみありといふ、而して此を以て生死の結縛を斷じたりとせり。邪師某曰く臨終の時も唯一個の隻手と、恰も是れ低能なる念佛行者に類する者にして前路極めて茫々たりと謂ふべし。更に兜率三關の生死を脱得し、去處を知るの公案を解釋して、生死脱得は臨終の七顛八倒其まゝ也とし、死後の去處は墓碣の下なりとし、死の現象其の者が眞の面目にして何等意義なきものとせり。又南泉遷化の解釋によれば死後は周遍法界にして見る能はざるも存在する者とせり。是の如くにして終に決着なく、生死大事の文字を遊戯的玩弄物するに至る。

三、聖典誹謗 經典を見るに公案解釋法を以てし、大乘了義の經をも、跳躍或は反讀にて眞義を得たる者とするに至り、聖典の價値を下ぐる可甚だし。例へば、金剛經中、應無所住而生其心、或は過去心不可得現在心不可得未來心不可得の如きを說禪形式にて解し、佛意を味して平然たるが如し。

四、反道徳的行爲の辯疎 說禪形式は見性氣分を萬事に應用するを以て倫理的行爲に對しても極めて簡單なる觀察を下し、其の結果十重禁戒の如き放逸なる道徳的規範を設くるに至り、此を以て大乘圓頓の戒と執し、無礙自在を誤つて放縱無賴の行爲をなし、尙且つ持戒の端的となす。說禪卒業者中品性劣等にして反道徳的行爲を敢てし愧づるなき者多きは一に是の如き便宜なる道路あればなり。

說禪室内の真相略々斯の如し、相似の禪語を記持する愈多くして道と違背する愈甚しきを見るべし。中峰曰く、

近時學者の病、禪を會せんと要するに速なるにあり。禪爾が會する底の道理なし。若し禪を會すと説かば是れ禪を誘するなり。麻三斤、柏樹子、須彌山平常心是道、雲門願、趙州無の如き、一々透得するも是れ禪語を解す、亦禪を會するに非ざる也。若し妙悟せずんば縱令語を解する塵沙の如く法を説くこと涌泉の如くなるも皆是れ識量分別、禪說に非ざる也。當に知るべし、禪語初より會し難からず、凡そ一千七百則の公案之をして、片餉の間に通會せしむるも亦難からず、如今の禪學者流多くは



是れ箇の話を商量し皆肯て頭を回して己を扣いて參せず、所以に古人禪語を目して野狐の涎唾と爲す良に旨あるなり」と。

## 第五節 嗣法論

竺土大仙の心東西密に相付す、少林單傳の旨畢竟何物をか傳ふ、大梅は馬祖に心を得、臨濟は黃蘗に法を嗣ぐ。傳心付法嫡々相承といふ者抑々何物をか、授與し、何物をか護持す。臨濟曰く「得といふは是れ不得なり、儒が一切處に向つて馳求心歇むと能はざるが所以に、祖師言く、咄哉丈夫、頭を將つて頭を覺むと、儒言下に便ち自ら回光返照して更に別に求めざれ、心身と祖佛と別ならざることを知つて當下に無事なるを方に得法と名く」と。

中峰曰く「近代師位に據る者等心垂化令法久住を思はず、往々嗣を求むるに急にして閭巷庸俗のなす所を效す、勢利を以て相傾き名位相誘ひ、物欲相勝ち、情妄相欺く。此に似たらば數千百傳繩々として墜ちすと雖も、何ぞ理に益あらんや、惟益なきのみならん實に害の至なり」と。現代說禪禪流の嗣法全く此の類にして更に甚しき者あり。本來非法を營む者其の嗣法、世家の相續に類するも怪しむに足らざる也。說禪の得法とは說禪法全體の習得を意味し、恰も學校の課程を終り技藝の講習を了るが如きものにして嗣法とは此によつて卒業證書を授與せられたるの謂なり。世或は說禪學習の半途にあ

る者にして稍丈夫の志氣を負ふ者、時として說禪の價值を疑ふに至るも全然說禪を一蹴し去る能はざるは、卒業の期に至れば何等かの相應あるべく、師家爲人の手段あるべしとの希望あるに由るが如し。今此等不幸なる求道者の爲に說禪卒業生の告白二三を録して其の蒙を啓かん。

吳氏曰く一日入室の因、師一則を授けて曰く、此の則は従前と異なるを以て容易の看をなす莫れ充分練り來つて呈せよと。茲に於て恐懼して退き、刻苦力參、三ヶ月にして漸く許されたるが願みれば機關邊の分際にして、此を最初參學の頃に於てせば是の如き努力は要せざりしならん。而も此の一則にて室内は卒業し居たるなりき、嗟夫大石に躓くことなきも小石には躓き易きものなりと、得々として後輩に語る。

眞淨曰く一日一則を與へられ、此則容易ならず、見處充分なるに至つて參し來れと、乃ち此一則にて大に得力あらんと力を極めて參し殆ど一年にして許されたるが、此時尙次の公案いかなる奇特かあらんと期待せしに、思ひきや此にて終了し居たらんとは。越溪曰く室内の事は先づ／＼此位にて可ならんと。

日氏、荒氏の偏寵を受け數年にして卒業す、曰く末後猛烈に精勤したれば愈了畢の時大器なりと讚辭を受けたるもしかく喜ばざりしと。而して了畢の後最初より反復検査三回に及ぶといへり、是れ明



に其の内容の禪語記持に止まるを自白せるものならずや。

如上の實例に徴して室内卒業の効果略推察に難からざるべし、而して卒業者中稍真摯なる者は自己の得力甚だ微弱にして日用中動靜二境に對して自在を得ざるに想到し潛に謂らく、是れ定力未だ慧力に伴はざるが故に然りと。即ち室内の公案解釋を以て慧と計し死坐を以て定と解し、此より悟後の修行のつもりにて密々に従前記持の公案を復習し脚頭を交へ下腹部を張り以て聖胎長養に擬す。其の低能厚顔の甚しき者に至つては卒業の印證を受くるや直に衆を集めて營業に従事する者少からず。二者俱に心地の法と何等交渉なき也。

然れども古來說禪卒業者中頭を回して其の無意義を覺り、師位に膺るの苦に堪へず、佯狂として踏晦是れ力めたるの漢なきにあらず。鐵牛、越溪に參して室内を了し印證を得て後丹波山中の一院に住し、妻を迎へ酒を飲み肉を啖ひ破戒亂行到らざるなし。越溪聞いて震怒し、獨園を遣して印證を却回せんとす、獨園旨を奉じて至る、鐵牛曰く吾何の過かある、妻帶か飲酒か肉食か、獨園曰く皆然らず唯師兄參學事了りたる是れ過なりと、鐵牛唯々として直に印證を返還し、復獨園を顧みず妻の手を把つて別室に去る、獨園使命を果し得て揚々として歸ると。世傳へて以て獨園の機智を稱す、奚ぞ知らん、鐵牛英靈の漢當時既に相似禪に誤られたるに憤激し、且つ人の推出に遇はんことを懼れて此の佯

狂を敢てせしを。後年獨園卒業生に對して印證を與へざるは、此に慮る處ある也と、叢林相傳へて獨園の宗風謹嚴なるを稱す、低能無識寧ろ憫殺にだも値せず。

其餘、一々說禪師家に就て嗣法の状態を記述せば悉く自心と交渉なき一遊戯法の授受に過ぎざるを明にすべし、是の如き閑事は余の堪へざる所、たゞ現今の說禪學徒は如上の例によつて速に說禪圈外に跳出するの英斷に出づべく、說禪師家は頭を回して自己了畢當時に想到し多年の迷夢を覺破して正法に歸順すべき也。今日法王特に向道の閑を割いて出頭し來る、豈に徒に嘲罵を事とする者ならんや、誠に慈憫已むを得ざるものあれば也。

#### 第六節 相似禪家風の異同

佛法惟生死透脱の法門なり、開示悟入佛知見の一乘法なり、初より教禪の別なく聖道淨土の異なく顯密の差なし、其の法門施設無量なるもの偏に衆生の迷妄に隨つて名を立て種々建立する所に過ぎず。直指單傳の宗分れて五家となり互に化を擧ぐる如き大に仔細あり、現代相似の禪者低能を以て佛法を意度し、古五家宗風の異同を曲解して亦各々家風を立つるに擬し、宗旨不同を銜ひて自己廣告の一手段となすも天地懸に異なり、徒に法王をして後に在つて鼻を掩はしむるを致す、今日後學初機の爲醜を忘れて委曲に指陳し去らん。



明治維新前後に於て鎌倉圓覺寺に正法の孤壘を守り鶴林群邪の間に儼臨して堂々眞風を舉揚せし明眼の宗師を東海昌峻禪師となす、禪師爲人の所無義味の話頭を把つて學人の八識田中に放任し、其の蕞忽に打破し來るを待つ、故に些子の變態心理を許して見性となさず。禪師の會下、眞正道の爲にするの衲僧數十名を下らず、隨侍參究二十年を超ゆる者十數名ありしも未だ一箇の見性したる漢なく、衣鉢を傳へ得たる者なし。或者禪師に嗣を定め置かんことを勸む、禪師一笑して顧みず、終に一人の法嗣を残さずして遷化し玉へり。佛法尊貴なり、人情を以て未悟を證して已悟となす能はざれば也。

當時鶴林の兒孫、波蕩風靡して白隠東嶺の畫策全く成り、說禪の閑技を以て宗門を横領せしも終に一箇東海大和尚の佛法を奈何ともす可らず。說禪者流私に鎌倉の禪風を目して「一枚悟り」と云ひ、或は嘲笑して「鍋蓋禪」といへり。蓋し一枚悟りとは蕞忽打脱の端的を指すに似て、實は自家の公案解釋履踐を以つて幾多難關を透過するを要する高遠なる者に擬し、此に對して唯一遍の悟りにして極めて淺薄なる者とする中傷的言辭なり。鍋蓋悟りとは一枚悟りの譬喩にして、一旦鍋の蓋を取りたる時煮沸全く成れるに喩へて、一朝見性せば同時に大事を了明せるを謂ふ、而も此意味の反面に於て室内の調べ極めて粗雑なるを暗示し鶴林家風の綿密なるを讃せんとするの意あり。當時關東の一枚悟りは群盲毀譽の間に在つて堅兵儼城の犯す可らざるが如く、凛々然として古佛命脈を支持せしが、世既に澆

漓、人心荒怠を極めて天下悉く鶴林相似の禪に趁り、海東唯一の法燈茲に絶滅せし也。

茲來叢林相傳へて關東の一枚悟り京都の楷子悟りと言ひ、鎌倉禪と京都禪と宗風全く異なるものとするに至る。東海大和尚遷化の後、荒廢に歸したる圓覺叢林を董し若干の雲衲を集めて保社を興したる者を今北洪川といふ、鶴林の兒孫にして他の相似禪者と同類なり、唯少しく文字を解し伶俐の資に加ふるに風采稍昂りたる者の如し。彼圓覺に化を布くや其聰明の資を以て鶴林說禪を裨賣するに同一概念の排列法に多少の改良を加へ、且つ其の漢學の造詣を交錯して特殊の趣向を創む、天下の群盲先の東海禪師の一枚悟りを以て關東宗風とせるに慣れ終に洪川以降の鎌倉禪をも同じく一枚悟り鍋蓋悟りの名を以て呼び京都禪と全然異なるものとせり、奚ぞ知らん洪川は鶴林說禪の法師にして東海禪師とは何等關係なく自餘累々たる說禪業者と擇ぶ所なきを。而も彼等同業者間に在つて特に鎌倉禪といふもの、亦低能相應の理由なくんばあらず。京都の邪師某嘗て云く「古來鎌倉禪とて家風別異なり。鍋蓋悟りは鍋の蓋にて押へたる如くどうも確實ならぬ者なり」と。是れ洪川以降の禪を評せしものなり。果して同一說禪にして此の如く大なる相違ありや、内容の眞價に幾何の優劣ありや、試に其の眞相を剖析せん。是れ兩家互に宗風の異を唱へて自讚毀他し、往々學人をして東西に馳求せしめ、光陰を徒消せしむるを以て、一斬に斬斷して佗の迷妄を破るの要あれば也。



洪川以降の鎌倉禪が一枚悟りと言はるゝ所以は、他の叢林に比して所謂見性を許すの時期稍早きと、見性以後の説禪傳授の順序を異にせるに依るのみ、即ち見性に附隨したる隻手無字等の撻所を數種終了すれば、直に所謂難則より機關法身等の解釋若干を教へ、言詮より難透難解迄主要なる代表的公案解釋を順次に傳へ、數年にして五位十重禁をも終了せしめ、一應說禪體系の梗概を傳へ了りて後、更に詳細に隻手無字の撻所より難則本則等を傳ふるなり。京都叢林は之に反し、最初より一々履踐せしめて五位十重禁に及ぶものなれば、今假に二人の雲水京都と鎌倉とにて同時に見性し同じく說禪學習を開始して數年を経たりとせば、一は未だ法身機關言詮より進みて、漸く難透難解の二三を修め得たるに反し、他は既に五位十重禁を了せる如き結果を生ずべし。茲に於て一は他を目して鍋蓋禪の進むのみにて得力なしとし鎌倉の安賣りと云ひ、他は一を以て迂遠拙劣なる修行法として嗤笑指彈す、而も彼等が說禪内容全部を修了したるの結果に至つては同一にして、其稍異る點は着語の相違、禪海一瀾の解釋の有無等に過ぎざる也。近く月氏京都に於て孤奇峻峻の宗風を舉揚し、天下の知識許すとも山僧は許さずと豪語し、公案の履踐を要せず一則を守つて打破し來れと稱し、門庭一時繁興を極むるや關東の雲水數員亦撥草瞻風して爐轡に投じ、最初月氏の頑強なる拒否に遭ひしも久からずして許され終に同一内容に過ぎざると曝露したり。要するに鎌倉禪京都禪と云ふも毫も内容に差あるに非ず、共

に鶴林說禪の體系を傳ふるのみ。或は美濃叢林を以て古風を傳へたる者とするも畢竟同一範疇を出でず、惟ゞ地僻遠にして師家を初め雲衲等の時代に接するの機少く、朴野の風あるを以て低能輩の趣味性を刺戟せるのみ。美濃の説禪師某、或時大會に於て他叢林の雲衲を接し萬法歸一の則を與へ容易に許さず、此則は最微細を極めたる者なりと號し、獨得の宗旨ある如く装ひしも、其實所謂微細とは「一、十に歸し十、百に歸し百、千に歸し千、萬に歸し、億、億に歸し、億、兆に歸す」といひ數字を詳細に述ぶるに過ぎず、端なく自己の低能を廣告せし戯劇ありき。

之を要するに、彼等の所謂家風或は宗旨とは公案解釋の言句の相違、着語の異同、跳躍舞踏の差等にして全く小兒の嬉戯に類する者なり。而して同く白隠より出でたる說禪體系の内容が、今日に至つて何故諸種の型に分れたるか、其因を討ぬるに是れ全然自心と交渉なき一游戲法を低能より低能に傳へ、展轉して今日に追びたる者なるを以て、其間授受に多少づゝの誤を生じ、且つ各々己見を以て說禪の範圍内に於て新機軸を出さんと努力せし結果が積集せし者ならずんばあらず。曾て一雲水京都の説禪師の許にて「茶碗の行道」なる難則を學び、室内に於て内佛の茶碗を取らんとして、徐に座を起ち佛壇に向ふや、師家此を以て行道の模様をなす者と認め許したることあり。又一雲水は微風吹<sub>ニ</sub>幽松<sub>一</sub>近聽聲愈好なる公案を學び手を以て耳を壓し耳腔の鳴るを以て最近き聲なりと解し、師家の前にて掌



にて耳を掩ひたるに、師家老眼にして此を松聲を聞く模様をなせる者と思ひ許したることあり。此等滑稽なる室内の真相枚擧す可らず。かくして誤解は誤解を重ね幾代か師資相承の後には某の家風某の宗旨と稱せらるゝに至る也。現時參學の士一邪師の許に見性し若干の公案を記するも肯はざる時は、更に他の邪師に投じて決擇せんと欲する者あるべきも、邪師は悉く同一類にして如上の差あるに過ぎざれば全然師を代ふるの要なき也。

邪師は各々自家家風の優越なるを衒ひ、他の邪師の許より轉じ來りたる學人に對しては一旦學人從上の所得を奪ひ、無眼子として取扱ひ、無字隻手等を與ふるを常とす、而して他の邪師を誹謗して云く「盲目知識に就けば一生不具となり、眉毛墮落す」と、而も自家營業の内容何等他と異なるなきなり。邪師或は學人を責めて「見方が浅い」といひ又は「骨折が足りぬ」といふことあり、是れ學人が説禪の誑惑に遇ひて歸服し來るの度弱きを責むるの辭なるも、學人却つて自己の努力微弱にして祖意に契はざるなきかを怪むことなきに非ず。然れ共説禪の閑技に見方の深淺や骨折の大小などを言ふ必要なし、元來說禪法師に佛法の何たるを知る者なく、禪とは何ぞ、公案とは何ぞ、と着問せられて無難に答へ得る者もなき状態なれば彼等が如何に低級の頭腦を絞りて誑惑し來るとも一顧を與ふるの要なき也、經に曰く法尙應捨何況非法と。

五家宗風の別異の如きは説禪者流が勢利の爲に異を立つると全く同じからず。中峰問者に答へて曰く「云ふ所の五家は乃ち其人を五家にし、其道を五家にするに非ざる也」と問者宗旨不同を以て問ふ、中峰曰く「不同に非ざる也、特に大同にして小異のみ。大同と云ふは少室の一燈に同じき也、小異と云ふは語言機境の偶異のみ。瀉仰の謹嚴、曹洞の細密、臨濟の痛快、雲門の高古、法眼の簡明の如き各其の天性に出で、父子の間故歩を失はず、語言機境相蹈習するに似たる、要、皆然るを期せずして然る也。當時宗師をして苟も異を尙んで自ら一家の傳を爲さんと欲せしめば則ち其の謬に勝へず、爲す所の若きを以て豈に佛祖世を照すの命燈を傳ふるに堪へんや。今の禪流、宗旨に泥みて虚空を夾截するの妄見を起し、互に相短長す。余知る、五宗の師大寂定中に於て鼻を掩はざるなきを」と。

或者現時鶴林兒孫の宗旨不同を以て問をなす、法王云く「不同に非ざる也、特に大同にして小異のみ、大同と云ふは鶴林の一技に同じき也、小異と云ふは語言跳躍の偶異のみ」と。



## 第三篇 相似禪内容詳論

## 序 説

こゝに愈々現代の臨濟禪、即ち相似説禪の内容を徹頭徹尾曝露して一々解説を付し、三衣下に撞入せる魔波旬をして再び捏怪を逞しうする能はざるに至らしむべし。諸方説禪の學徒、一旦本論を記持せば直下に三十年參學の大善知識と寸毫の相違なき造詣を得、また黄金の膝を屈して老禿奴の門に入するの要なげむ。豈嘗に師家と肩を比するに至るのみならんや、本論の如きは幾多の門風を涉獵し來り、彙集編成したる者なれば現時説禪業者中の鏘々たる者と雖も亦未だ嘗て是の如く豊富なる材料を有する者はあらず、諸子恐らくは日本有數の大禪師となるを得べき也。げにや中峰もいひけむ、禪語初より會し難からず、片餉の間に通會せしむる亦難しとせざるなり。

説禪家風、隱山、卓州兩派に分れ更に師家によつて各々多少の型を異にするあるも、凡て前篇述ぶる所の解釋法を出でず、同一概念、同一心理の取扱方を稍異にするのみなれば假令老猾なる邪師の一時本論を否定する如きことあるも斷じて節を屈するの要なき也。翻つて邪師部族は本論を見て須く倒

退三千里、速に佛袈裟を脱し野狐の真相を露はして塚間草裏に去り、復白晝人界に横行して變態を逞しうする莫るべし、若し未だ法王の令に隨はずんば屠夫を放つて一棒に打殺せしめんのみ。

本論曝露し來る所の説禪内容は悉く出處あり、皆説禪業者より直接奪取したる所に係る、法王當時報縁に隨つて邪師の門に入り暫く説禪の家風を聞く、即ち是れ佛祖法王をして假に説禪學徒の身を現せしめ、今日に至つて此の大悲拔濟の願行を成せしめ玉ふ所以なり。今、説禪禪賣の邪師の名を記さず、且つ法王生を日本國に示して族籍氏名を有するあるも特に秘する所以の者、亦佛祖の付囑已むを得ざるものあれば也。何が故ぞ、名位相欺いて愧づるなき説禪の邪師且く伏して處分を聴け。

爾等波旬、師位に據つて人の尊稱を奉るを喜び、或は不淨を撒して管長の世榮を望む。且つ名は是れ何ぞ、何としてか名を求む。蓋し名を尙ぶは我ある所以なり、我あるが故に愛見を生ず、愛見は名よりも甚だしきはなし、故に名は五欲に於て其の一に居る、欲は心に潛み隱微にして見難く、縁に遇うて動けば萬夫も能く敵するなく、千聖も能く制するなし、斧鋸前に在り鼎鑊後にと雖、將に顧みるに暇あらざらんとす、又何ぞ夫の因果を畏れんや。切に説禪の邪師に誨ふ、法王名は何ぞ、本論の出處何人の室内ぞ、眼眨々として胡鑽亂撞するを已めよ。三界安きことなし猶火宅の如し、是れ爾が久く住する處にあらず、急に須く頭を回して眞正の見解を求むべし、法王垂慈今日諸人の爲に談柄



を増して情妄を引起するなからしめんとす、正に宜く焚香作禮して直に半間茅屋に向つて去れ、珍重。  
 本論叙述の體裁及び順序は最初見性の具たる隻手音聲と無字とを、特に隱山家卓州家に分ちて記し  
 稍詳細に解説を付して兩家解釋の異同を示し、次で雜則部に於て主として法身機關に屬する所謂雜則  
 なる者を掲げ、師家によりて解釋法の相違甚だしき者は並び掲げ、本則部に於ては碧巖集、無門關、葛  
 藤集臨濟錄等を材料とせる公案を解説す、而して此中には法身より難透難解に至る迄の公案を含有し  
 居るも特に區分するの必要なれば勉めて一般師家が學徒に傳授するの順序に従ひて排列せり。但し  
 師家によりては、最初見性の後無字又は隻手の拶所五六を示して後雜則十個内外を示し直に本則を與  
 へて法身より難透迄の概略を教へ、五位、十重禁をも早く教授し扱後、茲餘の公案を一々傳ふる者あ  
 り、或は最初より無字隻手の拶所を詳細に教へ、雜則を悉く見せ、徐々に本則に入り、此等全部を終  
 了して後五位十重禁を傳ふる者あり、何れにしても大差なきことなれど今は便宜に従ひ後者の順序に  
 よることとせり。

### 第一章 隻手音聲及趙州無字

#### 第一節 隱山家の室内

##### 一、隻手音聲

【本則】 兩掌相拍つて聲あり、隻手に何の聲かある。

(學人答) 師家の前に端坐し無言にて隻手を突き出す。

(拶所) 一、 隻手を聞いたら證據を見せよ。

答 無言にて隻手を突き出す。

二、 隻手を聞いたら成佛するといふが、どう成佛するか。

答 無言にて隻手を突き出す。

三、 灰になつた後、何と聞いたか。(又死後の隻手)

答 無言にて隻手を突き出す。

四、 吹毛劍の隻手、斬れるか斬れぬか。(吹毛劍は名劍の名也、正宗の  
名劍にて斬る時如何の意也)

答 斬れませぬ。

又 斬れるなら斬つて御覽じ、と言ひ手を出す、或は無言にて手を出す。

五、 何故斬れないか。

答 宇宙にみち／＼たるが故に。



六、宇宙にみち／＼たる物を持つて来い。

答 無言にて隻手を突き出す。

七、未生以前の隻手。

答 無言にて隻手を突き出す。

八、富士山頂の隻手。

答 手を額にかざし富士山頂より下瞰する態をなして曰く、あゝ佳い景色だ、三保の松原清見寺。或は其地の附近の遠望を述べしむる者あり、例へば武藏に於てせば「此方を見れば秩父山、此方を見れば東京灣」などいふが如し。

九、富士山頂の隻手に語を著けよ。

答 浮雲連海岱平野入青徐（唐詩選にあり）

一〇、裏で聞いたか表で聞いたか。

答 手を出して反覆して曰く、裏表自由自在。

又 裏でカア／＼表でチュー／＼といふ。

二、隻手を聞いて何にする。

答 草取もします、雑巾掛もします、お疲れならば按摩も致します。

三、そんなに重寶な物なら、わしにも聞かせい。

答 無言にて師家の横面へ一掌を打す。

三、其の隻手何處迄届く。

答 手を疊の上へ差し出し「此處迄届いて居ります」といふ。

一四、十五日以前の隻手、十五日以後の隻手、正當十五日の隻手。

答 右手を出して十五日以前の隻手。左手を出して十五日以後の隻手といひ、兩手を合せて正當十五日の隻手といふ。

一五、隻手微妙の音聲。

答 師家の前に在る時、聞ゆる音聲を直に真似する也。即ち其場合に降雨ならばバラ／＼ピシャ／＼と雨聲を摸し、鳥聲聞ゆれば直にカー、ピョ／＼等唱ふれば可なり。

一六、隻手無聲の音聲。（又は眞箇無き音聲を聞け）

答 無言にて起立し、更に坐して禮拜す。

一七、隻手眞の境涯。



答 夢幻空華と観じまする。

一八、 隻手の根源。

答 盡大地風颯とも吹かぬ、土一管めもない。

著語 白狼河北音書斷 丹鳳城南秋夜長

又 兔の毛一本無い處から隻手と打たせました。

著語 風吹ニ碧落ニ浮雲盡 月上ニ青山ニ玉一團

到江吳地盡 隔岸超山遠

二、趙州和尚無字關

【本則】

趙州因僧問狗子還有佛性也無州云無。此意如何

答 師家の前に端坐し力を極めて「むー」と絶叫す。

(抄所) 一、 證據はどうぢや。

答 同上。

二、 どう成佛するか。

答 同上。

三、 灰になつた後どう見たか。

答 同上。

四、 趙州或時は有と云うたがどうぢや。

答 縦ひ趙州は有と云ふとも某甲は只管にむー、と絶叫す。

五、 業識性というがどうぢや。

答 「むー」と絶叫す。

六、 知而故犯といふがどうぢや。

答 同上。

七、 無門の二十字を一度に讀んで見よ。

答 主人不相識、偶坐爲林泉、莫説愁沽酒、囊中自有錢、(二十字の詩何にても唱へる)

又は「いろは」を讀みます、「エービーシー」をやりますと新式に解せしむる者あり。

八、 無字の體。

答 無言にて又手當胸起立す。

九、 無字の用。



答 立上りて大手を振り五六歩行きつゝ「行かんと要せば行き」と唱へ、再び坐に復し「坐せんと要せば坐す」と唱ふ。

一〇、無字と業識性との隔り。

答 其土地にて附近一二里許り隔りたる所へ往復する状を述ぶ、例へば東京上野に於て參禪せる時は「此處から廣小路へ出て電車に乗り須田町から京橋日本橋新橋を経て品川で降り用を辨じて、再び品川から電車でズーツと歸つて来た」といふが如し。

二、同上著語。

答 始隨<sub>ニ</sub>芳草<sub>一</sub>去、又逐<sub>ニ</sub>落花<sub>一</sub>回。

又 朝進<sub>ニ</sub>東門營<sub>一</sub>、暮上<sub>ニ</sub>河陽橋<sub>一</sub>。

三、無字の根源。

答 盡大地風颯とも吹かず、土一と嘗めもない所から天と現はれ地と現はれ山、川と現はれる。

又は 天も無く地も無く、山も無く川も無く、草木叢林悉く無く我も無く人も無く、斯く言ふ語も亦無し。

第二節 卓州家の室内

一、隻手音聲

【本則】 隻手に無聲の妙音あり、聞いて來い。

答 隱山家に同じ、但或師家の處にては天も隻手地も隻手、男も女も、汝も我も、草も木も牛も馬も一切萬物森羅萬象皆隻手で御座る。

(抄所)

一、隻手無聲の妙音を聞きたる證據を出せ。

二、隻手音聲を聞いたら生死透脱出來るか如何か。

答 共に無言にて隻手を突き出す。

三、其隻手を吹毛劍にて斬らば如何。

答 斬つても斬れぬ、齒も立ちませぬ。

四、隻手精神の存在如何。

答 上は三十三天より下金輪那落のどん底迄充ち満ちて居ります。

五、隻手の姿を見て來い。

答 又手當胸して起立す。



六、 隻手を焼かば如何。

答 焼いても焼けぬ。

七、 富士山頂の隻手隠山家と同一也。

著語 到江吳地盡 隔岸越山多。

八、 隻手音聲を聞いて何にするか。

答 朝起きて洗面、讀經、喫粥、托鉢、晚課云々と日用事を述ぶ。

又 火鉢は火を入れ、鉄瓶は湯を沸し、硯は墨を磨る、香爐は線香を立てる。

九、 隻手を粉にして呑んで見よ。

答 唐辛は粉にしてたべる、餛飩、蕎麥は粉にて造りたべます。

一〇、 隻手を京で聞いたか播磨で聞いたか。

答 京では祇園、圓山、金閣寺、播磨では須磨、舞子、明石。

一一、 隻手向上の一句は如何。

答 小便ないか、納豆、豆腐、行商の態をなす。

一二、 隻手を焼て灰にして一握にして來い。

答 そんな馬鹿な事が出来るかと云ひて、師家の横面に一掌を打す。

一三、 隻手を聞いたら分けて聞かして呉れ。

答 師家の横面に一掌を打す。

一四、 隻手の根源はどうぢや。

答 そんな物があつて堪るものか、あかんべーと云ひ、指にて眼をはたげ、直に起ち拂

袖し去るの働をなす。

一五、 隻手を裏で聞いたか表で聞いたか。

答 裏でも聞いた、表でも聞いた、上十五日は表で聞いた、下十五日は裏で聞いた。

又 表は人力車が通る、自動車が通る、裏では雀がチュウ／＼鳥がカー／＼。

一七、 衲僧の隻手は如何。

答 肉食妻帯は決してなりません。

一八、 盡大地乾坤一個の隻手は如何。

答 充分力を入れ眼を怒らして隻手を突き出す。

一九、 隻手全體に著語せよ。



答 秋天曠野行人絶 馬首東來知是誰。

二、趙州無字關

【本則】 趙州因僧問、狗子還有佛性也無、州云無。

答 むー(無)と絶叫す、又或師家は聲の室内より漏れぬ様低聲にて、「むー」と言はしむる者あり。

(按所) 一、 無と言はずに何と言ふ。

答 うー(有)と絶叫す。

二、 無と有とを分けて見よ。

答 むー(無)うー(有)と區別して絶叫す。

三、 無と有とどれ丈隔たる。

答 室内にて自己を基點とし、此處から敷居迄約何尺、此方の障子迄約何尺隔て居ますといふ。

四、 無字の全體何處迄届いて居るぞ。

答 起立して一手は天を指しつゝ「上は三十三天より」といひ、足踏み一回して一手は地

指しつゝ「下金輪那落の底迄届いて居ります」といふ。

五、 無字を手渡しにして見よ。

答 何品にても出して師家に渡す。

六、 無字を手軽く使つて見よ。

答 チャンケンホイと鉄、石、紙の模様をなす。

又 一、二、三、四と指を屈し十迄數へる。

七、 無字を賽の目に切つて持つて來い。

答 奴豆腐を召上れと勸める態をなす。

八、 無字を絹篩にかけて持つて來い。

答 蕎麥粉を召上れと勸める態をなす。

九、 無字の高さを言うて見よ。

答 自分の身長を言ふ。

一〇、 無字の姿を言うて見よ。

答 又手當胸して起立す。



二、裏の姿はどうぢや。

答 又手當胸して背面を師家に示す。

三、無字に對する寸法は何尺何寸あるぞ。

答 袖口何寸、丈何寸と自己の衣服の寸法を述べ。

三、無字を周行七歩させて見よ。

答 室内を一周す。

四、無字を此の團扇の中で先照後用して見よ。

答 師家の出したる團扇を取りて眺め乍ら、結構な團扇で、骨は竹、裏は何、表は何と評して後、さりげなく扇ぐ模様をなす。

一五、無字を子供にでも分る様に言ひ分けて働いて見よ。

答 バアノと小兒をあやなす態をなす。

一六、無字を見て何にする。

答 朝起きて洗面、掃除、食事等と日用事を述べ。

又 或師家の所にては、主人になり、下女になり、鍛冶屋、左官、魚屋等社會百般の態を

なす。

一七、無字を見たらば、無底の椀子に無心の心を盛り持ち來れ。

答 兩手を開きて無底の椀子と唱へ、更に兩手にて物體を摸する態をなし無心の心と唱へ、更に大なる椀を捧げる態をなし、盛り持ち來れと唱ふ。

一八、無字を脱洒自在に使ひ分て見よ。

答 大工、左官、劍術師等社會百般の職業を演ず。或は無字を自由自在に使て見よと擲し、答て、起つ、坐る、寝る、歩む等自由自在の働をなす。

一九、日用上の賣物品の上で有と無とを分けて見よ。

答 此の反物一反ならば幾何。半反ならば幾何。

著語 一樹春風有<sub>二</sub>兩般<sub>一</sub>、南枝向<sub>レ</sub>暖北枝寒。

世語 千なりも蔓一とすぢの心から。

三〇、無字を摘んで出して見よ。

答 座邊にある物、何品にても摘て呈示す。

三、大惠曰趙州無字祇麼舉。



答 むー(無)と絶叫す。

三、古人云這僧未問佛性趙州不答無時作麼生。

答 同上。

三、婺州義烏稠巖了曠禪師題無字頌云、趙州狗子無佛性、萬疊青山隱古鏡、隻脚波斯入大唐、八臂那吒行正令。

答 (一) 趙州狗子無佛性と唱へ出す、又むーと叫ぶ。

(二) 四方を見廻しつゝ此の句を唱へ乍ら自己の懷中を眺めて止む。

(三) 萬里遠來の客非常に疲勞せし態にて、杖をつきつゝ、あゝ痛たゝと云ひ乍ら徐行す。

又室内を單に跋行す。

(四) 這野郎命令に服せぬかと云て師家の背を打つ。

又ヤツと云て和尚に斬りつくる態をなす。

又先づ「むー」と唱へ次に師家の後頸部を拳を固めて打つ、師家説明して曰く此を腦後の一鎚と稱すと。

二四、中峰和尚八箇の無字。

答 飯を食ふも、むー(無)、茶を喫するも、無、寢ても、無、起きるも、無、と八箇の動作をあげ八回無と唱ふ。

又 師家がよしと云ふ迄飯を食しても、茶を喫しても、寢ても起きても、歩くも坐るも、寒くも暖くも、放屁脱糞にも、鳥が啼ても狗が吠ても、無々と列擧する。

二五、無門大士二十箇の無字を偈頌で讀で見よ。

答 我心似秋月、碧潭清皎潔、無物堪比倫、教我如何說。(二十字の偈頌何にても唱ふ) 其を子供にでも分るやうに讀で見よ。

答 アイウエオ、カキクケコ、サシスセソ、タチツテト。

二七、有無の辨別はどうぢや。

答 和尚が有なれば私は無。

二八、有無の隔りはどうぢや。

答 敷居が有なれば柱が無、天井が有なれば疊が無。

二九、我宗教外別傳不立文字と云ふが、文字を立せぬ端的是はどうぢや。



答 敷居は横で御座る。

三〇、 然らば文字を立する端的はどうぢや。

答 柱は竪で御座る。

三一、 撞入這箇皮袋裡。

答 八百萬の神、釋迦達磨孔子孟子、這の中に在りと云ひて腹を打つ。

三二、 無字の根源はどうぢや。

答 そんな物があつて堪る者か、和尚面でも洗つて來い、アカンベーと云ひ座を立ち拂袖して去り袂を閉づ。

著語 聽レ雨寒更盡 開レ門落葉多。

又 海枯終見レ底 人死不知レ心。

又 雨過雲凝曉半開 數峰如レ畫碧崔嵬。

三三、 無字業識性を見て來い。

答 業識性と重々しく唱ふ。

三四、 業識性を平話云うて見よ。

答 惜い、可愛い、惚い、欲い。

三五、 業識性を二つに分けて見よ

答 うー(有)ひー(無)と唱ふ。

三六、 趙州云有と、これはどうぢや。

答 うーと唱ふ。

三七、 有を平話云うて見よ。

答 男でもない者を男ぢや〜と思ひ、女でもない者を女ぢや〜と思ひ、山でも川でも花でもないものを山ぢや川ぢやと思つて居るのが有である。

三八、 師云知而故犯と此意如何。

答 生死岸頭大自在を得、六道四生に向つて遊戯三昧なる故猫にならうと犬にならうと自由勝手であります。

又 炭團は白く、雪は黒し。

三九、 無字を總括したる語を著けて見よ。

答 雲遮劍閣三千里、水隔瞿塘十二峰。



- 四〇、無字を會したる證據を出せ。
- 四一、無字を會したら生死透脱は出来たか。
- 四二、無を焼けば灰になり、埋めば土になるか何と見た。
- 右三則隱山家と同じくむーと絶叫す。

## 附言

如上隱山卓州兩家に於て裨賣せる無字隻手の撈所により略々説禪内容の如何を推し得べく、其人生と何等の交渉なく佛法と毫末の關係なき一遊戯法に過ぎざるは直に看取し得べし。一等頑迷の説禪師あつて尙胡亂の辯明を試みんとする者あるべきも、此流輩に對しては後篇微細に誨ふる處あるべく、此處には唯隱山卓州兩家の遊戯法の相違點を略説して参考に資するに止むべし。

由來說禪業者間に於て隱山家は機鋒峻峭とせられ、卓州家は宗風綿密と稱せらる。蓋し其の所由を推すに隱山は性粗暴放縱卓州は因循姑息の漢なりしなるべく、兩者室内の相違は上述の内容を對比すれば自ら明なるべし。例へば趙州無字の撈所に於て隱山家は最初「むー」と咆哮せしめ置き、此の氣分を徹底せしめんとして數箇の撈所悉く同一型式に出でしむるも、卓州家は此に反し直に有字に移りて

「うー」と絶叫せしめ、入門の當初より稍細密に分別を加へしむるが如し。其の他撈所の數に於ても卓州家は隱山家に比して數多く、且つ室内解答の模様も稍詳密なり。此等の點を以て卓州家は隱山家を斥けて吾家風微細を極むと自負し、隱山家は自ら活潑々地にして活祖意を傳へ得たりと號す。更に甚だしき低能兒は、兩家の型式を一々履踐し終り以て兩家宗風並せ得たりとせる者あり。但し此の種の漢は流石に低能部族の邪師中にあつても極めて稀に見る所とす。兩家、多少の相違あるも要するに最初の變調氣分を適用して謎語の解釋を事とするは同じく、其の方法に至つても兩者相類し、同一圈内に在つて閑技を弄せるを見るべし。此の遊戯法の創始者は白隱にして、彼自らは未だ現今の如く詳細なる組織を試みざりしも、大體の結構は既に成立し、久しく展轉流布せる間に終に今日の如く發達せし者なるは明なり。

後章順次に述ぶる所の公案解釋は兩家全く同一の物あり、稍言句を異にするあり、或は全く解釋法の異なるあり、一家にありて他家になきもありて一様ならず、此等一々對照して示すは兒戲に類し、其の要を見ざれば、宜に隨ひて主要なる材料を排列せり。

## 第二章 雜則部



一、父母未生以前本來の面目を見て来い。

答 又手當胸して起立す。

(解説) 此の則は葛藤集中六祖衣鉢の公案に出づ。六祖、五祖の衣鉢を得て潜に黄梅を去るや、衆之を追ひ明上座といふ者大庾嶺に六祖に追及す。六祖却つて明上座を接待し、曰く不思善不思惡正與麼時那箇是明上座本來面目と、此の則、無字、隻手、庭前柏樹子と共に學人入門の最初に與へ、此にて見性せしむることあり。

二、如何是當法身句、答曰鐵船浮水上。

答 同上。

三、夢中有人間西來意作麼生答、若答不得佛法無靈驗。

答 ゴー／＼と鼾聲をあげ熟睡の態をなす。

(抄所) 右の見解を呈するや師家直に「其でよいのか」と尋ね、返事をすれば許さず、熟睡中の態にて無言にて居れば許す。但此抄所を示す師家少なし。

右に世語を著けよ。

答 世の中は寢るより樂はなかりけり浮世の馬鹿は起きて働く。

右に語を著けよ。

答 睡美不知山雨過 覺來殿閣自生涼

四、四十九曲りの細山道を真直に通らにや一分立たぬとあるが、どう通る。

答 室内を曲折して歩行し、細山道を行く模様をなす。

五、伊勢の海千尋の底の一つ石、袖ぬらさすに取るよしもがな、此歌の意はどうぢや。

答 海に飛込み大石を持ち揚ぐる態をなす。

六、此石の銘は何とあるか。

答 自己の名を云ふ。

七、此石の重量幾何ぞ。

答 自己の體量を云ふ。

八、遠州沖の千石船、一杯に帆をあげて行く、止めて見よ。

答 起立、兩袖を開展し、帆掛船の走る態をなす。

九、櫓をこぐ船を止めて見よ。

答 起立し、ギョ／＼と櫓をこぐ真似をする。



二〇、川向の喧嘩を止めて見よ。

答 何だ此の野郎ぐづぐづぬかすか、ペランメー、ドテッ腹蹴破つて一升樹たゝき込むぞ、と云ひつゝ、師家の胸倉を掴み、拳を振り上げ凄まじき權幕にて喧嘩を始むる態をなす。

二一、鐘の音聲(又は響)を止めよ。

答 ゴーンと餘韻長く唸る。

二二、四音聲一時に來らば。(又諸の音聲を止めよ)

答 ドン／＼(太鼓)シャン／＼(三味線)カン／＼(鐘)ビー／＼(笛)、或はチン、ドン、シャン、ヒュー、共に同義也。

二三、千里先の燈火を消して見よ。

答 お離れの燈火は誰も居らず、危険でもあり、無益でもありますから消して來ませうと云てプツと吹き消す態をなす。

又 手先にて燈火の上る形をなしつゝ口にてスツ／＼といふ。

二四、印籠の二重目から越中立山を出して見よ。

答 和尚お腹が痛くば萬金丹をあげませう。

又 第一の印籠から富士山、第二から加賀の白山、第三から諸國の山々を出せ。

答 清心丹、清快丸、寶丹を差上げませう。

二五、手を出さずに私を立たせて見よ。

答 起て歩行すること二三歩す。

又 空手にして老僧を起たしめよ。

答 ヤッコラサと掛聲しつゝ老僧の様にて起ち上る。

二六、富士山を三歩あるかせて見よ。

答 起て三歩す。

二七、隠元茶釜の中へ東寺の塔を立てゝ見よ。

答 直立す。

二八、鴨の卵の中で茶臼を回して見よ。

答 室内を圓形に廻り歩く。

二九、聖僧尊年多少ぞ。(聖僧尊は文殊  
大士の謂也)

答 本年取て幾歳(自分の歳)彌陀佛と同年。



(抄所) 彌陀佛幾歲。

答 我と同年。

二〇、五倫五常を一口に云へ。

答 今日は好いお天氣で結構で御座る。

二一、天の高サ幾何。

答 天井を指して曰く、是から七尺あります。

二二、竹篋の中に入つて見よ。

答 竹篋を懷中に收める。

二三、即今柱の中に入つて見よ。

答 柱へどんと突き當る。

世語 離れて見やがれ唯おく者か藁の人形に五寸釘。

二四、文福茶釜から天王寺の塔を出して見よ。

答 御渴きなら茶を獻じませう。

二五、烏何に因て佛頭を汚す。

答 エー鳥めが人の頭に糞を垂れやがつたと云て自分の頭を拂ふ。

二六、木鷄鳴子夜。

答 コケッコッコー。

二七、芻狗吠天明。

答 ワンク。

二八、一口吸盡西江水。

答 五大州一呑の態をなす。

二九、洛陽牡丹新吐葉。

答 お庭の牡丹は見事に咲きました。

三〇、朝到西天暮歸東土。

答 朝到西天暮歸東土と云ひつゝ室内を歩行す。

三一、打木無聲敲空有響。

答 打木無聲と云ひつゝ疊を打ち、敲空有響と云ひつゝ虚空を敲く。



又 共に疊を打つ、此は般若心經の色即是空の義を見せると號す、即ち無聲有聲共に疊を打ち別ならずと見る也。

三、空手執鋤頭(以下四句傳大士法身偈といふ一偈なり)

答 鋤を持ち耕作の態をなす。

三、歩行騎水牛

答 股立をとり水を渡るの態をなす。

又 四這ひになり水牛の態をなす。

又 師家の背に跨りハイ〜ドゥ〜と尻を打つ。

四、人從橋上過

答 又手してカラ〜と云ひつゝ石橋上を渡る態をなす。

三、橋流水不流

答 兩手を疊につき身を彎曲して橋の態をなし、後、身を廻轉して水の流るゝ態をなす。或は衣の袖を翻しつゝ波の模様を描く。

三、春日の局が幽靈濟度の時は茶碗の中に水を一杯入れ、自ら箸を取つて茶碗の上に横に並べ、幽靈を濟度したと云ふが、衲僧家ならば如何に濟度するか。

答 凄じき面相にて幽靈の態をなし、怨めしや〜といふ。

又 單に「幽靈を濟度せよ」と示し、答に幽靈の態をなし合掌しつゝ、「何卒お助けなされて下さりませ」と濟度を乞ふ模様をなす師家あり。

三、虚空を荒繩にて縛し來れ。

答 座邊の品物を縛して差す態をなす。

三、虚空をあえ物にして持つて來い。

答 大根葉の五斗味噌あえを召し上れと勸むる態をなす。

三、虚空を粉にして持つて來い。

答 蕎麥粉其他粉の物を勸むる態をなす。

四、鍾馗は神か佛か。

答 そんな事を問ふ奴は正氣の沙汰でないわい。

四、太神宮の太の字に點を打つのは神道の祕傳といふが、佛法の點は何處に打つか。



答 起立して、一指は天を一指は地を指し、天上下唯我獨尊と唱ふ。

四、涅槃像の妙處。

答 只今和尚が御遷化になりましたら、今後誰に就て修行すればよいか、と、落膽の態をなす。

四、涅槃の境涯。

答 北枕にて横臥し、涅槃像の摸様をなす。

(擗所) 涅槃眞の境涯はどうぢや。

答 同上、但し師家手を學人の口に當て呼吸を検するを以て暫時堪忍して呼吸せざる也。

四、東福寺の涅槃像に何故猫が居るか。

答 何故鼠が居らぬ。

又 何故お前に嫌がない。

四、天照皇太神宮何處よりか出頭し來る。

答 宇宙無雙日一乾坤只一人。

四、天地開闢の始國常立尊がどう現はれたか。

答 又手當胸して起立す。

四、其の次に山を生む。

答 兩手を緊張して少し廣げ起立して、「是れ一山」と唱ふ。

四、其の次に國を生む。

答 疊の上に平伏し「大日本何の國」と其地の國名を云ふ。

四、此頃佛像を造つたが何處へ安置すべきか。

答 サア、座布團を御敷き下さい、と、來客を接する態をなす。

五、行應禪師、僧の下山するに火を以て餞別とす、如何して受くべきか。

答 此れへ下さいと衣の袖を出す。

五、寒熱の地獄に通ふ茶柄杓も心なければ苦みもなし、下の句訂正を要す。

答 心なければごぼ／＼。

五、死んで何處へ往く。

答 一寸雪隠に行て参ります。

五、五臺山上雲蒸飯。

答 典坐寮では齋坐の用意をして居ます。



答 起立して、一指は天を一指は地を指し、天上天下唯我獨尊と唱ふ。

四二、涅槃像の妙處。

答 只今和尚が御遷化になりましたら、今後誰に就て修行すればよいか、と、落膽の態をなす。

四三、涅槃の境涯。

答 北枕にて横臥し、涅槃像の摸様をなす。

(抄所) 涅槃眞の境涯はどうぢや。

答 同上、但し師家手を學人の口に當て呼吸を検するを以て暫時堪忍して呼吸せざる也。

四四、東福寺の涅槃像に何故猫が居るか。

答 何故鼠が居らぬ。

又 何故お前に婢がない。

四五、天照皇太神宮何處よりか出頭し来る。

答 宇宙無二雙日一乾坤只一人。

四六、天地開闢の始國常立尊がどう現はれたか。

答 又手當胸して起立す。

四七、其の次に山を生む。

答 兩手を緊張して少し廣げ起立して、「是れ一山」と唱ふ。

四八、其の次に國を生む。

答 壘の上に平伏し、「大日本何の國」と其地の國名を云ふ。

四九、此頃佛像を造つたが何處へ安置すべきか。

答 サア、座布團を御敷き下さい、と、來客を接する態をなす。

五〇、行應禪師、僧の下山するに火を以て餞別とす、如何して受くべきか。

答 此れへ下さいと衣の袖を出す。

五一、寒熱の地獄に通ふ茶柄杓も心なければ苦みもなし、下の句訂正を要す。

答 心なければごぼ／＼。

五二、死んで何處へ往く。

答 一寸雪隠に行て参ります。

五三、五臺山上雲蒸飯。

答 典坐寮では齋坐の用意をして居ます。



(臺所にて晝飯の用意をせる意なり)

西、古佛殿前狗屎天。

答 犬が電信柱へ小便をしかけた。

丑、百尺竿頭煎鈍子。

答 貼案寮では芋や大根を炊て居る。

寅、三個狢獠夜簸錢。

答 大道の真中で子供が錢廻しの賭け事をして居る。

卯、懷州牛喫禾益州馬腹張。

答 貴殿さへ御あがりになれば私は食べなくとも深山で御座います。

辰、長公喫酒李公醉。

答 同上。

丑、昨夜泥牛戰入海直到今更無消息。

答 向ふ通るは清十郎ぢやないか笠がよう似た菅笠が。

六、遂翁和尚、東嶺和尚に問ふ近頃隻手の聲を此處でも彼處でも聞いた〜とぬかすが、全體ど

んな聲を聞いたとぬかす、衲僧家ならば東嶺に代りサア〜云つて見よ。

答 エイ、そんな小六ヶ敷い事云はずとな、馬の轡でも箝めて置くがよいぞと、手を以て師家の口を覆ふ。

六、上座の鼻毛幾本ぞ。

答 指を以て師家の鼻孔を指し一本二本三本と數ふ。

六、先達て小僧共が二人、四九日掃除の際に一人の小僧めが瓦の片を一つ拾ひ、大石の上に載せ他の小僧に向て云く、一句作麼生と、小僧無語衲僧家ならば一句云うて見よ。

答 何をぬかすかと云て脚をあげ師家の膝頭を蹴る。

六、燈火の消えて何處に行くやらん、暗きは元の住家なりけり。

答 下女は井戸端で洗濯をし、下男は畑へ小便をかけて居る。

又 下の句を訂正せしめて左の如くす。

裏の畑で牛蒡掘るべい、又、その柱で頭ゴツリ、又、西瓜の皮にツルリ滑つた、又、裏の小屋から牛を牽出す。



四、奈良の大佛を此處へ背負つて來い。

答 さあ、おんぶする、おんぶしますと云ひつゝ、師家を背負ふの態をなす。

五、糞壺の光明とは如何速に道へ〜。

答 あゝ臭い〜と鼻を摘まむ。

著語 蠢動含靈一々放<sub>二</sub>大光明<sub>一</sub>。

六、獅子領下の金鈴子、何人か奪ひ得。

答 御免下さいと云ひて師家の緒子を取り外す。

七、三世の諸佛即今如何が説法する。

答 雀はチュ〜、鳥はカア〜、猫はニャン〜、犬はワン〜。

八、大黒柱は如何な説法をする。

答 師家は朝早くから徒弟の爲に骨折り、在家では親爺は早朝から大聲で家内中の世話をしてゐる。

九、此香爐の中には入つてみよ。

答 度んで香を拈して押し戴き焼香の態をなす。

一〇、彌何處より生れ來り、何處に歸り去る。

答 只今堂内から參りまして又堂内に歸ります。

一一、大水小水歸<sub>二</sub>東海<sub>一</sub>と云ふが、隅田川の水何處に流れ歸す。

答 前をあげて放尿する態をなす。

一二、活達磨の舍利を分身させて見よ。

答 耳糞を取りて差出す態をなす。

一三、衲僧家ならば口を覆うて一句を道へ。

答 言へるか、言へぬか、先づ和尚から言うて下さいと云ひつゝ、和尚の口を塞ぐ。

一四、天臺の石橋何處より着手するか。

答 和尚の手を取り起き上りて木遣音頭を誦ひつゝ、エンヤラヤア〜と引きずる。

世語 關で女郎買うて内の嬪見れば千里奥山の古狸。

一五、淺草の雷門を普請する時何處から手斧を初めたか。

答 起ち上り、カチン〜と手斧を使用する態をなす。

一六、八疊敷の座敷一杯に化物が大の字形になつて眠て居るが、床の間の上に大切の書類があるから



一寸取つて来て呉れと云はれたら如何する。

答 御免なさいと云て襖を開け、御休みの所を御邪魔致しまして恐縮に存じますが少々御免下さいと云ひつゝ、床の上より書類を取り、元の入口の所にて有難う御座いました御休み遊ばせと云ふ。

又 簡単に少々御免と云ひ枕許を通る模様のみなす師家あり。

七、 這扇子天より降たか地より湧いたか。

答 是は東京日本橋際の萩原で二十五錢で買ひました。

八、 備のぼん(後頭)の毛幾本ぞ。

答 師家の背に立ち一本二本三本と數へる。

九、 風何の色をかなす。

答 自分の着衣の模様上は黒の木綿衣下は鐵の袴と述べる。

世語 乙女子が春の野に出て若菜つむ、谷の嵐にもすそ亂るゝ。

著語 紅粉青娥映楚雲、桃花馬上石榴裙。

又 江綠鳥愈白山青花欲燃。

八〇、 雨何處より來る。

答 法衣の袖をぐる／＼廻しザア／＼と雨の降る模様をなす。或は十本の指にて師家頭上に雨の降る模様をなす。

著語 日暮層巒雲巡腰 傾盆雷雨定明朝。

又 南山起雲 北山降雨。

此の則の答一師家は「禪堂より喚鐘場に來て其から今參禪して居る、此より喚鐘場を通つて禪堂へズーッと歸ります」と見せる、又或師家は單に「バラ／＼ッ」と云ひて雨聲の音を摸す。

八一、 恁麼亦不得、不恁麼亦不得、恁麼不恁麼總不得。

答 兩手を一方に伸べて「あれわいさて」と唱へ更に他方に伸べて「これわいさて」と唱へ膝に置いて「どいしよ」と納まる、三段の拍子をとる也。

八二、 此の墨を濟度せよ。

答 硯に墨を磨る態をなす。

八三、 庭前の花生か死か。

答 庭前を眺むる態にてあゝ見事に咲いたと云ふ。

八四、 此の廣き世界に雨幾粒降るか。



答 外方に向ひ一粒二粒三粒と數へる。

八五、 庭前の樹葉幾枚ぞ。

答 同上。

八六、 天上の星の數幾何ぞ。

答 同上、又は「五つ六つもありませうか、其とも十二三もありませうかい」と何氣なく答へ去る。

八七、 一切の衆生は肉、骨を藏す、龜甚麼に因てか骨、肉を藏す。

答 手脚を縮めて龜の態をなし首を伸縮す。

八八、 此の徳利の中に入らせよ。

答 手に徳利を持つ態にて云ふ、和尚一盃お酌ませう。

八九、 八大龍王の中で雨を降らすはどの龍王か。

答 和尚の前にて放尿の態をなす。

九〇、 大風吹きに動かぬ樹を見よ。

答 起立して兩手を頬に振り回はし、ザ〜と云ひつゝ樹木動搖の態をなす。

九一、 豆腐の上でシヨを踏め。

答 起ち上り、土俵の上でと云ひつゝ四股を踏む。

九二、 向から來る女は姉か妹か。

答 婦人歩行の摸様をなす。

九三、 煙管の中を通つて見よ。

答 横臥して一直線となり首を曲げて雁首に擬し煙管の態をなす。

九四、 一昨日吸うた煙草の吹殻を持つて來い。

答 全身を圓形にし吹殻の摸様をなす。

九五、 石の唐戸に入れられて外から錠を掛けられたら如何して出る。

答 オーイ誰か來て呉れと云ひつゝ、頬に戸を押す摸様をなす。

九六、 風の體用。

答 兩手を軽く前に突き出してスツと云ひ風の過ぐる態をなす(體)次に今迄は南風で御座りまし

たがどうやら東風に變りさうですと風向を述べ(用)。

九七、 大燈國師は雲門の再來といふが、世を隔つること數百年其の間何をして居たか。

答 自分の少時より現時迄の經歷概略を述べる。



九八、一室を一句に道ひ盡せ。

答 畢竟空と莊重に唱ふ。

九九、富士山を燈心でくゞり出せ。

答 破れ手巾でも締めてそろ／＼出掛ようかい、と出掛ける所まで働く。

又 くゞれる物かい、くゞれるならくゞつて御覽じと力味返る。

一〇〇、左の袖から江戸八百八町を見通せ。

答 自分の袖口を窺き込み禪の紐が見える、脇の下には虱がゴソ／＼やつて居りますと云ふ。

一〇一、重の中を蓋を取らずに指して見よ。

答 重箱の蓋を取る態にて「イヤ此は牡丹餅有難う」。

一〇二、腦後を見よ。

答 師家に對し和尚さん其方をお向き見て上げようと云ふ。

一〇三、彼死我死向甚麼處會。

答 途中知人に邂逅したる態にてイヤ此はしばらく御機嫌好うといふ。

一〇四、旋天關轉地軸。

答 師家面前にて筋斗を打す。

一〇五、徐行踏斷流水聲 縱觀寫出飛禽跡。

答 上句。腰をからげ河を渡る態をなす。或は又手當胸してサー／＼と言ひつゝ溪流に傍ひ徐行する模様をなす。下句。雀の飛で餌を拾ふ態をなす。或はク／＼と啼聲を發し飛ぶ模様をなす。

一〇六、非々想天誰人對待。

答 宗門では獨園、敬冲、海晏、峩山等の大棟梁も遷化せられ實に惜い事で御座る、社會では伊藤、井上、桂、乃木、諸老逝かれ惜い事で御座る。

一〇七、須彌四洲に大聖あり、何に依てか身を影中に現せん。

答 斯うして大勢集まり修行して居るのも何かの因縁で御座る。

著語 火就<sub>レ</sub>乾 水流<sub>レ</sub>濕。

一〇八、學道之人不知眞、只爲從前認識神、無量劫來生死本、痴人喚爲本來人、作麼生是上座眞。

答 之を求むるに不可得であります。



一九、虚空を鼓とし須彌を桴とし何人か打ち得ん。

答 破れ太鼓はよう打ちませぬ。

二〇、南陽慧忠國師因肅宗問曰師得何法師曰陛下見空中一片白雲麼帝曰見師曰丁釘着懸掛着。

答 俯視して「フワーツ」と云ひ浮雲の模様をなす。

二一、大耳三藏他心通。又有西天大耳三藏到京云得他心慧眼代宗皇帝敕令與國師試驗三藏纔見師便禮拜立于右邊師問曰汝得他心通耶對曰不敢師曰汝道老僧即今在什麼處曰和尚是一國之師何得却去西川看競渡師再問汝道老僧即今在什麼處曰和尚是一國之師何得却在天津橋上看弄獼猴師三問汝道老僧即今在什麼處三藏良久罔知去處師叱曰這野狐精他心通在什麼處三藏無對師謂帝曰大王莫受外國人之瞞國師去處如何。

答 凄しき面相にて「憎くい奴」といふ、即ち、三藏に二回迄知られ無念に堪へざる所、天地一

枚になつて憎む也。

二二、趙州露刃劍寒霜光焰々更擬問如何分身爲兩斷。

答 刀を抜きて構へたる態にて少し振はし乍ら、ピカ／＼チカ／＼といふ。

二三、文殊乘獅子普賢乘象王未審釋迦乘什麼。

答 座布團を敷きませう。

又 破座布の上にとん坐つて居りました。

二四、茶碗の行道。

答 又手當胸して室内を周り、行道の態をなす。

二五、不離魔界作麼生入佛界。

答 常住へ來たら應接、堂内に歸つたら坐禪。

二六、以一身作麼生應十方請。

答 殿司になつたり、典座になつたり、副隨になつたり。

二七、明相現する時暗相何の處に向てか去る。



答 夜が明けたら行燈は押入に蒲團は棚に。

二八、三世諸佛不知有、狸奴白牯却知有。

答 雀はチウ／＼鳥はカア／＼犬はワシ／＼猫はニヤン／＼。

二九、雲在嶺頭閑不徹、水流澗下太忙生。

答 上の句ビール正宗葡萄酒新聞燐寸煙草書司と東西の大活動の態。

下の句 日本勝つた／＼露西亞敗けた／＼と躍り廻る。

三〇、腰纏十萬貫、乘鶴下揚州。

答 何々から澤山の荷物を持って來たら非常に疲れたあ、腰が痛い／＼と腰を打つ。

三一、誌子和尙有一句示衆曰上取人頭、中取人腰、下取人足、擬議喪身失命。

答 師家面前にて角力をとる。

三二、君子愛財取之有道。

答 頂戴する物なら如何なる物でも頂きます。

三三、朝結眉夕交肩。

答 朝眉夕肩どころではない、即今只今和尙と相見の最中で御座る。

三四、煩惱即菩提。

答 憎／＼、可愛い、と重々しくいふ。

世語 君を思へば照る日も曇る、晴れた月夜も暗となる。

三五、善射者不中的。

答 弓に矢を番へ放つ所を演じ「アツ」と叫ぶ。

三六、忽有大力鬼王從背後捉汝、投焰々火坑中、時汝却有出身路麼、

答 火中に陥りたる態にて熱つ／＼と苦悶の模様をなす。

三七、祖意教意是同耶、是別耶、古人云鷄寒而上樹、鴨寒而下水

と此の意を著語して見よ

答 著語 牛飲水爲乳 蛇飲水爲毒。

又、吹火滅吹火起 又、呵氣熱吹氣寒。

三六、若人欲了知三世一切佛、應觀法界性、一切唯心造。



答 三世、昨日今日明日、又は先刻只今後刻。

一切佛 某甲、乙某、丙某、和尚、私、手近の人名を列擧す。

一切唯心造 豆腐屋は豆腐を造ります、大工は家を作ります。

二九、金剛經曰是法平等無有高下、甚麼に因てか主山は高く安山は低き。

答 富士山は高く鎌倉山は低し。

三〇、同經曰即非世界是名世界。

答 西は臺灣淡水の端、東は樺太千島の端。

三一、同經曰阿耨多羅三藐三菩提皆從此經出、作麼生此經。

答 師家の横面に一掌を打す

三二、同經曰若以色見我以音聲求我是人行邪道不能見如來。

答 一心不亂に般若心經又は大悲咒を誦す。

又は フー、ノー、ケン、ニョ、ライと高唱し、一々相見して居りますといふ。

三三、同經曰過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得と上座以那箇心點心

答 お婆空腹を感じた、此餅價何程か三四個貰ふよ。

又 經の文句のみを見、今迄坐禪して居ました、只今入室して居ます、此から歸つて草取りをしますといふ。

一四、同經曰應無所住而生其心。

答 父、こののらくら野郎出て行け。

母、お、誰がや、内の大事のほんぞ息子を、よし。

世語 可愛や、饅頭見ても花見ても。

又 日用事を述べ、坐禪、入室、草取、掃除、風呂焚きと、ちつとも尻の据場は御座りませんと

結ぶ。

一五、微風吹幽松、近聽聲愈好。

答 右手を耳邊にあてサー〜と唱へつゝ松風を聞く模様をなす。

抄して云く近聽底作麼生(白隠作)

答 イヤ此は内密の話少々お耳をと云ひ、密談の模様をなす。



本則部目次

- 一 香嚴樹上 (葛藤集、無門關、五)
- 二 千尺井中 (葛藤集)
- 三 鐘聲七條 (葛藤集、無門關一六)
- 四 雪峰粟米粒 (碧巖五)
- 五 黃龍三關 (葛藤集)
- 六 好雪片片 (碧巖四二)
- 七 荷葉團々 (碧巖四六)
- 八 鏡清雨滴聲 (葛藤集、無門關四七)
- 九 兜率三關 (葛藤集)
- 一〇 懶山有句 (臨濟錄、葛藤集)
- 一一 臨濟賓主句 (臨濟錄、葛藤集)
- 一二 臨濟赤肉 (臨濟錄、葛藤集)
- 一三 雲門花藥欄 (碧巖)
- 一四 大隋劫火洞然 (碧巖)
- 一五 趙州七斤布衫 (碧巖)
- 一六 廓然無聖 (碧巖一)

- 一七 趙州至道無難 (碧巖二)
- 一八 臨濟四料簡 (臨濟錄、葛藤集)
- 一九 臨濟三句 (臨濟錄、葛藤集)
- 二〇 智門蓮華荷葉 (碧巖二一)
- 二一 禾山解打鼓 (碧巖四四)
- 二二 黃檗唾酒糟漢 (碧巖一一)
- 二三 南泉遷化 (葛藤集)
- 二四 疎山壽塔 (葛藤集)
- 二五 風穴祖師心印 (碧巖三八)
- 二六 陸亘天地同根 (同四〇)
- 二七 百丈野狐 (葛藤集、無門關二)
- 二八 華嚴法界 (葛藤集)
- 二九 潯山水牯牛 (葛藤集)
- 三〇 首山竹篋 (葛藤集、無門關四二)
- 三一 太宗擊鉢 (葛藤集)
- 三二 馬祖日面佛月面佛 (碧巖三)
- 三三 翠巖夏末 (碧巖八)
- 三四 許老胡知 (葛藤集)

- 三五 天皇恁麼 (葛藤集)
- 三六 文殊起見 (同)
- 三七 南院啐啄 (同)
- 三八 陳操登樓 (同)
- 三九 夾山掘坑 (同)
- 四〇 別峰相見 (同)
- 四一 趨倒淨瓶 (無門關四〇)
- 四二 巴陵銀碗裏雪 (碧巖一三)
- 四三 巴陵吹毛劍 (碧巖百)
- 四四 明眼落井 (葛藤集)
- 四五 雲門對一說 (碧巖一四)
- 四六 雲門倒一說 (碧巖一五)
- 四七 鏡清啐啄機 (碧巖一六)
- 四八 忠國師無縫塔 (同一八)
- 四九 龍牙問翠微 (同二〇)
- 五〇 保福長慶遊山 (同二三)
- 五一 文殊問無着 (同三五)
- 五二 盤山三界無法 (同三七)

- 五三 風穴國家興盛 (同六一)
- 五四 南泉斬貓 (同六三、無門關一四)
- 五五 趙州頭戴草鞋 (同六四、無門關一四)
- 五六 金牛飯桶 (同七四)
- 五七 趙州初生孩子 (同八〇)
- 五八 藥山看箭 (同八一)
- 五九 大龍堅固法身 (同八二)
- 六〇 雲門古佛露柱 (同八三)
- 六一 維摩入不二法門 (同八四)
- 六二 雲門藥病相似 (同八七)
- 六三 玄沙三種病人 (同八八)
- 六四 香嚴擊竹 (葛藤集)
- 六五 奚仲造車 (無門關八)
- 六六 路逢達道 (無門關三六、葛藤集)
- 六七 開士入浴 (碧巖七八)
- 六八 洞山無寒暑 (同四三)
- 六九 南泉畫一圓相 (同六九)
- 七〇 汾州莫妄想 (葛藤集)



- 七五 祖他奴 (葛藤集、無門關四五)
- 七馬 祖西江 (葛藤集)
- 七無 邊刹境 (同上)
- 七齒 鹽官犀牛扇子 (碧巖九一)
- 七臨 濟築拳 (葛藤集、臨濟錄)
- 七臨 濟三句 (同、同)
- 七臨 濟孤峯 (同、同)
- 七牛 過窓樓 (葛藤集、無門關三八)
- 七先 趙州四門 (碧巖九)
- 七智 門般若體 (同九〇)
- 七六 祖風幡 (葛藤集、無門關二九)
- 七六 祖衣鉢又不思議 (葛藤集、無門關三三)
- 七趙 州勸婆 (無門關三一)
- 七室 內一盞 (葛藤集)
- 七巖 頭收黃巢劍 (碧巖六六)
- 七古 帆未掛 (碧藤集)
- 七乾 峯三種病 (同)
- 七德 山托鉢 (葛藤集、無門關一三)

- 八九 德山挾複問答 (碧巖四)
- 八雲 門日夕好日 (同六)
- 八連 華峰拈拄杖 (同二五)
- 八雲 門六不收 (同四七)
- 八三 聖透網金鱗 (同四九)
- 八雲 門塵々三昧 (碧巖五〇)
- 八馬 祖四句百非 (同七三)
- 八雲 巖大悲手眼 (同八九)
- 八楞 嚴若見不見 (同九四)
- 八長 慶阿羅漢三毒 (同九五)
- 八金 剛經爲人輕賤 (同九七)
- 八天 平行脚 (同九八)
- 八忠 國師十身調御 (同九九)
- 八雲 門體露金風 (同二七)
- 八卽 卽心卽佛 (無門關三〇、葛藤集)
- 八非 心非佛 (無門關三三)
- 八毛 吞巨海 (臨濟錄)
- 八三 界輪回 (葛藤集)

- 一〇七 睦州掠虛頭漢 (碧巖一〇)
- 一〇八 臨濟真正見解 (臨濟錄)
- 一〇九 臨濟劍及上事 (同)
- 一一〇 虛空爲紙 (葛藤集)
- 一一一 婆子燒庵 (同)
- 一一二 孤峯不白 (同)
- 一一三 胡子無鬚 (葛藤集、無門關四)
- 一一四 乾峯一路 (無門關四八)
- 一一五 州勸庵主 (葛藤集、無門關一一)
- 一一六 德山行棒 (葛藤集)
- 一一七 二僧捲簾 (無門關二六)
- 一一八 國師三喚 (無門關一七)
- 一一九 洞山麻三斤 (碧巖一二、無門關一八)
- 一二〇 佛早留心 (葛藤集)
- 一二一 俱胝豎指 (碧巖一九、無門關三)
- 一二二 世尊初生 (葛藤集)
- 一二三 那吒折肉 (同)
- 一二四 水上行話 (同)

- 一一五 法雲示衆 (葛藤集)
- 一一六 夾山法身 (同)
- 一一七 離却語言 (無門關二四)
- 一一八 靈雲見桃 (葛藤集)
- 一一九 山谷木犀 (同)
- 一二〇 南泉住庵 (葛藤集)
- 一二一 不入涅槃 (同)
- 一二二 女子出定 (無門關四二)
- 一二三 庭前柏樹 (葛藤集、無門關三七)
- 一二四 白雲未拄杖 (葛藤集)
- 一二五 芭蕉挂杖 (葛藤集、無門關四四)
- 一二六 佛性三轉 (葛藤集)
- 一二七 倩女離魂 (葛藤集、無門關三五)
- 一二八 撲落非他 (葛藤集)
- 一二九 關山賊機 (同)
- 一三〇 臨濟四喝 (葛藤集、臨濟錄)
- 一三一 臨濟三句 (同、同)
- 一三二 大悲千手眼 (臨濟錄)
- 一三三 僧被蛇啣 (葛藤集)



第三章 本則部

(無門關、葛藤集、碧巖集、臨濟錄に出でたる公案)

一 香巖樹上 (無門關、葛藤集)

香巖知閑禪師云、如人上樹、口啣樹枝、手不攀枝、脚不踏地、樹下有人、問西來意、不對、即違他所問、若對又喪身失命、正與麼時、作麼生對、有虎頭上座云、上樹即不問、未上樹請和尚道、師呵々大笑、雪竇云、樹上道即易、樹下道即難、老僧上樹致將一問來。

答 樹上、一句 起立し木にぶら下る態をなす、師家により、一指を啣へ、ウツと云ひつゝ、身體を微動し、答へんとして答へ得ざる模様をなす者あり。

樹下の一句 木より墜落し尻餅つきたる態にてあ痛たゝと云ふ。

二 千尺井中 (葛藤集)

性空禪師僧問、如何是祖師西來意、師云、若人在千尺井中、不假寸繩出得此人、即答汝西來意、僧云、近日湖南鴨和尚出世、亦為人東說西話、師乃喚沙彌寂

子、拽出這死屍看、仰山後舉、似耽源、如何出得井中人、源云、咄痴漢、誰在井中、仰山不契、後又問、澆山、如何出得井中人、山乃召云、慧寂、々應諾、山云、出了也、寂後住仰山、常舉前話、示衆云、我於耽源處得體、於澆山處得用。

答 アブと井中に墜落し苦悶せる態をなす。

或は井中に墜落してアブと苦悶の態をなして後、アと水を吐き出す態をなし、あゝ寒かつたゝ井の中と思つたら和尚の室内でありましたか、此はゝ甚だ失禮致しました何卒御免下さいと云ふ。

或は井底に墜落し井側を捉ふる態をなし、上を向いて低聲にて「助けて呉れ」と哀を乞ふ態にて云ふ。

三 鐘聲七條 (無門關、葛藤集)

雲門曰、世界恁麼廣闊、因甚向鐘聲裏披七條。

答 禪堂にて鳴し物の合圖に依り大衆行道、袈裟を披して出頭の態をなす。

著語 君召不俟、駕行、父召唯而不諾。

又 降續雞人報曉籌、尙衣方進翠雲裘。



世語 お手が鳴つたらお茶持つて来い、又も鳴つたら煙草盆。

四 雪峰粟米粒 (普巖五)

雪峰示衆云盡大地撮來如粟米粒大、抛向面前漆桶不會打鼓普請看。

答 高處より三十六峰一目に見渡すの態をなす。

著語 吳楚東南開 乾坤日夜浮。

或は「西は臺灣東は樺太千島の端」と金剛經即非世界是名世界の如く示す師家あり。

五 黃龍三關 (葛藤集)

黃龍禪師問隆慶閑禪師云、人々有箇生緣處、如何是汝生緣處、對曰、早晨喫白粥、至今又覺飢、又問、我手何似佛手、對曰、月下弄琵琶、又問、我脚何似驢脚、對曰、鷺鷥立雪、非同色、師每以此三語問學者、莫能契其旨、天下叢林目爲三關、纔有酬者師無可否、歛目危坐人莫涯其意、延之又問其故、師云已過關者掉臂徑去安知有關吏、從吏問可否、此未透關者也。

(一) 我手何似佛手、答、脚を突き出し曰く、何故脚を脚といふ。

著語 月下彈琵琶。

又 換手打胸。

(二) 我脚何似驢脚。

答 手を突き出し曰く「何故手を手といふ」。

著語 屐齒印青苔。

又 東歩西歩。

(三) 如何是汝生緣處。

答 「あなたの御在所は」。師家、此の在所は問ふに及ばすと註す、即ち本分を直指したるに擬せる也。

或は「はい私の生れは何縣何郡何村」と自己の故郷を云ふ、或は「あなたの御在所はあなたの御在所、わしの在所はわしの在所」といひ此にて平易にはね飛ばしたるつもりに見る師家あり。

著語 君家住何處、妾住在橫塘。

又 枯木啼寒鳥、空山鳴野猿。



又 無<sub>レ</sub>端更渡桑乾水、却望<sub>二</sub>并州<sub>一</sub>是故郷。

解説 黃龍宗は機鋒峻峭なり、對手が拳固を振上げ来れば足を舉げて蹴散らすといふ宗風なり、故に我手何似佛手即ち何故手を手といふと問ひ来れば脚を出して何故脚を脚といふと遣り返す也、以下同じ、先に雜則部に示したる「東福寺涅槃像に何故猫が居る」なる則は此の則の拶所として用ひらるゝことあり、而して本則は法身に屬す、故に右の如く手脚故郷を表現する爲の語を著くる也。

六 好雪片々 (碧巖四十二)

龐居士辭<sub>二</sub>藥山<sub>一</sub>、山命<sub>二</sub>十人禪客相送至門首<sub>一</sub>、居士指<sub>二</sub>空中雪<sub>一</sub>云、好雪片々不落<sub>二</sub>別處<sub>一</sub>、時有<sub>二</sub>全禪客<sub>一</sub>云、落<sub>二</sub>在什麼處<sub>一</sub>、士打一掌、全云居士也不得<sub>二</sub>草々<sub>一</sub>、士云汝恁麼<sub>レ</sub>稱禪客、閻老子未<sub>レ</sub>放<sub>二</sub>汝在<sub>一</sub>、全云居士作麼生、士又打一掌、云眼見如盲口說如啞、雪竇別云初問處但握<sub>二</sub>雪團<sub>一</sub>便打。

答 チラ／＼と雪の降る態をなし、地に落つる態をなす。

著語 山家富貴銀千樹。漁父風流珠一袋。

又 或派にては、好雪片々不落別處、別處とはどうぢや。

答 師家に一掌を打す。

(拶所) 初問處但握雪團便打はどうぢや。

答 師に一掌を打す。

雪團打雪團打はどうぢや。

答 師に一掌を打す。

七 荷葉團々 (大塞の頌、無門關以下四書中になし)

荷葉團々々似<sub>レ</sub>鏡、菱角尖々々似<sub>レ</sub>錐、風吹柳絮毛毬走、雨打李花蛺蝶飛。

荷葉團々々似鏡を自利の方で見に来い。

答 自分の頭を撫で回はし、かやうに團いといふ。

利他の方はどうぢや。

答 權兵衛も八兵衛もお八もお三も泥塗れになつて働いて居る。

著語 南村北村雨一犁、新婦餉<sub>二</sub>姑翁<sub>一</sub>哺<sub>二</sub>兒<sub>一</sub>。

菱角尖々々似錐を自利の上で見に来い。

答 「錐よりも尖し」と云ひ、兩手を組み合せたるを急激にはなす。



利他の方はどうぢや。

答 商人は算盤バチ／＼一錢一厘を争うて居る。

風吹<sub>ニ</sub>柳絮<sub>ニ</sub>毛毬走、雨打<sub>ニ</sub>李花<sub>ニ</sub>蝶蝶飛はどうぢや。

答 禪堂内の舉止動作擊析打磬の音にて一進一退する態をなす。

又 別派の見方、荷葉團々々似鏡菱角尖々々似錐。

答 鐵瓶は湯を沸かす、洋燈は火を點す、箆筒は品物を容れる、香爐は香を焚く。

著語 猿抱<sub>レ</sub>子歸<sub>ニ</sub>青嶂後、鳥啣<sub>レ</sub>花落<sub>ニ</sub>碧巖前。

呈偈 饅頭爐炭吹<sub>レ</sub>滅、劍樹刀山喝<sub>レ</sub>便摧。

風吹柳絮毛毬走、雨打李花蝶蝶飛はどうぢや。

答 雨降れば李の花が飛びます、風吹けば柳の花が飛びます。

著語 雞寒上<sub>レ</sub>木、鴨寒下<sub>レ</sub>水。

呈偈 高々峯頂立不<sub>レ</sub>露<sub>レ</sub>頂、深々海底行不<sub>レ</sub>濕<sub>レ</sub>脚。

又 一躍々翻四大洲、一拳々倒須彌山。

又 或派にては荷葉團々を、坐し乍ら身體を回轉し圓形を描きて表はし、菱角をフワッ／＼と

水上に浮ぶ態をなし、柳絮蝶蝶共に身體にて模様をなす、而して「四句を士農工商に分けて見よ」なる拶所あり、荷葉を雨天農夫の蓑笠姿に見たて、菱角を武士の上下破しきに見、

毛毬走を商買李花の飛ぶを工人と見る。

八 鏡清雨滴聲 (碧巖四十六)

鏡清問僧門外是什麼聲、僧云雨滴聲、清云衆生顛倒迷已逐物、僧云和尚作麼

生、清云泊不<sub>レ</sub>迷已、僧云泊不<sub>レ</sub>迷已意旨如何、清云出身猶可易、脫體道應難。

答 ビンヤ／＼／＼と雨聲を摸す。

又は 威勢よくバラ／＼と云ふ派あり。

九 兜率三關 (葛藤集、無門關四七)

兜率悅和尚設<sub>ニ</sub>三關<sub>ニ</sub>問學者、撥草參玄只圖見性、即今上人性在<sub>ニ</sub>甚處<sub>ニ</sub>識得自

性方脫<sub>ニ</sub>生死<sub>ニ</sub>眼光落時作麼生脫、脫得生死便知去處、四大分離向<sub>ニ</sub>甚處<sub>ニ</sub>去。

一、即今上人性在甚處。

答 四邊を見廻はし搜し求むる態をなす。師家註して曰く、四邊其物だらけで、有ることは有るも

目に見えず。



著語 只在此山中、雲深不知處。

又 無風荷葉動、決定有魚行。

又 樹密猿聲響、波澄雁影深。

世語 年毎に咲くや吉野の山櫻木を割きて見よ花のありかを。

聲はすれども姿は見への君は深野のきりくす。

二、眼光落時作麼生脫。

答 虚空をつかみ脚をバタ／＼させ、斷末魔七顛八倒苦悶の摸様をなす。

著語 毒箭擡胸。又は似鶻捉鳩。

又 獅子一吼野干腦裂。

三、四大分離向甚處去。

答 仰臥して死屍の摸様をなす。

抄云去處未足時作麼生。

答 同上死屍の摸様をなす。

著語 斷碑横古路。

又 岫巖峯頂神禹碑。

又 空留一片石、萬古在燕山。

又 十字街頭破草鞋。

或派にては向甚處去を日用の去來とし、始隨芳草去又逐落花回と著語せしむることあり。

一〇 懶山有句 (葛藤集)

福州長慶懶安和尚示衆云、有句無句如藤倚樹、疎山聞得道、我有一轉語、要去者老子夏罷遂入閩見懶安和尚、又謂之瀉山和尚、裴相國師、聞自瀉山請住長慶、疎山到彼值師泥壁、次疎山便問有句無句如藤倚樹、是和尙語否、瀉山云是、疎山云忽然樹倒藤枯句歸何處、瀉山放下泥盤、呵々大笑歸方丈、疎山云某甲三千里外賣却布單、特爲此事來、和尚爲甚不與某甲說、瀉山云侍者將錢來與者矮闍梨去、他日有獨眼龍爲汝點破去在、後到明招、舉前話、招云瀉山頭正尾正、只是不遇知音、疎山云忽然樹倒藤枯句歸何處、招云更使瀉山咲轉新、疎山當下有省、乃云瀉山元來咲中有刀、後來大惠禪師在圓悟會裡、悟遂令居擇木堂、作不釐務。



侍者毎日同士大夫入室圓悟只舉有句無句如藤倚樹、大惠纔開口、悟便道不  
 是如是將半年一日同趙表之方丈藥石次把筋在手忘了喫飯圓悟顧師而語  
 表之曰只這漢參得黃楊木禪也師遂引狗看熱油鑊爲喻圓悟曰只這便是金剛  
 圈栗棘蓬居無何控圓悟曰聞和尚嘗問五祖此話不知記其答否圓悟笑而已  
 師云若對人天衆前問今豈無知者耶圓悟乃云向問有句無句如藤倚樹時如  
 何祖云描也描不成畫也畫不就又問忽遇樹倒藤枯時如何祖云相隨來也師聞舉  
 乃抗聲曰某甲會也圓悟曰只恐爾透公案不得云請和尚舉圓悟遂舉師出語無  
 滯圓悟曰今日方知吾不欺汝也遂著臨濟正宗記以付之俾掌記室分座訓徒  
 懶山是有句無句如藤倚樹と云うたが、自分の見識で有句無句をどう見るか。

答 野中の一本松。

著語 冬嶺孤松秀。又孤松聳嶺頭。

又 松樹千年翠。

一一 臨濟賓主句 (臨濟錄、葛藤集)

臨濟因兩堂首座相見、同時下喝、僧問師還有賓主也無、師云賓主歷然、師云  
 大衆要會臨濟賓主句、問取堂中二首座卽下座。

答 柱は豎に敷居は横に、山は高く川は低し。

著語 山是山水是水。

又 柳綠花紅。又 松直棘曲。

別派の見方 和尚は高々座上に穩坐して獨參を聞いて御座る、弟子は疊の上に平身低頭して居る。

著語 牀頭三尺劍 瓶裡一枝梅。

又 或派にては、師家と自分とを交互に指しつゝ、賓主此の通り歷然として居りますと云ふ。

一一 臨濟赤肉 (臨濟錄、葛藤集)

臨濟上堂云、赤肉團上、有一無位真人、常從汝等諸人面門出入、未證據者看。  
 看時有僧出問如何は無位真人、師下禪床把住云道々、其僧擬議、師托開云無位  
 真人是什麼乾屎橛便歸方丈。

答 手を額にかざして臨濟の威勢よきを見る態をなす。(看、看の模様をなす也)



著語 大抵還<sup>ニ</sup>他肌骨好<sup>ハ</sup>、不<sup>レ</sup>塗<sup>ニ</sup>紅粉<sup>一</sup>自風流。

又 却嫌脂粉汚<sup>ニ</sup>顔色<sup>一</sup>、淡掃<sup>ニ</sup>蛾眉<sup>一</sup>朝<sup>ニ</sup>至尊<sup>一</sup>。

又 背倚<sup>ニ</sup>寒巖<sup>一</sup>面如<sup>ニ</sup>滿月<sup>一</sup>、盡大地人只觀<sup>ニ</sup>半截<sup>一</sup>。

別派 看々とはどうぢや。

答 驚き倒るゝの態をなす。

師家禪床を把住して云く道々とはどうぢや。

答 眞平御免下さいといふ。

無位と非無位と相去<sup>ル</sup>多少<sup>ク</sup>速道<sup>々々</sup>。

答 幾重にも御許の程願ひます。

一三 雲門花藥欄 (碧巖三十九)

僧問<sup>ニ</sup>雲門<sup>一</sup>如何是清淨法身、門云花藥欄、僧云便恁麼去時如何、門云金毛獅子。

答花藥欄 又手當胸起立して、此の糞雪隠といふ。

金毛獅子、師家面前にて脱糞の態をなす。

著語 破爛衫裡清風動。

又 野有<sup>ニ</sup>死麋<sup>一</sup>白茅包<sup>レ</sup>之。

又 華瓶盛<sup>ニ</sup>糞汁<sup>一</sup>。

別派にては、花藥欄とはどうぢや。

答 雪隠の蛆蟲、癩病の膿汁、かさかきのかさ蓋。

著語 盆掃堆頭更加<sup>ニ</sup>盪瓏<sup>一</sup>。

金毛の獅子とはどうぢや。

答 大獅子吼一番す。

一四 大隋劫火洞然 (碧巖二十九)

僧問<sup>ニ</sup>大隋<sup>一</sup>劫火洞然大千俱壞未審<sup>ニ</sup>這箇壞<sup>カ</sup>不壞<sup>カ</sup>、隋云壞、僧云恁麼則隨<sup>レ</sup>他去也、隋

云隨<sup>レ</sup>他去。

大隋懷というたがどうぢや。

答 兩手を以て、バリバリと云ひつゝ、四面猛火なるの形容をなす。

隨他去とはどうぢや。

答 兩手を以て、ドツドツと云ひつゝ、火の流れる形をなす。



一五 趙州七斤布衫 (卷四十五)

僧問趙州、萬法歸一、一歸何處、州云我在青州作一領布衫重七斤。

萬法歸一はどうぢや。

答 膝を打つ、又ウフンといふ、或は指を以て畳上に一の字を書く。

一歸何處はどうぢや。

答 一、萬法に歸す。或師家は、一は二に歸し三に歸し四五六七八九十百千萬億兆に歸すといふ。

著語 標有梅其實七

又 一夫作難七唐墮

世語 箱根山籠に乗る人擔ぐ人、その又草鞋を作る人。

一六 聖諦第一義

梁武帝問達磨大師、如何是聖諦第一義、磨云廓然無聖、帝曰對朕者誰、磨云不識、帝不契、達磨遂渡江至魏、帝後舉問志公、志公云陛下還識此人否、帝云不識、志公云此是觀音大士傳佛心印、帝悔遂遣使去請、志公云莫道陛下發使去取、闔

國人去佗亦不回。

廓然無聖とはどうぢや。

答 又手當胸して起立す。(盡大地土一嘗めもない境也)

或は權兵衛も八も三も泥塗れで働いて居る。

著語 南村北村雨一犁、新婦餉姑翁哺兒。

不識はどうぢや。

答 達磨も識らぬといふが自分も識らぬ。

師家抄云く何として識らざる。

答 釋迦彌陀も識らぬ。

不識の著語 日月照臨不到、天地蓋覆不盡。

又 深溪絶無樵子語、陰崖却有獵人過。

一七 趙州至道無難 (卷四十二)

趙州示衆云、至道無難唯嫌揀擇、纔有語言是揀擇是明白、老僧不在明白裏、是汝還護惜也無、時有僧問既不在明白裏護惜箇什麼、州云我亦不知、僧云和尚



既不知爲什麼却道不在明白裏。州云問事即得禮拜了退。

答至道 又手當胸起立して「至道」といふ。

無難 山は高く川は低し、柱は豎に敷居は横に。

唯嫌揀擇 惜い、欲しい、憎い、可愛い、善い、悪い、濟む、濟まぬ。

或は至道と無難と何れの方から見て揀擇なきかと問ふ師家あり、其の答は「至道に一切を具する故に」といふ。

著語 唯愛清臺新曆日、懶見韓子送窮文。

老僧不在明白裏はどうぢや。

答 老師の御恩は一生忘れませぬ。

言端語端 答 やかましいと一掌を打す。

一有ニ多種ニ無ニ兩般。

答 一本の手が五本の指五本の指が一本の手。

一八 臨濟四料簡 (臨濟錄、葛藤集)

臨濟晚參示衆云 有時奪人不奪境 有時奪境不奪人 有時人境俱奪 有時

人境俱不奪。

自分の手を境とし、身體を人として四料簡を捌け。

答一、奪人不奪境 手を差出して師家の面を覆ふ。

著語 曲終人不見、江上數峯青。

又 明月自來還自去、更無人倚玉闌干。

二、奪境不奪人 手を背後に隠し、少し體を乗り出す。

著語 宇宙無雙日、乾坤只一人

又 項王暗啞叱咤、千人皆廢

三、人境俱奪 襖の陰に素早く飛び隠れる。

著語 天地猶空秦日月、山河不見漢君臣。

四、人境俱不奪 又手當胸起立す。

著語 江上晚來堪畫處、漁人披得一簑歸。

又 殘星數點雁橫塞、長笛一聲人倚樓。

別派の見方



一、奪人不奪境 天井、障子、疊、火鉢、香爐、竹篋と室内の物を列挙する、即ち自己を奪ふ也。

著語 到頭霜夜月、任運落前溪。

二、奪境不奪人 盡大地自己一人、お山の大将乃公一人。

著語 天上下唯我獨尊。

又 四海盡歸皇化裏、三邊誰敢犯封疆。

三、人境兩俱奪、東海道人一人もない、木曾山中猫一匹も居ない、東京中人一人も居ない、淺草

公園人一人も居ない。

著語 晋楚失其富、賁育失其勇。

又 打破蔡州城、殺却吳元濟。

四、人境俱不奪 主人客人一切の器物其儘の處。

著語 皇天無私、惟德惟仰。

又 冠者五六人童子六七人浴乎沂風乎舞雩詠而歸。

又 公子王孫芳樹下、清歌妙舞落花前。

一九 臨濟三句 (臨濟錄、葛藤集)

臨濟上堂僧問如何是第一句、師云三要印開朱點側未容擬議主賓分、問如何是第二句師云妙解豈容無着問漚和爭負截流機、問如何是第三句師云看取棚頭弄傀儡抽牽都來裏有人(師又曰一句語須具三玄門云々は別に見る)

如何是第一句 答 いろはにはへと。

如何是第二句 答 ちりぬるをわか。

如何是第三句 答 よたれそつね。

或は今日はいよいよ天氣で(第一句)、まゝ御茶一杯召上れ(第二句)、へい左様なら(第三句)。

二〇 智門蓮華荷葉 (碧巖二)

僧問智門、蓮花未出水時如何、智門云蓮花、僧云出水後如何門云荷葉。

未出水時如何智門に代つて自分の力で答へよ。

答 稲鉢。

出水後如何 答 牡丹餅。

(少しも物と拘はらずに自在にやつてのける也)。



二二 禾山解打鼓 (碧巖四四)

禾山垂語云習學謂之聞、絕學謂之鄰、過此二者是爲眞過、僧出問如何是眞過、山云解打鼓、又問如何是眞諦山云解打鼓又問卽心卽佛卽不問如何是非心非佛山云解打鼓、又問向上人來時如何接山云解打鼓。

答 テレスクテン／＼スツテン／＼(太鼓の音)

著語 苦瓠連根苦、甜瓜徹蒂甜。

(禾山、何を問ひ掛くるも解打鼓にて押し通す、といふ處を著語せる也、徹底苦く、徹底甜し、卽ち徹頭徹尾解打鼓となり)。

二二 黃檗唾酒糟漢 (碧巖一一)

黃檗示衆云汝等諸人盡是唾酒糟漢、恁麼行脚何處有今日還知大唐國裏無禪師麼、時有僧出云只如諸方匡徒領衆又作麼生檗云不道無禪只是無師。

還知大唐國裏無禪師麼。

答 お山の大將おれ一人。

著語 項王暗啞叱咤千人皆廢。  
不言無禪只是無師。

答 そうぢや／＼わしが悪かつた。

著語 楚人一炬 可憐焦土、先に威張り返りし者が忽ち下手に出る處を此く著語せる也。  
別派の見方

汝等諸人盡是唾酒糟漢。

答 此の糟食ひ坊子めが。

何處有今日。

答 グヅカワ／＼して居ては埒はあかぬぞ。

不道無禪只是無師。

答 さて／＼和尚の大慈大悲にあらざれば、何ぞ今日あらんや。

還知大唐國裏無禪師麼。

答 支那大唐四百餘州人一人もない實に嘆かほしい次第ぢや。

著語 降矣哉終身夷狄、戰也暴骨沙磧。



長沙岑禪師因三聖令秀首座問云、南泉遷化向甚麼處去、師云石頭爲沙彌時曾見六祖秀云不問爲沙彌時南泉遷化向甚麼處去師云教伊尋思去秀云和尚雖有千尺寒松且無抽條石筍師默然秀云謝和尚答話師亦默然秀回舉似三聖、聖云若實與麼勝臨濟七步、雖然如是待我明日更看過、至明日乃問承聞和尚昨日答南泉遷化一則話可謂光前絕後今古罕聞師亦默然。

石頭爲沙彌時曾見六祖。

答 副隨の何某は門前に豆腐買に往つた。

不問沙彌時南泉遷化向甚麼處去。

答 今日は來客があるから御馳走する。

師亦默然 默するのみ、又反對にヤカマシイとやる。

著語 渭北春天樹、江東日暮雲。

又 武陵春已老、臺榭綠陰多。

又 平原秋樹色、沙麓暮鐘聲。

又 年來老大渾無力、見人懶下禪床。

又 流水寒山路、深雲大寺鐘。

教伊尋思去。

答 四邊を見廻しつゝ曰く、あゝ今頃は何處へ往かれたやらと。

著語 一把柳枝收不得、和風搭在玉欄干。

又 眞成薄命久尋思、夢見君王覺後疑。

又 到頭霜夜月、任運落前溪。

世語 向ふを通るは清十郎ぢやないか笠がよう似た菅笠が。

別派の見方

南泉遷化向甚麼處去。

答 一寸門前へ草鞋買ひに参ります。

師家抄云草鞋買は且措南泉遷化向甚麼處去。

答 一寸紙買ひに参ります。



著語 夜發清溪向三峽、思君不見下滄洲。

世語 石重九父を尋ねて高野の山へ。

又 雀どの御宿はどこに。

石頭爲沙彌時曾見六祖。

答 赤ン坊を慰むる態にて舌を鳴らし顎をしやくる。

教伊尋思去。

答 可愛い子や、餓頭見ても花見ても。

師亦默然 答 默するのみ。

世語 鳥も通はぬ玄海灘を何をたよりに通はんす。

著語 鏡水關山鳥飛不渡。

二四 疎山壽塔 (葛藤集)

撫州疎山仁禪師因主事僧爲師造壽塔了來白師、師曰汝將幾錢與匠人、僧云一切在和尙、師云爲將三文與匠人好、爲將兩文與匠人好、爲將一人與匠人好、若道得與吾親造壽塔、其僧茫然、羅山時在大庾嶺住菴後有僧到大嶺舉

似前話、嶺云還有人道得麼、僧云未有人道得、嶺云爾歸舉似疎山道若將三文與匠人和尙此生決定不得塔、若將兩文與匠人和尙與匠人共出一隻手、若將一文與匠人帶累匠人眉鬚墮落、僧回舉似疎山、師具威儀遙望大嶺禮拜讚歎曰將謂無人、大庾嶺有古佛放光射至此間、雖然也是臘月裡蓮花、大嶺聞得云、我與麼道早是龜毛長數尺。

爲將三文與匠人好——將一文與匠人好

答 いや澤山に有難う。(ギャフンといはせる也)

有古佛放光射至此間。

答 柱は豎に敷居は横に。

著語 大野兮涼颯颯々々、長天兮疎雨濛々々。

若將三文與匠人云々將兩文云々將一文云々。

答 一本目には池の松、二本目には庭の松、三本目にはさがり松。

臘月裡蓮花。



答 スラ／＼とやつてのけた哩、(皆爲人度生の働で跡も方もない)

著語 千峰勢到岳邊止、萬派聲歸海上消。

別派の見方

師家云く僧に代つて幾文を興へるか。

答 一文二文三文と數へる。

著語 一二三四五六七、碧眼胡僧不知數。

又 母在一子寒、母無三子寒。

放光射至此間。

答 光を放つて射て此間に至ると唱ふ。

著語 書棟朝飛南浦雲、朱簾暮捲西山雨。

二五 風穴祖師心印 (卷三三)

風穴在郢州衙内上堂曰祖師心印狀似鐵牛之機、去即印住住即印破、只如不去不住、印即是不、印即是、時有盧陂長老出問、某甲有鐵牛之機、請師不搭印、穴云慣釣鯨鯢澄巨浸、却嗟蛙步驟泥沙、陂佇思、穴喝云、長老何不進語、陂擬議、穴打

一拂子、穴云還記得話頭麼、試舉看、陂擬開口、穴又打一拂子、牧主云佛法與王

法一般、穴云見箇什麼道理、牧主云當斷不斷返招其亂、穴便下座。

形似鐵牛之機。

答 石曰の如くたて曰の如し。

拶云何然。

答 挺子でも動かぬ。

著語 沿レ牆弄ニ蝴蝶、臨レ水擲ニ蝦蟇。

又 自携レ瓶去沽ニ村酒、還着レ衫來爲ニ主人。

石曰の種々の用を爲す所を着語し、一人にて種々の働きなす態を述べたる也。

去即印住住即印破只如不去不住印即是不印即是、かくどん／＼と尋ね來たらば如何するか。

答 師家に一掌を興ふ。

二六 陸亘天地同根 (卷四〇)

陸亘大夫與南泉語話次、陸云肇法師道、天地與我同根、萬物與我一體、也甚奇怪、



南泉指庭前花召大夫云時人見此一株花如夢相似。

時人見此一株花如夢相似、陸亘の見方はどうぢや。

答 樞鉢の如く牡丹餅の如し。

南泉の見方はどうぢや。

答 あゝ見事に咲いた。

二人の居場所を分けて見よ。

答 陸亘は有功用境涯、南泉は無功用境涯。

日用事上で分けて見よ。

答 陸亘は袴にて四角張つた所、南泉は襦袢姿に啣へ煙管でブラ／＼出掛ける所。

頌曰聞見覺知非一々、山河不在鏡中一觀よ。

答 聞見覺知非一々と唱へつゝ、指を以て一々萬象を指摘し、山河云々と唱へつゝ萬象を收めたる

態にて又手當胸しうつむく、(陸亘の境涯、見識の臭味ある所)

霜天月落夜將半、誰共澄潭照影寒。

答 夜も大分更けたが話し相手もなし、ドレボツ、小便でもして来て寝ようかい。(南泉の境涯、

見識盡く脱した所)

著語 越王勾踐破吳歸、義士還家盡錦衣、宮女如花滿春殿、唯今只有鷓鴣飛、上三句ハ陸亘、

賑かなる所結句は南泉見識も何もなき淋しき所也。

前語 驢馱井井馱馱。

別派の見方

天地與我同根。

答 天地と我と同根を唱ふ。

萬物與我一體。

答 疊に對し火鉢に對し障子に對し同一體で御座る。

如夢相似。

答 コクリ／＼と睡る態をなす。

著語 只見溪回路轉、不知身在桃源。

聞見覺知非一々。

答 儘に見て居る、聞いて居る、覺て居る知て居る。



山河不在境中觀。

答 山を見川を見る態をなし、後懷裡を見て已む。

霜天月落夜將半、誰共澄潭照影寒。

答 もう大分夜が更けました、休ませう。

二七 百丈野狐 (葛藤集、無門關)

百丈和尚凡參次、有一老人常隨衆聽法、衆人退、老人亦退、忽一日不退、師遂問、面前立者復是何人、老人云、諾、某甲非人也、於過去迦佛葉時曾住此山、因學人問大修行人還落因果也無、某甲對云、不落因果、五百生墮野狐身、今請和尚代一轉語、貴脫野狐、遂問大修行人還落因果也無、師云、不昧因果、老人於言下大悟作禮云、某甲已脫野狐身、住在山後、敢告和尚、乞依亡僧事例、師令維那白槌告衆、食後送亡僧、大衆言議一衆皆安、涅槃堂又無人病、何故如是、食後只見師領衆至山後巖下、以杖挑出一死野狐、乃依火葬、師至晚上堂、舉前因緣、黃檗便問古人錯祇對一轉語、墮五百生野狐身、轉々不錯合作、箇甚麼、師云、近前來、與伊道、黃檗遂近

前、與師一掌、師拍手笑云、將謂胡鬚赤更有赤鬚胡。

不落因果、不昧因果。

答 不落因果コン／＼、不昧因果ワン／＼。(不落不昧大した相違のないものといふ意也)

抄曰く、如是廣き百丈山に何故死野狐が居る。

答 此寺の境内にも黽イメチの一匹位死で居る、況や廣い百丈山に死野狐の居るも別に不思議はあるまい。

將謂胡鬚赤更有赤鬚胡。

答 毛唐の鬚は赤いと思つたら赤鬚の毛唐ぢやつた。

著語 將謂黃連甜レ似レ蜜、誰知蜜苦レ似レ黃連。

別派の見方

不落因果 前へ二足三足出てコン／＼と鳴く。

不昧因果 後へ二足三足退きワイ／＼と鳴く。

又別派にては

不落因果 コン／＼野狐に墮し生ける處。

不昧因果 四肢を縮め仰臥し死野狐の模様をなす。死して野狐身を脱したる所。



二八 華嚴法界 (葛藤集)

華嚴之四法界、理法界、事法界、理事無碍法界、事々無碍法界。

理法界 答 世界中ガラツとして塵一本もない。

著語、萬里一條鐵、又、大地無寸土。

事法界 答 森羅萬象悉く大光明を放つて居る。

著語 春江潮水連海平、海上明月共潮生。

理事無碍法界 答 花と月と對し、山と川と對し、夜と晝と對し、男と女と、僧と俗と對す。

著語 落霞與孤鶩齊飛、秋水長天共一色。

事々無碍法界 答 柳は柳で大光明、花は花で大光明、山は山で大光明、川は川で大光明、男は男、

女は女で大光明。

著語 草色青青柳色黃、桃花歷亂李花香。

別派の見方

手を如何見れば事法界か、理法界乃至事々無碍法界か。

答一、手を手とすれば事法界(手を突出し乍ら云ふ)

二、手を手とせねば理法界。

三、手を手とせざる所、直に手たるを妨げぬ(理事無碍)。

四、一本の手が直に天となり地となり山川草木森羅萬象となり、森羅萬象悉く此の一本の手に收まる(事々無碍法界)。

著語 一月普現一切水 一切水一月攝。

二九 瀉山水牯牛 (葛藤集)

瀉山祐禪師示衆云、老僧百年後、向山下檀越家作一頭水牯牛、於左脇下、書五字云瀉山僧某甲、此時若喚作瀉山僧、又是水牯牛、喚作水牯牛、又云瀉山僧某甲、且道喚作甚麼、即得、仰山出禮拜而去。

答 わしの名は何某(自分の名を云ふ)

著語 孔子名丘仲尼、其先宋人。

三〇 首山竹篋 (葛藤集、無門關)

汝州首山省念禪師因拈竹篋示衆云汝等諸人若喚作竹篋即觸、喚不作竹篋即



背、汝諸人且喚作什麼、時葉縣省和尚在會下乃近前擊得折作兩截拋向階下却云是什麼師云瞎大惠禪師拈云速度々々且喚作什麼。

答 拳を突出して云ふ、竹篋々々。

抄云若し然らば一句合頭語萬劫繫驢馱。

答 喚で小便柄杓となし、肥擔桶となす。

竹篋の用

答 杖ともなし箸ともなし櫛木ともなし杓子ともなす。

背觸の二字を片付けよ。

答 竹篋を床の間の隅に片付ける態をなす。

喚作虚空不得喚作什麼。

答 師家面前に筋斗を打す。(虚空無礙性を表はす)

別派の見方

喚作竹篋即觸。

答 しつべい。

師家云それ觸れた。

答 エイ木の切れだと抛り出す。

師家又云それ背いた。

答 しつべい。

背觸の二字は何處へやる。

答 背の觸のと面倒臭い、へし折つて風呂の下へくべてしまへ。

背觸に拘はらざる底の一句は。

答 本來空畢竟空。

著語 遇唐虞則禮樂、逢桀紂則干戈。

三一 太宗擊鉢 (葛藤集)

宋太宗帝一日擊鉢問蒸相王隨云既是太庾嶺頭提不起、爲甚麼却在寡人手裡隨無對。

答 陛下聖德廣大、四夷皆皇化に浴して居ます。



拶云 臥雲深處不<sub>レ</sub>朝<sub>レ</sub>天因<sub>ニ</sub>甚麼<sub>ニ</sub>來<sub>ニ</sub>這裡<sub>一</sub>。

答 陛下大徳山奥の禽獸に至る迄慕て居ます。

著語 四海悉歸<sub>ニ</sub>皇化裏<sub>一</sub>、三邊誰敢犯<sub>ニ</sub>封疆<sub>一</sub>。

三三二 馬祖日面佛月面佛 (碧巖三)

馬大師不安、院主問和尚近日尊候如何、大師曰日面佛月面佛。

答 釋迦彌陀も穴窺きもならぬ。

三日後不<sub>レ</sub>送<sub>ニ</sub>亡僧<sub>一</sub>是好手。

答 人の命は果敢ないもので、今度はわしも危いわい。

別派にては 右を向て日面佛、左を向て月面佛といふ。

三日後云々の答、あ、困つた今和尚に若萬一の事あれば今後誰に就て修行するであらう。

三三三 翠巖夏末 (碧巖八)

翠巖夏末示衆云一夏以來爲<sub>ニ</sub>兄弟說話看翠巖眉毛在麼保福云作<sub>レ</sub>賊人心虛、長慶云生也、雲門云關。

長慶云生也

答 は一えたはえた。

拶云是什麼處是生處。

答 向の山から垣根の邊迄、すーつと一面に青草が生えた。

著語 雨後青山青轉青。

又 雨過雲凝曉半開、數峰如<sub>レ</sub>畫碧崔嵬。

保福云作賊人心虛。

答 泥坊は胸がびくつくわい。

雲門云關。

答 カーンと獅子吼して疊を打つ。又師家に一掌を打す。

著語 父有<sub>ニ</sub>迷子之訣<sub>一</sub>子有<sub>ニ</sub>打爺之拳<sub>一</sub>。

又 瞋拳不<sub>レ</sub>打<sub>ニ</sub>笑面<sub>一</sub>。

別派の見方

眉毛ありや。



答 和尚の眉毛を見る。

翠巖の氣持はどうぢや。

答 鶉の毛一本も抜き差しはならぬ。

保福云作賊人心虚。

答 泥坊をする様な奴はどうも穩かならぬわい。

長慶云生也。

答 儘に生へて居ります。

雲門云關。

答 此關字吉事凶事日用萬端關字ならざるはなし、蟻一匹でも這出る隙はないカーン。(關)

著語 失錢遭罪、又瞋拳不<sub>レ</sub>打<sub>二</sub>笑面<sub>一</sub>。

又 停<sub>レ</sub>車坐愛楓林晚、霜葉紅<sub>二</sub>於二月花<sub>一</sub>。

(雲門の一段優れたる腕前を云ふ)

三四 許老胡知 (葛藤集)

只許老胡知不許老胡會。

答 許老胡知、ウン好し〜。

不許老胡會、いかぬ〜。

著語 其知可<sub>レ</sub>及、其愚不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>及也。

又 使<sub>二</sub>我爲<sub>一</sub>良臣、使<sub>二</sub>我爲<sub>一</sub>忠臣。

(知も會も大差なしとの意也)

三四 天皇恁麼 (葛藤集)

欽山與巖頭雪峰到德山乃問天皇也恁麼道龍潭也恁麼道未審德山作麼生道德山云汝試舉天皇龍潭底看欽山擬議德山便打欽山歸延壽堂云是則是打我太煞巖頭云汝與麼他後莫道見德山。

天皇也恁麼道龍潭也恁麼道未審德山作麼生道、德山に代つて答へよ。

答 果然(さう言ふぢやらうと思つた)。

三五 文殊起見 (葛藤集)

南泉云文殊普賢昨夜三更起佛見法見各與三十棒<sub>二</sub>向<sub>一</sub>鐵圍山去也時趙



州出衆云和尚棒教誰喫、泉云王老師有什麼過州禮拜。

答 昨夜、夜半に目が覺めて故郷の事、親兄弟の事、夫れからそれと思ひ出したが、スパーツと斷ち切つて其儘朝迄グー／＼と眠つた。

著語 抱レ臑判讀。

又 截ニ斷人間是與非、白雲深處掩ニ柴扉。

別派の見方

起佛見法見。

答 昨夜來肩や腰が痛んで困つた。

貶向ニ鐵圍山去。

答 今朝按摩を呼んで療治したら、すつかり癒つた。

著語 解釋春風無限恨、沈香亭北倚ニ欄干。

三六 南院啐啄 (葛藤集)

南院示衆云、諸方只見啐啄同時眼、不具啐啄同時用、有僧出問如何是啐啄同時用南院云作家不啐啄、啐啄同時失、僧云猶是學人疑處、院云作麼生是備疑處、

僧云失、院便打、其僧不肯、院便趕出、僧後到雲門會裡舉前話、有一僧云南院棒折那、其僧豁然有省、且道意在什麼處、其僧却回見南院、院適已遷化却見風穴纔禮拜、穴云莫是當時問先師啐啄同時底僧麼、僧云是、穴云爾當時作麼生會僧云某甲當初時如燈影裡行相似、穴云爾會也。

答 儂は儂だけの事をして居ますから、大にお世話様で、(啐啄々々と構ひ抜くのでかく答ふる也)

又 人手を借らずに斯様に大きくしました、と云つて起立す。

啐啄同時用。

答 鐘が鳴れば本堂へ、雲板が鳴れば飯臺坐へ行く。

三七 陳操登樓 (葛藤集)

陳操一日與衆官登樓次望見數僧來、一官人云來者總是禪僧、操云不是、官人云焉知不是、操云待近來與汝勘過、僧到樓前、操驀召云上座、僧舉頭、操謂衆官云不信道。

答 殿下英明大徳、誠に恐懼の至りに存じます。



拶云 無言拶<sup>ニ</sup>承書<sup>一</sup>。

答 フ、ンと憫笑する模様をなす。

著語 温良恭謙讓以得<sup>レ</sup>之。

又 不<sup>レ</sup>因<sup>ニ</sup>射<sup>レ</sup>鵬手<sup>一</sup>、爭知<sup>ニ</sup>李將軍<sup>一</sup>。

別派の見方

不<sup>レ</sup>信<sup>レ</sup>道 答 道ふことを信せずやといふ。

衆官に代つて一拶して見よ。

答 御鑑定實に恐れ入りました。

著語 天寒無<sup>レ</sup>私、鑑在<sup>ニ</sup>機先<sup>一</sup>。

又 非<sup>ニ</sup>高明智<sup>一</sup>、爭得<sup>ニ</sup>此人<sup>一</sup>。

又 若無<sup>ニ</sup>舉<sup>レ</sup>鼎拔<sup>レ</sup>山力<sup>一</sup>、千里烏錐不<sup>レ</sup>易<sup>レ</sup>騎。

三八 夾山掘坑 (葛藤集)

夾山云、我二十年住此山、未曾舉著宗門中事、有僧問承和尚有言二十年住此山、未曾舉著宗門中事、是否、山云是、僧便掀倒禪床、山休去、至明日普請掘一

坑、令侍者、請昨日問話僧來、山云老僧二十年只說無義話、令請上座打殺老僧、埋向坑中、若不打殺老僧、上座自著打殺埋此坑中、其僧束裝潛去。

其の僧に代つて拶せよ。

答 あかんべー(ギャフンと參らせる也)。

三九 別峯相見 (葛藤集)

教中說妙峯孤頂德雲比丘從來不下山、善財去參七日不逢、一日却在別峯相見、及乎見了、却與他說、一念三世一切諸佛智慧光明普光法門、圓悟云德雲既不下山、因什麼却在別峯相見、若道他下山、教中說德雲比丘從來不曾下山、常在妙峯孤頂到這裡、德雲與善財的々在那裡。

答 和尚と我と此の様に相見して居ります。

四〇 趺倒淨瓶 (無門關)

瀉山和尚始在百丈會中充典座、百丈將選大瀉主人、乃請同首座對衆下語、出格者可往百丈、遂拈淨瓶置地上、設問云、不得喚作淨瓶、汝喚作甚麼、首座乃云



不可喚作木楔也。百丈却問於山。山乃趨倒淨瓶而去。百丈笑云。第一座輪却山子也。因命之爲開山。

答、著語 翡翠倒翻荷葉雨、鷺鷥衝破竹林煙。

四一 巴陵銀碗裏雪 (碧巖一三)

僧問巴陵如何是提婆宗。巴陵云。銀碗裏盛雪。

答 そんな物は突き破つちまへ。

四二 巴陵吹毛劍 (碧巖百)

僧問巴陵如何是吹毛劍。陵云。珊瑚枝々撐着月。

答 そんな物はへし折つて西海へ打ちやつた。

著語 破鏡不重照、落花難上枝。(二則共に著語す)

別派の見方

提婆宗の答 ベチャ〜と餘計なことをしやべるな。

著語 開口看瞻。

吹毛劍 答 立てば立つ上、坐れば坐る上、聞けば聞く上、自由自在に切り廻す。

著語 嘯月眠雲。又 詠花吟月。

四三 明眼落井 (葛藤集)

僧問巴陵如何是道陵云。明眼人落井。

答 おつと危い、すんでの事に落る所。と云ひつゝ、墜落を免れたる模様をなす。

著語 陷人坑子年々滿。

又 坦々黑暗深坑最可怖畏。

(以上三則を巴陵三轉語といふ)

四四 雲門對一說 (碧巖一四)

僧問雲門如何是一代時教。門云對一說。

答 大臣に逢へば大臣に説き、乞食に逢へば乞食に、男に逢へば男に、女に逢へば女に説く。

著語 與下太夫言侃々如也、與上太夫言問々如也。

又 糞火埋邊話長短。

四五 雲門倒一說 (碧巖一五)

僧問雲門不是目前機。亦非目前事。時如何。門云倒一說。



倒一説の意旨如何著語して見よ。

著語 珊瑚枕上兩行淚、半是思君半恨君。

又 長憶江南三月裡、鷓鴣啼處百花香。

不是目前機亦非目前事時如何とう答へるか。

答 是目前の機にあらず亦目前の事に非ざる時。と莊重に唱ふ。

著語 奪賊槍、煞賊。(問を奪つて答へたる處也)

四六 鏡清碎啄機 (碧巖一六)

僧問鏡清學人碎請師啄、清云還得活也無、僧云若不活遭人怪笑、清云也是草裏漢。

答 ビヨ、コツン、ビヨ／＼／＼、コツン／＼／＼。

(解説) 雞の卵殻を出でんとする時、母雞外より嘴にて之を破る趣なり。學人碎請師啄、ビヨ。

得活也無、コツン。遭人怪笑、ビヨ／＼／＼。草裏漢、コツン／＼／＼。作家と作家と

商量の處なり。

四七 忠國師無縫塔 (碧巖一八)

肅宗皇帝、問忠國師、百年後所須何物國師云與老僧作箇無縫塔、帝曰請師塔樣、國師良久云會麼、帝云不會國師云吾有付法弟子耽源、却暗此事、請詔問之、國師遷化後帝詔耽源問此意如何、源云湘之南潭之北、雪竇著語云獨掌不浪鳴、中有黃金充一國、雪竇著語云山形拄杖子、無影樹下合同船、雪竇著語云海晏河清、瑠璃殿上無知識、雪竇著語云拈了也。

答 請師塔樣 又手當胸して起立す。

國師良久 著語渭北春天樹、江東日暮雲。

湘之南潭之北 此方は床の間、此方は障子。

中有黃金充一國 八疊敷に備後表が敷き詰めてある。

無影樹下合同船 かうして拙者がどん坐つた。

瑠璃殿上無知識 盡十方世界に知己というては一人もない。

四八 龍牙問翠微 (碧巖二〇)

龍牙問翠微、如何是祖師西來意、微云與我過禪板來、牙過禪板與翠微、々接



得便打牙云打即任打、要且無祖師西來意、牙又問臨濟如何是祖師西來意濟云與我過蒲團來、牙取蒲團過與臨濟、々接得便打、牙云打即任打要且無祖師西來意。

西來無意といふがどうぢや。

答 最初隻手の公案で手がついて、法身機關言詮難透難解とやつて来たが、得た物と云ては鬼の毛で突いた程もない。

著語 去年貧有<sub>レ</sub>錫無<sub>レ</sub>地、今年貧無<sub>レ</sub>錫無<sub>レ</sub>地。

四九 保福長慶遊山次（碧巖三三）

保福長慶遊山次福以<sub>レ</sub>手指云只這裏便是妙峰頂、慶云是則是、可惜許、雪竇著語云今日共<sub>レ</sub>這漢遊山圖箇什麼、復云百千年後不道無只是少後舉似鏡清、清云若不是孫公便見<sub>レ</sub>鬪體遍野、只這裏便是妙峰頂。

答 手を翳してあゝ佳い景色だと遠望の態をなす。

是則是可惜許。

答 そんなに景色に見惚れて居ても仕方がない、日の暮れぬ間に歸らう。

著語 泣把<sub>レ</sub>李陵袂、歸思欲<sub>レ</sub>沾<sub>レ</sub>襟。

五〇 文殊問無着（碧巖三五）

文殊問無着、近離什麼處、無着云南方、殊云南方佛法如何住持、着云末法比丘少奉戒律、殊云多少衆、著云或三百或五百無着問文殊此間如何住持、殊云凡聖同居龍蛇混雜、著云多少衆、殊云前三々後三々。

著語 前面瑪瑙後面真珠。

又 頭正尾正。

世語 尾も長し頭も長し尾長鳥。

又 頭かくして尻かくさず。

又 手を拍き尻うちたゞく馬喰市。

五一 盤山三界無法（碧巖三七）

第三篇 相似禪内容詳論



盤山垂語云二界無法何處求心。

答 柱は豎に敷居は横に、柳は緑花は紅。

著語 草色青青柳色黄、桃花歷亂李花香。

別派の見方 師家の横面に一掌を打す。

拶云 無法はどうぢや。

答 眞平御免下さいと低頭す。

又別派の見方 立上りて手を翳し、此方を見れば何の山、彼方を見れば何の山、と觀望の模様をなす。

著語 到江吳地盡、隔岸越山多。

又 江上晚來堪畫處、漁人披得一簑歸。

五二 風穴家國興盛 (碧巖六一)

風穴垂語云、若立一塵家國興盛、不立一塵家國喪亡、雪竇拈拄杖云還有同

生同死底衲僧麼。

著語 到江吳地盡、隔岸越山多。

喪亡と興盛とを盡、多と分けて著語せし也。

五三 南泉斬猫 (碧巖六三、無門關)

南泉一日東西兩堂爭猫兒、南泉見遂提起云道得即不斬、衆無對、泉斬猫兒爲兩段。

答 ギャツ猫の死する聲、即ち猫になつて脱れたる所)

五四 趙州戴草鞋 (碧巖六四、無門關)

南泉復舉前話問趙州、州便脫草鞋於頭上戴出、南泉云子若在、恰救得猫兒。

答 ニャン(猫の生ける聲)。

著語 劍爲不平、離寶匣(南泉)藥因療病、出金瓶(趙州)

五五 金牛飯桶 (碧巖七四)

金牛和尚每至齋時自將飯桶於僧堂前作舞呵々大笑云菩薩子喫飯來、雪竇云雖然如是金牛不是好心、僧問長慶古人道菩薩子喫飯來意旨如何、慶云大似因齋慶讚。

菩薩子喫飯來どう挨拶するか。



答 腹一杯ちやと腹鼓を打つ。

雖然如是金牛不是好心。

答 飯櫃は空つぼちや。

慶云大似因齋慶讚。

答 飯食已訖色力充、威震十方三世雄、廻因轉果不在念、一切衆生獲神通と食畢偈を唱ふ。

五六 趙州初生孩子 (碧巖八〇)

僧問 趙州、初生孩子還具六識也無、趙州云急水上打毬子、僧復問投子、急水上打毬子意旨如何子云念々不停流。

答 四肢を締め仰臥し、オギャー／＼と孩子の態をなす。

五七 藥山看箭 (碧巖八一)

僧問 藥山 平田淺草塵鹿成群、如何射得塵中塵、山云看箭、僧放身便倒、山云侍者拖出這死漢、僧便走、山云弄泥團、漢有什麼限、雪竇拈云三步雖活、五步須死、看箭 答 矢を番へる態をなす。

或は師家、看箭と云て矢を番へば胸をすつと開く。

放身便倒 答 倒るゝ勢をなす。

侍者拖出這死漢、僧に代つて云へ。

答 和尚死なれた。

藥山に代つて云へ。

答 今日といふ今日は乃公がやられた哩。

五八 大龍堅固法身 (碧巖八二)

僧問 大龍、色身敗壞如何是堅固法身、龍云、山花開似錦、澗水湛如藍。

山花開似錦澗水湛如藍。

答 又手當胸し起立して山花と唱へ、其の儘再び坐して澗水と唱ふ。即ち法身に見る也。

山花に拶して云く、忽逢大風一時作麼生。

答 身を翻して落花の態をなし、バサリと倒る。(人にすれば落命の所なり)。

澗水に拶云く、忽逢傾湫倒嶽一時作麼生。

答 チン、ドン、シャンと葬式の趣をなす。



世語 露をなど仇なるものと思ひけむ、わが身も草におかぬばかりを。

又 山寺の春の夕ぐれ来て見れば入相の鐘に花ぞちりける。

五九 雲門古佛露柱 (碧巖八三)

雲門示衆云、古佛與露柱相交是第幾機、自代云南山起雲北山下雨。

答 七味唐辛子一袋二錢で買て来た。又大根、油揚、芋に葛蕪五六錢食つて来た。(相交る所をい

ふ)

著語 醍醐酥酪攪成一味、餅盤釵釧鎔成一金。

又 道冠儒履佛袈裟、和會三家成一家人。

六〇 維摩入不二法門 (碧巖八四)

維摩詰問文殊師利、何等是菩薩入不二法門、文殊曰如我意者於一切法無言無說無示無識離諸問答是爲入不二法門、於是文殊師利問維摩詰、我等各自說已、仁者當說何等是菩薩入不二法門、雪竇云維摩道什麼、復云勘破了也。維摩默然の腹はどうぢや。

答 師家の横面に一掌を打す。

文殊の意はどうぢや。

答 無言無說無示無識是爲入不二法門と莊重に唱ふ。

六一 雲門藥病相治 (碧巖八七)

雲門示衆云藥病相治、盡大地是藥、那箇是自己。

答 尾張大根と長唱す。意表に出で、はね飛ばす也。

著語 綿州附子漢州薑

又 到得還來無別事、廬山烟雨浙江潮。

(自己と境と相對したる所なり)。

六二 玄沙三種病人 (碧巖八八)

玄沙示衆云、諸方老宿盡道接物利生、忽遇三種病人來作麼生接、患盲者拈錘豎拂他又不見、患聾者語言二味他又聞患啞者教伊說又說不得、且作麼生接若接此人不得佛法無靈驗、僧請益雲門、門云汝禮拜著、僧禮拜起、雲門以拄杖



拯、僧退後、門云汝不是患盲、復喚近前來、僧近前門云汝不是患聾、門乃云還會麼、僧云不會門云汝不是患啞、僧於此有省。

患盲者拈鏡照拂他又不見

答 目には見えませぬが奇麗な花ですな。(師家註、曰、此盲人見て見て見からかす奴ぢや)

患啞者教他説又説不得

答 口には言はないと申して居ります。(註同義)

患聾者教他説又説不得

答 耳では聞きませんが時計がカチ／＼いうて居ります。

著語 都府樓纔見瓦色、觀音寺只聞鐘聲。

又 香爐峯雪揭簾見、遺愛寺鐘歇枕聞。

又 朝見雲泛々、夕聞水潺々。

(六三) 香嚴擊竹 (葛藤集)

香嚴知閑禪師一日芟除草木因以瓦礫擊竹作聲廓然省悟乃述頌曰、一擊忘所知更不假修治、動容揚古路不墮、悄然機處々無蹤跡、聲色忘威儀、諸方達道

者、咸言上々機。

答 起立して掃除の模様をなし、塵埃を放棄する態にて、同時に、カチ／＼と、竹に石の當りたる所を演ず。

六四 奚仲造車 (無門關)

月庵和尚問僧奚仲造車一百幅拈却兩頭去却軸明甚麼邊事。

答 坂を上る車を推す模様をなし、ギシ／＼ゴロ／＼と云ふ。

六五 路逢達道 (無門關、葛藤集)

五祖曰路逢達道人、不將語默對、且道將甚麼對。

答 此處から某所へ往くには門前を出て、何處其處を通り何方へ往きますと、參禪せる所を起點として一二里隔りたる所に行く順路を述べ。

六六 開士入浴 (碧巖七八)

古有十六開士、於浴僧時隨例入浴、忽悟水因、諸禪德作麼生會他道妙觸宣明成佛子住、也須七穿八穴始得。